

---

# 緋弾のアリア お人よしな梶雄

だしまき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア お人よしな梶雄

### 【Zコード】

Z2915Y

### 【作者名】

だしまき

### 【あらすじ】

平凡なDランク武僧、松永秋空は三年前のある事件がきっかけで三次元の女に絶望していた。今日も秋空は路上でカツプルを見かけると爆発しろと念じ、週に一回ゲーム屋で中古のギャルゲーを漁る、そんな平凡だが幸せな日々を謳歌していた。しかし秋空の日常は、道端で出会った一人の少女のせいで一変する。「あんた、私の奴隸になりなさい」

愉快なオリキャラ達による、慌ただしいサイドストーリー・・・的なを書けたらいいな・・・的

## プロローグ 「春休み終了」のお知らせ（前書き）

この小説を読むときの注意点です。

- ・この小説は「緋弾のアリア」の一次創作です。
- ・作者は小説を書いて公開するのが初めての素人です。文章表現、構成力はとても稚拙なものです。要するに駄文、駄作です。
- ・「緋弾のアリア」の二次創作なのに、序盤アリアキャラがあんまり出てきません（え
- ・まつたり更新します。
- ・オリ設定があります。

以上の五点で一つでもダメな点がある人は、戻ることを強くおすすめします。

## プロローグ ～春休み終了のお知らせ～

田覚えは最悪だった。

頭が痛い。ガンガン痛むわけではないが、こう、何か圧迫されているような感じ。

ぼーっとした頭で、今自分が椅子に座って、何かゴシゴシしたものに顔を押し付けているのを理解する。

怠い体を起こすと、無機質な黒いパソコンの画面が田に映った。わざわざまで顔に当たっていたのはキーボードのようだ。

ほとんど無意識の中で右手に握つたものを動かす。これは……無線マウスか。

しばらくして、画面に笑顔でこちらを見つめている蒼い髪の女子が映った。

「由良…………？ そうか、俺、寝てたのか…………」  
かすれた声で俺は言葉を絞り出した。

そう。俺は昨日買つてきたゲームのCDをコンピュートしようとしていたんだ。ついでに某動画共有サイトで面白そうな動画を探したり、行きつけの某掲示板を覗いてみたり、前期観ていなくて気になっていたアニメを見始めたりはしていたが……とにかく、俺は春休み最後の時間を楽しんでいたわけだ。それがまあ、いつの間にか寝オチしていたらしい。

画面右下のデジタル時計を見ると、七時六分と表示されている。四時くらいまでは起きてた記憶があるから、睡眠時間三時間ってところか。何だ結構寝てるじゃないか。

「秋空？」起きてる？

不意に、ドアの向こうから控えめに俺を呼ぶ声がした。

「ああ、起きてる」

「あ、よかつた。朝はん出来てるから、食べに来てね」

パタパタとスリッパの足音が遠ざかっていく。

「秋空つーおつはよー」

「……抱きつくな。姉さん」

顔を洗つてからリビングに行くと、姉の葉月に後ろから抱きしめられていた。一体、どこに隠れていたのやら。

「えーいいじゃない。……ん? 秋空また夜遅くまで起きてたでしょ」「何でわかるんだよ。てか離れる。制服、皺になるぞ」

「声が疲れてるよー。もう、今日始業式なのに」

「始業式なんて適当に寝とけばいいだろ。それより、飯食つから離れろ」

いい匂いのする長い髪が俺の耳元をくすぐり、背中には柔らかい双丘が押し付けられる。男子高校生としては素晴らしいシユチュエーションかもしれないが、相手は実の姉。現実は時に非情だ。

「んー。キスしてくれたら離れてあげる

「バカな事言つてないでさつさと離れる」

俺は姉さんを無理矢理引きはがすと、椅子に座る。

「パン一枚でいい?」

キッチンの方から姉さんが尋ねてきた。

「いや、一枚でいい」

「ん、わかった」

机に置かれた新聞を手に取る。ニュースなんてどうでもいいが、四コマ漫画と将棋の欄は毎日確認している。

「はい。お待ちどーー」

「ああ、ありがと」

皿に乗ったパンと、苺ジャムと、コーヒーがテーブルに置かれる。俺は新聞を置き、ジャムを塗り始めた。

「ねー、秋空

「ん?」

パンを一口含む。うむ。美味しい。ジャムの甘さが寝ぼけた脳に染み込むようだ。

「今日私、多分帰り遅くなるから」飯先に食べててね

「ん、わかった。また、依頼か？」

「うん。ごめんね。なるべく早く帰つてくるから」

「ん、了解」

どうやら、また姉さんは何か面倒な依頼を受けたらしい。

依頼、というのは、武偵高校が民間から受け付けている依頼だ。難易度に応じて報酬と単位がもらえる。

とはいって、別に姉さんが単位ギリギリなわけではない。留年しているが、決して頭が悪いなんてことはない。むしろ姉さんは百年に一度と呼ばれるほどの天才だ。

まあ、むしろその天才っぷりが原因で、学校側からの姉さんへの依頼がたびたび来るのだ。単なる迷宮入りした事件ならまだ簡単な方で、時には同じ武偵高校のSランク生がさじを投げた事件の依頼なんかを受けているらしい。要は学校の信頼を落とさないための尻拭い、というわけだ。

別に強制ではないのだが、おつとりしていく押しに弱く、お人よしな姉さんは受ける必要のない依頼を月に一、二回ほど受けてくる。にしても 高校生が探偵業の依頼か。しかもモノによつては命に関わる。

つづづく、普通じゃないよな。あの学校は。

「ごちそうさま」

パンの最後の一 口を食べ、残っていたコーヒーが喉に流し込んで、俺は手を合わせた。

時計を見ると 七時十六分。

「姉さん。俺に構わず、さっさと行っていいんだぞ？」

「え？ いいよ。待つてる」

テーブル前のソファーに座つて、携帯をいじりながら姉さんは答えた。

「どうせまた学校で会うんだし……それに、今日の依頼の資料とか早めに目を通しておきたいんじゃないのか？」

「う、うん。まあ……わかった。じゃあ、先行つてるね。秋空も『気を付けてね』

姉さんは携帯をたたむと、脇に置いてあつた鞄を持ってそのまま出て行こうとする。

「……って、ちゃんと銃持つたか?」

「あ、忘れてた……」

慌てて戻つてくる姉さん。

「氣を付けるよ。最近は『武偵殺し』なんてやつもこるんだしな」

「『武偵殺し』?」

「年始に周知メールが出てただろ。まあ、もう捕まつたけど」

「……ああ。でもあれ、本当に捕まつたのかなー……」

「…どういうことだ?」

「いや、何でもないよ」

「とにかく、姉さんはVランク武偵で、狙われやすいんだ。流石に朝っぱらの、武偵高の生徒がうじゅうじゅういる通学路で攻撃されるなんてことはまずないだろ?」が……氣を付けておへこ越した」とはない

「はいはい。わかつてゐわよー。じゃあ、今度こそ行つてくれるねー」

「ああ。また後でな」

そんなやり取りの後、今度こそ姉さんは出て行つた。

俺も支度を整えて……いや、その前にちよつと、例のゲームのイベントを進めておこう。

浴室に戻り、着替えながらだらだらとキャラ達の会話を読み進めしていく。朝から可愛い女の子達(一次元)に癒される幸せに思わず頬が緩む。子供には見せられないようなシーンまで行つたところで、俺はセーブしてウインドウを閉じた。

ふと時計を見ると、時刻はいつの間にか七時一十七分を示していた。今から家を出れば七時三十四分のバスになる。

「家のバス停から近いし、まだ余裕で間に合つただが、これからこの時間になるとバスが混む。混んだバスや電車は嫌いだ。

仕方ない。今から行つて、バスが混んでたら歩いつ。そして始業式はサボるう。

結局。この日、七時三十四分のバスはめちゃくちゃ混んでいた。乗れないことはないが、俺は押し合ひ乗客を横目で見ながらスルー。眠気覚ましも兼ねて、のんびり歩いて行くことに決めた。

生涯。  
生涯、俺はこの七時三十四分のバスに乗らなかつたことを悔やむ  
だろつ。

なぜならこのあと、俺は出金つべくして出金つてしまつただから。  
横井琴音に。

## 地面上に女の子が

寝才チ特有の氣だるい体を引きずつて、俺はようやく武偵高のあ  
る人口浮島、通称学園島に辿り着いていた。

途中、コンビニで漫画を立ち読みしてきたからだろう。すでに始  
業式開始ギリギリの時間になつていてる。まあ、元々サボるつもりだ  
つたし、いつか。

心地よい春の風と、陽気を浴びながらの登校はちょうどいい運動  
になつた。春休み中は運動不足だつたせいか、ちょっとしんどいが。

「 しゃがります」

「 ……ん？ ……遠山？」

今通り過ぎて行つた自転車に乗つていた男を見て、俺は呟いた。  
遠山キンジ。俺とは顔見知りで、今の自転車に乗つっていた人物だ。  
何やら急いで、というか焦つて、しかも何故か周りをしきりに見て  
いたようだが。しかもなぜかボーカロイドの声も聞こえたし……そ  
う思つてもう一度遠山の方を見直した。

ああ。なるほど。

「 チヤリジャックかよ。珍しいこともあるモンだな」「  
つづづくトラブルに巻き込まれやすいな。あいつは。

ここからじや見えにくいや、自転車と並走している無人のセグウ  
エイにスピークーが乗せられている。それに、スピークーの影にな  
つていてほとんど見えないが、棒状の何かが突出してゐるようだ。  
多分銃だらう。

さつきの遠山の青い顔とスピークーから聞こえてきた声を考慮す  
ると、大方『武偵殺し』の模倣犯と言つたところか。随分と暇なこ  
とを考える輩がいたものだ。

助けに行こうかと一瞬思つが、どうせこの距離じゃ追いつかない  
し、何より遠山はあれくらいで死ぬようなやつじゃない。俺が行つ  
ても逆に足手まといだらう。

後で生死の確認くらいはしておくか。

それにしても遠山も始業式遅刻とは……あいつ、来年の四月には普通の高校に転入するとか言つたのに、そんなんで大丈夫なんだろうか。まあどちらにせよ、武徳高がそう簡単に遠山を手放すとは思えないが。

「はつ……ぜえ……ま……待ちな……ぜえ……  
どわり。」

「ん？」

思惑にふける俺の耳に、後ろから何か重たい物を落としたような音が聞こえてきた。何事かと振り返ると、

「……え？」

……ちよつと信じられないものを見てしまった。硬直し足が止まるとき同時に思わず自分の目を疑つ。もしかすると、チャリジヤックより珍しい光景かもしない。

倒れているのだ。女の子が。うつ伏せで。

しかも武徳校の制服を着ている。身長から察するに中学生だろう。

「お、おい！ 大丈夫か！？」

俺は慌てて駆け寄つてしゃがむと、少女を仰向けにした。そして首元を抱え上げて膝に乗せる。

「おい！ しつかりし……」

しつかりしろ、と言いかけた先の言葉は出てこなかつた。

（か、可愛い……）

その女の子を見て、俺は事態を忘れて思わず釘づけになつていた。整つた顔立ち。絹糸のように細い、サラサラとした亞麻色の髪。林檎のような朱色に染まつた頬。桜色の唇。そこから漏れる上気した吐息が艶めかしい。

「あ、あんた……」

少女の蚊の鳴くような声ではつと我に返る。よかつた……とりあえず声を発することができないほど衰弱しているわけではないらしい。

「大丈夫か？」

「あんた……何で……追いかけないのよ」

え？

息絶え絶えに少女が何か言ったが、よく聞き取れなかつた。

「あ、ああ。その」とか。つて、もしかしてあれを追いかけて

なじみへ

苦しそうに少女は頷いた。

武備憲章第一條はあるでしょ。何間を出し、何間を取れよ。

「ああ、なるほど。ご立派なこつた。けど、大丈夫だ。あの自転車

「河で そんなことをあんたが

「あいつとは知り合いだからな。仮にも強襲科でランクの武僧だ」  
アサルト

嘘だけど、いやまあ

安心したからか、少女の臉が徐々に落びていく。

「ね、ねこ、うめ、ねめ……」

「もうダメだめ

卷之三

糸の切

糸の切れた操り人形のように、少女の身体から力が抜ける。自然に少女が俺に身を預ける形になるが、彼女の身体は驚くほど軽い。俺へのツツコミもない。どうやら気を失つたらしい。

- はあ……

ツツミのないボケの虚しさにため息をつく  
これから、どうしようか。

それほど遠くないところから、爆発音が聞こえた気がした。

「失礼します」

両手がふさがっているため足で扉を開ける。

「…………ないか」

本来教師がいるはずのそこは空席で、机にビーカーに入った薬品やファイルが雑多に置かれているだけだ。

「ここは保健室。こんな物騒な高校だが、怪我の治療は衛生科や救護科なる学科が受け持つていてるため、厄介になる生徒は少ない。ほとんど形だけの部屋だ。」

その証拠にベットを見ると、ハツある全てが見事に無人。まあ初日から保健室を利用する特殊な生徒がそういうとも思えないが。俺は手近なベットに、背負つた少女を降ろしてシーツをかぶせた。どうやらまだ気絶しているらしい。目を閉じた少女は精巧な人形のようで、気が付くと魅入られたかのように見つめている自分がいる。……いかんな。どうも相当寝不足らしい。いくらこの子が可愛いからって、普段の俺なら三次元の女の子に見惚れるなんてことはない。

「んん……」

少女がかすかに瞼を震わせた。

「ん……あ、あれ？」

「起きたか」

「私……」

辺りを見た少女は、困惑した顔でこちらを見上げてきた。

「覚えてるか？お前、自転車を追いかけて、俺の目の前で倒れたらんだ。ここは武偵高の保健室だ」

「そうだった……って、あの自転車に乗つてた人は……！」

そう言つなり起き上がる少女だが、

「きゅう……」

「急に起き上がるから……大丈夫か？」

「うう……」

ゆづくじとまたベットに戻つていく少女。俺は鞄からまだ開けて

いない水の入ったペットボトルを取り出して、少女に手渡した。

「ほら、飲め。遠山……あの自転車のやつなら無事だ。さつきメールで確認した」

「そう……犯人は捕まつたの？」

「いや。一応調査中らしい」

さつき周知メールが来た。恐らく犯人は見つからないだろうが。

少女が水を飲む。しばらく沈黙が続く。

「横井琴音」

水を飲み終わった少女は、急にそう口にした。

「ん？お前の名前か？」

「そうよ。今日は助けてくれてありがとう」

「どういたしまして。じゃあ、俺はもう行くぞ」

少女 横井も無事だったみたいだし、自分のクラスに行こうと俺は手提げ鞄を持って出口の方へと向かった。

「……待って。ねえ、二つほど聞きたいことがあるんだけど

横井に呼び止められて振り返る。聞きたいこと、か。一つは予想できるが……さて、なんて答えようか。

「何だ？」

「何で……チャリジャックを見捨てて、私を助けたの？」

まあ、これは正直聞かれるかもとは思っていた。何せ明らかに命に関わるチャリジャックを見逃して、たまたま近くにいた少女を助けたのだから。

「チャリジャックはほつとっても何とかなるだろうって思ってたし、あの距離で向こうは自転車だ。走っても追いつかなかっただろうしな」

俺は振り返って壁にもたれかかると言葉を続けた。

「逆にお前は俺の目の前で倒れてたからな。スルーするわけにもいかないだろ」

「ふーん」

興味なさそうに横井はそう言った。自分から振った話題だらうに

.....

「逆に聞きたいんだが、何で俺がチャリジヤックに気が付いてるってわかつてたんだ？」

「たまたま聞こえてたのよ。『チャリジヤックかよ』って

「ああ。なるほどな」

「そういえばそんなことを呟いたような気がする。

「で、二つ目の質問なんだけど……あんた、もうチームは組んだの？」

「？」

「これは完全に予想外の質問だった。質問の意図は全くわからないが、とりあえず答えを返す。

「組んでねーよ。まだ一学期の初日だぞ？」

「こんな早くにチームが決定しているところがあつたら、それはよほど自信があるか、よほどバカかのどちらかだ。

「じゃあいいわ。あんた……私の奴隸になりなさい」といきなり横井が口にした言葉に硬直する。

「……何だって？」

「…………すまない。もう一度言つてくれるかな？」

「聞き間違い、だろうか。今、おおよそ日常生活で明らかに使われない単語を耳にしたような……

「はあ……使えないわね。一回で聞き取りなさいよ。奴隸よ、ド・レ・イ。あんたは今日から私の奴隸なの！」

「…………市民。奴隸とは何ですか？」

「よりもしないレーザーガンを取り出したい衝動に駆られる。

「ちょ、ちょっと待て。何だそれは」

「それもこれもないわよ。あんたは私の奴隸になつて、一緒にチームを組むの。わかつた？」

「…………

「あ、頭が痛くなつてきた……何だこいつ。

「拒否権は？」

頭を押さえながらそう聞くと、

「あるなら最初からこんなこと言わないわよ」

「……だが断る」

もう限界だ。行こう。

俺は保健室を出て、後ろ手にドアを閉めた。

……今のことば、ちょっと理解不能過ぎた。何だかよくわからな  
いけど、忘れよ。きっとそれがいい。

俺は少し足早に、一年の教室に向かった。

その後、俺は何とかHR<sup>ホールム</sup>に間に合い、席についていた。

一年B組。俺の数少ない友達である遠山キンジ、峰理子とは別の  
クラスになってしまった。しかも、あまり居心地のいいクラスでは  
ない。

パツと見、強襲科っぽいやつは少ないクラスだし、一見問題なさ  
そうに見える。が……

「秋空。今年も一年よろしくねー」

後ろの席から俺に話しかけてくる、その声が俺より一つ年上の姉  
なのは問題でしかない。

「……よろしく」

……いや、だがそれはまだいい。まだ、いい。姉が留年している  
のにはわけがあるし、毎年姉とクラスが同じなのはきっと偶然だ。  
そう信じたい。

それよりも、もっと問題がある。  
ちらりと右に視線をやると、

「……」

俺の右の席には女生徒が座っている。俺より少し遅れて教室に入  
つてきて席に着いたつきり、ずっと本を読んでいる。集中している  
らしく、俺の視線には気づいていないようだ。

女生徒の髪の毛に目を移すと、それは見事な亞麻色だ。背は低く、  
机の高さと首の高さが同じくらい、踵も地面につききっていない。

顔も端正な顔立ちで……間違いない。さつきまで保健室で話していた少女、横井琴音だ。

さつきまで俺のことを奴隸にするなんて言つていたのが嘘のよう<sup>うそ</sup>に、静かに本を読む横井は理知的な雰囲気を醸し出している。（本当に）……さつきは何だつたんだろう。隣の席なのに何もしてこないつてことは、からかつてただけなのか）

「はい。ではホームルームを始めます。まずは自己紹介からかな」

いつの間にか教壇に立つていた教師の言葉で我に返る。

担任は去年と同じようだ。若いのにいつもどこかくたびれていて霸氣のない、どうも苦労してそうな男性教師。名前は斎藤京介。「じゃあ五十音順に。左の列の人から一人づつ……」

「ぎゅぎゅん！」

今、隣の教室から銃声が一発分聞こえてきた気がするんだが……

「コホン。一人づつ前に来て自己紹介をしてください。名前、専科、趣味、特技だけは必ず言つこと。では、どうぞ」

斎藤先生。どうやらなかつたことにしようとしてゐらし。やっぱり、苦労してるな……

「……です。探偵科で、趣味は……」

生徒達も何事もなかつたかのように普通に自己紹介をしている。この学校大丈夫だろうか……

俺の心配をよそに、滞りなく自己紹介が進んでいく。

「……上泉久遠。超能力捜査研究科《SSR》。……趣味も特技も特になし」

もう力行か……つて、『特になし』ありなのかよ。

そう思つて顔を上げて、

「え？」

思わず自分の目を疑つた。

それくらい、教壇に立つその少女は美しかつた。人間離れしていふと言つてもいい。周りを見ると、男女ともにかなりの人数が心を

奪われたかのように見惚れていた。

まず目を引くのは、その長い髪。腰まで届こうかといつその長髪の色は見事な白銀だ。ほとんど白に近い白銀。それが雪のように白い肌や華奢な体躯とよく合っていて、どこのファンダジー世界のお姫様がそのまま抜け出してきたのではないかと疑ってしまう。

顔を上品な顔立ちで、見た感じ百四十もなさそうなほどの低身長が保護欲を搔き立てる。ますますお姫様のよつた印象だ。

「次、どうぞ」

どこか疲れたような斎藤先生の言葉でハツとなり、次の生徒が慌てて前に出た。

「……です。装備科で……」

自己紹介が再開された。再開、といつのもおかしいかもしねないが。

それにしても可愛いやつだった。いまだに何人か上泉の方をぽーっと見つめているやつがいるし。

「す、鈴木桜ですっ！」

また中々可愛いやつが教壇に立つた。実は当たりなクラスなのだろうつか。

黒髪のショートヘア。くりつとした垂れ目が印象的だ。

「探偵科で、ええと、しゅ、趣味は料理です。特技は、ええと、ええと……あ、ありません！」「めんなさいっ！失礼します！」

鈴木はぺこりと頭を下げるが、そそくさと自分の席に戻ってしまった。

慌ただしいやつだな。

「……です」

順番が流れしていく。鈴木の後は特に興味を引くやつはいなかつた。そして、俺の前の席のやつが教壇へ向かう。

次は俺か。

前のやつが戻つてくるのと入れ違いに、俺は立ち上がりと教壇へと歩いて行つた。

「 松永秋空だ。探偵科。趣味は読書。特技は手品だ。よろしく  
手品、と言つても麻雀やトランプなどでのイカサマのことだ。あ  
まり人前で披露できる類のものではないが……まあ嘘は言つていな  
い。

言い終わるや否や席に戻る。少し緊張したが、別段おかしい点は  
なかつたはずだ。

「まつながはつき  
松永葉月です」

問題はこの姉だ。

姉が名前を名乗った途端、教室がざわめきだす。

「松永葉月って、あの?」「天才とか言われてるんだろ?」「あれ  
? そういえばさつきのやつも松永つて言つてなかつた?」「  
はいはい静かに」

斎藤先生が手を叩くと、ざわめきは徐々に引いていった。

「えーっと。続けていいのかな?……改めまして、松永葉月です。  
さつき自己紹介してた、秋空の姉です」

余計なことを……

「探偵科です。趣味は料理。特技は速読かな?一年留年してるけど、  
気にしないで気軽に声をかけてくれると嬉しいです。よろしくね」  
そう言って姉は席に戻った。姉も俺も、この後何かしら色々聞か  
れるんだろうな……留年生なんて珍しいし。

富島、富中、森……ハ木、山本……途中ちょっと変なやつはいた  
ものの、順調に年始の恒例行事は終わろうとしていた。

ここまでは。

「横井琴音よ」

(あ、あいつ……!)

すっかり忘れていた。いや、忘れたかった、の方が正しいのかも  
しれないが。

「探偵科。趣味は漫画とT R P G。特技はエッグドロップ」

どんな特技だよ……

しかしそれ以外はいたつて普通の自己紹介、か。

「そして、松永秋空！私はあなたに言いたいことがあるわー。」

「……」

俺はその言葉につづつとしそうに田線だけやるが、内心めちゃくちゃ焦っていた。

全然普通の自己紹介じゃないじゃないか。

「え？ 何々？」 「あいつ、あの可愛い子と知り合ったのか？」 「松永許すまじ」 「もしかして付き合っているんじゃ……」

……色々と飛躍しちぎだり……ともかくこつらが推理が得意な集団とは思えない。

それよりも、俺は目立つのが嫌いなのだ。なのに向でこんなことに……

「秋空！ あんた、さつきの話に納得しないでしょ。だから今、クラス全員の前で誓つてもらひわよ」

何だと？『やつきの話』？ って、まさか……

「おいお前……」

まさかクラス全員の前で「奴隸になれ」なんて言い出すんじゃ……ここにこるやつらがそんなこと聞いたら、絶対面倒なことになる。質問攻めにあうこと必至だ。

「ふふ。察しがいいわね。まあ昼休みに私と付き合つなんなら、言わないでおいてあげる」

「……」

あ、悪魔か……

「どうするの？ 後三秒以内に決めなさい」

「え？」

「さーん……」

「わかったー昼休みだな！？ いいぜ、ちょうど暇だったからなー。」

俺はもう、そう答えるしかなかつた。

つづ……何で俺がこんな目に……

「よし。決まりね。昼休み、楽しみにしてるから」

意味ありげにそう言うと、横井は自分の席へと戻つていった。

「お、お。昼休みに一人だけでテー、トだと」「何だ、あいつ。地味なやつだと思つてたのに、あんな可愛い彼女がいたのか。まじで爆発しろ」「そういう、え、ば、あの一人始業式いなかつたよね。一人で何かしてたんじや」「

教室は、いまだにざわざわしているが、斎藤先生はもうどうでもよくなつたのか、止めるつもりはないらしい。

「じゃあ、H.R.終わります。あんまり騒いで他の教室に迷惑かけないよう」。「では」

斎藤先生はそのまま教室を出て行つた。先生、多分誰も聞いてないぞ……

「お前、どうこうつもりだ?」「戻ってきた横井に問い合わせる。

「話するくらい、別にいいでしょ?そんなに時間は取らせないわよ」涼しい顔でそう答える横井は、それに、と言葉を続けた。

「秋空にとつても悪い話じゃないはずよ」

「……わかった。話だけは聞いてやるよ。けどその代り、また奴隸とか何とかふざけたこと言うのはなしだ」「私は本気なんだけどね……まあいいわ。続きは昼休みに話しましよ」

話は終わりと言わんばかりに、横井は本を取り出して読み始めた。……わからんやつだ。破天荒なやつかと思えば、あんなことをしてここまで冷静でいられる。

大物、なのだろうか。

少なくとも、これだけは自信を持つて言える。

俺はここが、ものすごく苦手だ。

「はあ……」

俺はため息をつくと、周りの野次馬をビリするかのように思案を巡らせた。

幼女の需要と、平穏な昼休み（前書き）

今回は雑談パート。

## 幼女の需要と、平穏な昼休み

昼休み。クラスメイトからの質問責めを何とかまいた俺は、横井との待ち合わせ場所である理科棟の屋上にいた。やつらも、流石にここまで追つてくることはないらしい。この後教室に戻るのがいさか怖いが……

横井はどうだろうと辺りを見回すが、どうやらまだ来ていらないらしい。横井もクラスメイトをまぐのに必死なのだろう。俺は携帯でもいじりながら気長に待つことにした。

「さつき教務科から出てたメールを。二年生の男子が自転車を爆破されたってやつ。あれ、キンジじゃない？」

数人の女子がしゃべりながら屋上にやつてきた。屋上ってあまり来たことがないが、昼休みは混んだりしそうなイメージだ。出来ればさっさと用事を済ませてしまいたいところだな。

「あ。あたしもそれ思った。始業式に出てなかつたもんね」「うわ。今日のキンジってば不幸。チャリ爆破されて、しかもアリア？」

遠山の話題か。チャリの件はともかく……『アリア』? どうもまた面倒だとに巻き込まれてるみたいだな。

「お待たせ」

いつの間にか後ろからトントンと肩を叩かれていた。

「おお。早かつたな」

携帯を閉じて振り返ると、横井と田があつた。それにしても小さいな、こいつ。

「奥の方に行くわよ。色々と、聞かれたくないようなことも話すかもしれないし」

「了解」

何を話すつもりだろうと思つたが、あえて何もツッコまないことにしてた。

屋上の奥に陣取ると、俺は弁当の風呂敷包みを広げた。ちなみに弁当は姉さんが作つた。俺もたまに作るが、基本毎日姉さんが作つてくれていて、本当にありがたい。

「つて言うか、お前それで足りるのか？」

横井は手に、購買で買つてきたであろう焼きそばパンを持つていたが、どうやらそれだけのようだつた。

「足らなかつたら秋空の弁当から少しもりりつわ」

「……まあいいけどさ」

「いいんだ……秋空つて結構お人よしよね」

ちょっと呆れたように横井が言つた。

「そんなことを言われたのは初めてだな」

「そう？ 何だかんだで私の話も聞いてくれるし」

それはお前のせいだろう……と思ひながらも口には出せなかつた。一段になつてゐる弁当箱の蓋を外す。中身はほとんど余りもの詰め合わせだが、姉さんの謎の技術によりとてもそつは思えないほどに美味しい。

「じゃあ、いただきま……」

「もぐもぐ。美味しいわねこのだしまき卵」

「……別に食つのはいいんだが、せめて自分のパンを食いきつたらにしてくれ」

どんだけ食ひ意地張つてるんだよ……

「で？ 話があるんだろ？」

ピリッとのりたまふりかけの袋を開けながら、俺は横井に言つた。

「ええ。つて言つてもさつき保健室で言つたのと同じよ。私とチークを組みなさい」

「……」

さて、どうしたものか。

冷静に考えればこの申し出、別に受けてもいいはずだ。

だがいくつかの疑問と、会つてまだ数時間の横井に対する警戒心

が俺を踏みとどまらせていい。

「ぶつちやけ、胡散臭い。

「まず聞くが、何で俺なんだ？」

「とりあえずそう尋ねると、横井は焼きそばパンにかぶりつきながら、

「んー。勘？」

「真面目にしないと話聞かないって言つたよな？」

「そしてパンをくわえたまま上田遣いはやめる。

「冗談よ。いやまあ、あながち間違つてはいないんだけどね」お茶のペットボトルの蓋を開けながら、横井は言葉を続けた。

「秋空はどうして今朝のチャリジャックがわかつたの？」

「随分と急な質問だな。どうしてって言われても……普通気づくだろ。遠山は相当焦つてたみたいだつたし、並走してたセグウェイは明らかに不自然だし……」

そこまで言うと横井は深いため息をついて、

「普通気づけないわよ。まあAランク武僧が十人いたとして、そこまでの観察力を持つてるのが六人、それらの情報をチャリジャックと結び付けられるのは一人いるかいなかつてところね。それにチャリジャックまで思い当たつたとして、それを信じられる人なんてそういういないわよ」

「それはAランク武僧を舐めすぎだろつ……ちなみにお前はどうつて気づいたんだ？」

「私は普通にサドル裏のプラスチック爆弾が見えたのよ」

「……」

「な、何よその憐みに満ちた田は……」

「……いや、何でもない」

サドルの裏側が見えるくらいの身長つて……と聞こえなくなるも、すんでのところで言葉を飲み込んだ。

「何よ何よー！いーわよ私は低身長でー需要はあるんだからー」

「それは……一部の紳士達限定では？」

まあこいつ見て俺も紳士なんだが。

「つるさいー今は幼女が微笑む時代なんだ！今にわかるわよー。」

「声マネ頑張ったな。全然似てないけど。……この俺の顔より醜く焼けただれる！」

「え、すごい。結構似てる……」

横井は感心したのか目を丸くしていた。

「こんなのも出来るぞ。……イメージするのは、常に最強の自分だ」「おお……！」

「氣を付ける。触ると一瞬で淨化されてしまうぞ」

「おおーす」「いやない！」

「……最近の女子高生って、今のネタ全部わかるのか……何か、知りたくなかつた現実を知つてしまつた気がする」

急激にテンションの下がる俺とは裏腹に、さつきまで怒つていたのが嘘のように、横井は楽しげな様子で言つた。

「わかるわよそれくらい。どれもメジヤーなネタじゃない」

「まあそうだけど……つて、かなり話が脱線したな。何の話してたつけ」

確かに……横井の身長が低いつて話だったか？

「今、何かすごく失礼なこと考えてなかつた？」

ふと見ると、横井が笑顔で震えるこぶしを握つていた。

「いや何も？」

「怖すぎるーやっぱりまだ怒つてるのか。」

「言っておくけど、私がサドルの裏側を見たのはたまたま携帯を落として、その時にしゃがんだからよ」

「そ、そつか。そつだらうな……」

まあさすがの横井でも、サドルの裏を見上げるのは無理があるからな。多分。

「わかればいいのよ。わかれば」

そう言つと横井の顔から笑みが消え、握りこぶしも解いてくれた。笑顔があんなに怖いものだとは思わなかつた。

……つて、また話がそれたな。

「話を戻そう。何で俺なんだ？」

「え？ 何が？」

「……」

もうやだこいつ……

「お前、自分が何しに来たか完全に忘れてないか？」

「い、いや覚えてるわよ。ただちょっと、秋空のせいに話がそれたから、それで……」

なぜ俺のせいといふところを強調するのか。

「はいはい。オタクってのは話が盛り上ると周りが見えなくなるからな」

「それは明らかに偏見だし、その自分は違うけどみたいな言い方は腹立つわね……」

そう言って、横井はパンの最後の一 口を頬張った。

「じゃあ、話を戻すわよ。まず秋空が欲しいと思った理由は、今朝のチャリジヤックを一日で見抜いた洞察力よ」

「いや、だからみんなの普通気づくって」

「……まあいいわ。それにそうでなくとも、秋空は去年、ある事件を解決してる。遠山キンジと二人でね」

「……」

まさかあの事件を引き合いで引かれるとほ……一つの間に調べたのか。

「そうだな。確かにそんなこともあった。あのときは遠山の優秀さに、本当に助けられたな」

「そうね。確かに遠山キンジは入学当時Sランクで、入学試験で教官を全員倒すくらい優秀な武僧よ。でも今はEランクだし、何よりホテル全体に爆弾を仕掛け人質を取った犯人グループを、たつた一発の銃弾で仕留めるのはかなり難しいんじやないかしら？」

そんなことまで調べたのか。一体どこまで知っているのや。」

「強襲科のSランク武僧は、一個中隊と同じ戦力があるんだ。それ

くらい出来てもおかしくはないだろ？。それに一発で済んだのは運がよかつただけだし、警察の助けもあったからな」「警察？どうせ最後に犯人グループ取り押さえただけとかじゃないの？」

参ったな。どうやら全てお見通しらしい。

「あんたが何をしたのかまではわからなかつた  
そりや そうだろう。俺は何もしてないんだから」

「けど、これくらい落ちこぼれの私でもわかつたわよ。秋空が作戦を考えて、遠山キンジがその通りに行動した。そうでしょ？」

「……まあ確かにその通りなんだが……何と言つか、誇張しそぎじやないか？俺は作戦なんて呼べるほど指示をしたつもりはないんだが」

そもそも遠山なら、俺の指示なしでも充分立ち回れただろ？。本気出したあいは、通常の三十倍程強いらしい。

「とにかく、私から見て秋空はそこそこ優秀な武僧よ。だからさ

さと、秋空の持つ智謀、全てを私に捧げる奴隸になりなさい」

「微妙に某今孔明を意識してるのはわかつたが、そんな要求を受け入れるやつがいると思うか？」

奴隸つて……

「じゃあチームメイトになつてつて言つたら？」

「却下ア」

「つざー言つ方づざつー」

何か一矢報いた気分だ。

「冗談はさておき、まだ疑問は残つてる。もう昼休み終わりそうだし手短に話すぞ。お前、ランクは？」

「Sランクよ」

「……で、ですよねー」

「わかつてたの？」

「A以上だらうなとは思つてた」

行動力は実力に比例する。少なくとも俺はそう思つている。それ

は、いわば実力がもたらす副産物の一つだ。

俺が見た限りでは、琴音の行動力は並みのものではない。何せ自己紹介があれだからな……多分、俺が見た中で誰よりも行動的なやつだ。衝撃的である。

「俺Dランクだぞ？本当に俺でいいのか？」

「いいのよ。まあ、あなたの洞察力も潜在的なものみたいだし、これから私がビシバシ調教してあげるわ」

「調教って言うな。……じゃあ、最後の質問だ。何でこんな早い時期にメンバー集めなんだ？」

そう言うと、琴音はふいっとそっぽを向いて、

「……別に。早いに越したことはないでしょ。兵は拙速を尊ぶって言ひつ」

「……そうか」

俺は短くそう答えた。

なぜかその横顔は、聞かれたくないと黙つているような気がしたから。

気のせいだと呑みが。

「で？どうするの？」

「ん？ 何が？」

「……あんた中々嫌らしげわね」

さつきの「え？ 何が？」のお返しは、どうやら氣に入つてもられただようだ。

「そうだな……奴隸なんてのは「めん」いわむるが、チームメイトにならなつてやるよ」

「ホント？ まあ空ひてぼつちみたいだから、こんないい話断ることはないと思つてたけど」

「お前何てこと黙つんだ……」

まあ特に断る理由もないし、琴音とは話も合つてやつだ。いい話なのは確かだろ？

「ただ、さつきも黙つたが俺はDランク武僧だ。お世辞にも優秀と

は言えない。可能な限り任務には全力をつくすつもりだが、もし俺の実力が不満ならいつでも解雇してくれて構わん」

食べ終わった弁当の空箱を片付けながら、俺は言った。

「よし。じゃあ決まりね。これからようしく

「ああ、よろしく。……『ゾンゴトモ』『ロロシク』

「そんなわざわざ聞こ直さなくとも……」

琴音は呆れたような、でもちょっと嬉しそうな様子でそう言った。これが俺の基本平和で、ちょっと慌ただしい日々の幕開けだった。

## 苦勞人の知り合い（前書き）

今回も ggd ggd と 雑談パーティー。

## 苦労人の知り合い

午後七時半。

クラスのやつらからようやく解放された俺は、家の近くにある本屋のライトノベル「一ナーラー」にいた。そこそこ大手の本屋の支店で、ラノベやTRPG関連の本も結構置いてあるところだ。

帰り道の途中にあるということもあって、俺は要もなくここに寄ることが多かつた。つまるところ冷やかしながら。

俺は平積みされている新人賞受賞作品を一冊手に取ると、立ち読みを始めた。

（……これからどうなることやら。ロランクの俺がSランクの琴音と組んだんだ。風当たりは強いだろうな）

読んでからしばらくして、本の内容そっちのけでそんなことを考えている自分がいる。

あの屋上でのやり取りの後、琴音からは何も話しかけてくれることはなかつた。勿論俺からも話しかけにいくことはない。

俺はこれ以上クラスのやつらに話題になりたくない。それは、多分琴音も同じだろう。お互いそのことはよくわかっているようだった。

だが自己紹介のときの琴音の行動が気にかかる。俺と話をするなら、他にも方法はあつたはずだ。なぜ、あんなに目立つような真似をしたのか。

それにまだ気になることはある。

自分で言うのもなんだが、俺は結構人見知りをする。後、若干口ミユ障の気がある。そんな俺がほぼ初対面の、しかも苦手意識のある女子相手にあそこまで自然に会話出来るのは……話題が合つとは言え、琴音とは初めて会つた気がしないほどだった。

もしかしたらそれは、琴音の人柄が成せる技なのかもしれない。

「ふーん。中々見る目があるじゃない」

ふと耳元で、鈴の音のような綺麗な声が聞こえた。ふわりと石鹼のような、甘い匂いがしたかと思うと、

「う、うわっ！」

琴音が背伸びして俺の手元の本を覗きこんでいた。サラサラとした亞麻色の髪が一瞬手に触れる。

「び、びっくりした……いつの間に……」

「秋空が立ち読み始めたくらいからよ」

驚いた。まだ心臓がバクバク鳴っている。

まさか琴音のことを考えているときに、ピンポイントで本人登場

とは。

「それ、面白いわよ。個人的にはオススメ」

「お、おお。そうか」

同様の余韻が残ったまま、俺は何とか返事をした。

琴音はくすっと笑うと、

「びっくりしそぎよ。仮にも武偵なら、これしきのことで動搖しない」

「……了解

「で、秋空は何を買いにきたの？」

「特に何も。面白そうなものがあれば買つかも程度。お前は？」  
そう尋ねると、琴音は肩をくじめて言つた。

「同じよ。何か面白いラノベない？」

「そうだな……って言つてもお前が何読んでるか知らないし」

「まあそうよね」

言いながら、琴音は本棚の一冊に手を伸ばす。

「あー、それは俺も表紙につられて読んだな」

「へー。内容は？」

「そこそこ。気軽に読めるのがいいところか」

「んー、じゃあやめとく」

典型的なオタク同士の会話。人から評価されたものほど、そんな

に面白くないものだ。

俺も読んでいた本を元あつた場所にそつと戻した。

「俺はこれからコンビニ寄つてから帰るけど、お前はどうするんだ？」

「私も着いてく

「え？」

「何よ」

「いや、何でも」

少々意外だつた。まさか着いてくるとは。何か話でもあるんだろうか。考えても仕方ないが。

本屋を出る。日はとっくに沈みきり、空は闇色に包まれてゐる。街灯と建物の明かりが街を照らしていた。

「なあ。聞きたいことがあるんだが」

「また？武偵なら自分で調べるなり、推理するなりしなさいよね」

「じゃあ今からお前から話を聞いて調べる」

揚げ足を取つてみると、琴音はむすっとした顔で、

「……しようがないわね。何？」

琴音は憮然顔だが、それでも質問には答えてくれるようだ。

「俺以外に、誰か決まつてるチームメンバーはいるのか？」

「いないわ。でも狙つてるのはいる」

「誰だよ」

「SSRの上泉久遠」

「……あ、あいつか……」

上泉久遠。聞き覚えのある名だと思ったら、今朝の自己紹介のときのあいつか。

「一応理由を聞いておこつか」

「頭脳面は私と秋空で充分だから、戦闘力の保管よ

「……だからつて何でそんな競争率高そうなやつを？」

武偵は超偵に勝てないと言われている。SSRの生徒はそれほど

までに圧倒的だ。恐らく、あの上泉も例に漏れず。

その上あの容貌だ。引く手数多なのは間違いない。

「普通に強襲科のAランクとかじや駄目なのか？」

「そういう妥協をしたくないから、こんな早くに動いてるのよ」

「なるほど。ちなみに他には誰を？」

「狙撃科のレキ」

「ああ……」

有名なやつだな。『ロボットレキ』の異名で知られる、狙撃科の麒麟児だ。極端に無口らしい。

「他は？」

「強襲科の神崎アリア」

「アリア？」

俺は昼休みにその名を耳にしていたのを思い出した。詳細は全くもって不明だが。

「誰だそいつ」

「知らないの？」

琴音は信じられないと言いたげな顔でこちらを見上げてきた。

「そんなに有名なのか？」

「有名も有名。ここに来る前はロンドンの武偵局にて、一度も犯人を逃がしたことがないっていう天才よ。『双剣双銃<sup>カツラ</sup>』って呼ばれてるわ。言うまでもなくAランク」

「一度も犯人を……？ そんなやつが……知らなかつたな」「知つときなさい。それくらいは」

呆れたように琴音が言つ。

「けど、随分ランクの高いやつばっかだな」

「私だつて、今言つた全員をメンバーに加えようとは思つてないわよ。でも、仮に一人でも入つてくれたら心強いでしょ？」

「んー……そんな上手くいかないだろ」

数撃ちや当たる理論。いや、的が多いと考へると逆数撃ちや当たる理論か。

「大丈夫よ。この学校、強いのは腐るほどいるから。それに……最悪誰か一人はチームに入る勝算があるわ」

「勝算？」

「それはこの後説明するわ」

「この後……？」

「それは……」

「ほら、着いたわよ」

ふと目を上げると、夜闇に光る牛乳瓶の看板が見えた。扉を開けて中に入る。時間帯のせいだろうか。少し混んでいるような気がする。

「……ん？」

「どうしたの？」

「いや……」

「あそここじる、なぜか口尖らせて立ち読みしてやつせ……遠山？」

「……あれ、松永？」

読んでる手はそのままに、顔だけ振り返ったそいつは、やはり遠山キンジだった。

「よかつた。生きてたんだな」

周知メールでわかつていたこととはいえ、こうして会つて怪我につないのを確認出来たのは本当によかつた。

「どういうことだ？」

「今朝のチャリジャックお前だろ。お前が青い顔で必死に自転車ごぐの見てたからな」

「いたのかよ！じゃあ助けるよ、この薄情者！」

「おいおい。俺が行つても足手まといになるだけだろつ

「お前弱いけど爆弾の知識だけはそこそこだろ。解除くらじしやがれ」

見ると遠山は額に青筋浮かべていた。

「ねえ、そいつ誰？」

琴音がそう尋ねてきた。

「遠山キンジ。俺の……知り合いだ」

「一番哀しい関係じゃねえか」

遠山は読んでいた近代麻雀を戻すと、じきに向き直つて言った。  
「けどまあ、お前にも彼女が出来るとはな。一応祝つておくよ。名  
前は何ていうんだ?」

「え?」

「か、かか……」

遠山の言葉に日に見えて赤面する琴音。あれ、琴音ってそんなキ  
ヤラだつたのか。

「力力ロット!」

「誤魔化せてないぞ」

一応そう一言ツツ「んだから、

「こいつは……」

「わ、私と秋空は……そ、そんなんじゃないー恋愛なんて……くつ  
だらない!」

「……ということだ。こいつはただのクラスメイトだよ」

そんな大声で強く否定しなくても……他の立ち読みしてゐる人に迷  
惑だろ。

「え?あ、ああ。悪い」

遠山もそこまで強く言われると思つてなかつたのか、少し驚いた  
様子だ。

「わ、私は買う物あるから、ちょっと向こう行つてる」

相変わらず赤面したまま、琴音は逃げるよつにどいかに行つてし  
まつた。

「よく似たやつがいたモンだな……」

「ん?何か言つたか?」

「何でもねーよ」

遠山が何か呟いたのだが、聞き逃してしまつた。

遠山は棚から漫画を一冊抜き取ると、

「まあ、俺はそろそろ帰る」

「あれ、漫画買いに来ただけ?飯買いに来たんじゃなかつたのか?」

遠山といひの『ゴンゴ』で会つことは多い。遠山は寮からすぐ近くにあるし、俺は帰り道の途中にあるからだ。遠山は大概いつも夕飯を買ひに来ているのだが、今回は違つたらしい。

「今日は違つ。実は家追い出されてな……」

「は？」

「いや、朝から変なやつに付きまとわれててな。家まで押しかけてくるわ、ももまんは七つ食うわ、奴隸になれなんて言いやがるし……拳銃の果てには出ていけって……」

お、おい。何か愚痴り始めたぞ……疲れ切つた遠山の顔から察するに、どうやらよほどそいつに迷惑してこらへしこうして。

……つて、ん？ 奴隸になれ、だと？

「……よく似たやつがいたモンだな」

「ん？ 何か言ったか？」

「何でもねーよ」

『奴隸になれ』。流行つてゐるのだろうか。

「まあとにかく、俺はそろそろ戻るよ。じゃあな」

「ああ、またな。何か知らんが頑張れよ」

軽く手を挙げて、互いに別れを告げると遠山はレジへと向かつた。

「で、あんたはこゝに何しに来たのよ？」

「つおおつーきゅ、急に話しかけるな……」

本日一回目。勝手は身長が低いせいが、近づかれても気がつきにく

い。

「まさかあいつと雑談しに来たんじゃないでしょ？」

「そりやな。お前の買ひ物は済んだのか？」

言いつつ、さつき遠山が読んでいた近代麻雀を手に取る。

「ええ。あんたは？」

「これ買うだけだな。つてか、これ買つたら俺は帰るんだが……お

前の『勝算』とやらをまだ俺は聞いてないぞ」

そのままレジまで向かおうとして、

「だから、こゝの後話すつていつたでしょ。あんたの家で」

その足が凍りついたように止まつた。

「……え？」

「どうしたの？早く買つてきなさいよ」

「いやいや。冗談だよな？」

今こいつ、俺の家がどうとか言わなかつたか？

「外で待つてるわねー」

なぜか楽しそうに笑みを浮かべながら、琴音はコンピューターを出でいつた。

「え、ちょ、待て……」

俺の伸ばした手も虚しく……

（確かに、今日は姉さんの帰りは遅いんだつたよな……）

俺はすでに、かなり消極的な思考を始めていた。

「おい。どうしたことだ？」

自宅。リビングのテーブルに買つてきた雑誌を袋ごと置くと、俺は琴音に問いかけた。

「何で、お前が家まで着いてくる

「まあまあ。PS3あるんだし、ijiせとりあえずス4でも、やらないか？」

「やられぬよ。うちはアケコン一つしかないんだよ」

それよりもだ、と俺は言葉を続ける。

「お前何しに来たんだよ」

「決まつてるでしょ？そつときの『勝算』について説明しに来たのよ」

「じゃあもうそれだけ言つてとつとと帰れ」

そもそも俺の家で説明する必要もないだらう。

「上泉久遠、レキ、神崎アリア。この三人のうち最低一人を、秋空が口説き落とす。以上

「は？」

俺が？

「じゃ、私は帰るわ」

「待て待て待て待て」

帰ろうとする琴音の襟首をつかんで引きとめる。

「何よ。帰れって言つたり待てつて言つたり、はつきりしなさいよ  
ね」

不機嫌そうな顔で琴音は振り返った。

「お前、それのどこが『勝算』なんだ?」

「?」

「なぜそこで首を傾げる……」

こいつ本当に探偵科のSランクか?

「私は秋空なら、一人くらい余裕だと思つんだけど。まあいいわ。  
やるだけやってみなさい」

「やだよ」

Sランクって言つたら天才だぞ? 天才つてのは大概相手しにいく  
変人ばつかなんだよ。レキはそのいい例だ。

しかもコミニ障気味の俺にそんなこと出来るわけ……

「もし一人でも仲間に出来たら、『こ褒美にボーカロイド全員の抱き  
枕カバー一式をあげるわ

「やらせていただきます」

その程度なら余裕だ。俺を誰だと思っている。

「秋空つて結構単純ね……まあいいわ。任せたからね」

そう言つて、琴音は勝手にソファードに寝転がつた。スカートがま  
くれて、銃と一緒に白いふともどその奥が少し目に映る。俺は自  
分でもわかるほど顔を赤らめて、慌てて目をそらした。

……琴音の装備はSIG Sauer P230か。覚えておこう。

俺は一瞬だけ琴音の方に視線を戻すと、そう心に留め置いた。装  
備を確認しただけだ。他意はない。白だった。

「どうか、お前の『勝算』つて結局なんだつたんだ?」

「それを考えるのは、秋空の仕事よ」

「ああ、そう……」

まあいいや。抱き枕カバーのためだ。何かしら考えよう。

「で、お前どうすんの？帰るの？」

「こまま帰るつていうのもねー。泊まつていつてもいい？」

「いいわけないだろ」

「こをどにだと思つてゐんだ。姉がいるとはいえ、仮にも男の家だぞ。

「はあ……」

なぜか琴音はため息をつくと、ソファーアップだけ起しつて、

「おい、そこに座れ」

「だから似てないつての。無理すんな」

そもそもあの声マネは女では無茶だ。

「秋空はなぜか私に排他的な態度を取るけど、私達知り合つてからまだ数時間よ？そんなんでチーム組むんなら、もつとお互い一緒に行動して、交友を深めるべきだと思うけど」

俺はその言葉にとつたに答えることが出来なかつた。

「……悪い。正論だな」

女の前で排他的な態度になつてしまつのは、俺の悪い癖だ。直さねば。少なくとも琴音の前では。チームメイトなのだから。「わかれよろしい。じゃあ、今日は泊まつていくから」「それは駄目だ」

「何でよー」

「逆に俺が聞きたいんだが……何で泊まりたいんだ？」

交友を深めるだけなら、学校でいいはずだ。

「それは……」

「かり」

「え？」

琴音が俯いて何か言つたようだが、よく聞こえなかつた。

「何だつて？」

「だから……こまで話題合ひ相手、珍しいかい……もつと話した  
いなつて……」

顔を朱色にして、モジモジと話す琴音。おかしい。現実の女の子がこんなに可愛いわけがない。

だが琴音の言つたことは俺も同じだった。俺もいわゆる、そういうネタが通じるのはネット上以外では琴音が初めてだ。唯一のオタク仲間の峰理子はただのギャルゲー好きだし。

「はあ。しょうがないな……」

今度は俺がため息をつく番だった。

「何、してるの？」

俺は鞄からノートを取り出ると、一ページ分ちぎり取った。  
そして後ろを向いて、それをテーブルに置いた。同じく鞄から取り出したシャーペンで書く。

「ほら」

書き終わったそれを琴音に渡す。

「俺のメアドとスカイプ名だ。何か語りたいんならいつでも相手してやるよ。あ、でも今期のアニメの話は駄目だ。前期もあんまり観てない」

「秋空……」

「まだからとりあえず今日は帰れ。そこで帰つたらメールしてこい。俺も……お前と色々話したいしない」

「これは、紛れもない俺の本心だ。こいつと話してるのは中々楽しい。そうじゃなきゃチームメイトの件の承諾してない」

「……ありがと」

そっぽを向いて、照れ隠しのように琴音は言つた。言って、ノートの切れ端をポケットに収めた。

「じゃ、じゃあ帰るね」

まだ少し顔を赤らめたまま、琴音は立ち上がった。

「ああ。家まで送つていいくよ」

「え? いいわよ」

「もう八時だぞ。女の子一人じゃ危ねえよ

「でも……」

「いいから。ほれ行くぞ」

廊下に一人、縦に並んで歩く。俺が先頭。横に並べないことはな

いが、狭いのでお互い自然と縦になっていた。  
それが悲劇の始まりだった。

ガチャリ。

「――！」

ドアに鍵が差し込まれる音。それに俺は、思わず硬直してしまつた。

姉さんだ。帰ってきたんだ。  
間に合わなかつた。

「え……？きやつ！」

当然、琴音が俺にぶつかつて……

「うおつ！」

折り重なるように、俺達は廊下に倒れた。  
本屋でも嗅いだ甘い香りが鼻腔をくすぐる。少し遅れて、肩に髪の毛がかかる感触がした。

ガチャ、ガチャ。

鍵が回され、引き抜かれる音。  
まずい。

こんな状況。姉さんに見られたら絶対誤解される。  
頼む！開くな！

「ただいまー」

俺の必死の願いも虚しく。  
運命の扉はあっけなく開かれた。

## ヤンテレ姉さん（前書き）

最近は自分の書いた小説を読み直して、あまりの駄文っぷりに悶絶する日々。あ、今回短めです。

後、オリ設定で白雪はC組になつてます。また綴梅子もC組の担任です。

## ヤンデレ姉さん

「」のままではまずい。

冷や汗が頬をつたう。後ろから俺にしがみついている柔らかい感触も、今の俺には焦りを加速させる要因でしかない。

姉さんが、いや誰が見たって今のこの状況は誤解される。自分で言うのもなんだが、俺のことを溺愛している姉さんのことだ。きっと俺の想像もつかない形で暴走する。

離れなければ。まだ間に合つかも。

「ただいまー」

無情にも、あつさりとその扉は開かれた。

「あき……え？」

俺の名を呼ぶ途中で、姉さんは俺達のいる方を見下ろして固まつた。

沈黙と、いたたまれない空気が流れる。

「……」

最初に動いたのは琴音だった。俺の上から退くと、何事もなかつたかのように制服の前についた埃をはたきはじめる。

……いや俯いてはいるが、よく見たら顔が赤い。

「バカ！秋空が急に止まるから……その……」

どうやら俺のせいで倒れたことを怒っているようだが、今はそんな場合ではない。

「秋空？その人は、横井琴音さんよね？」

倒れている俺に話しかけてくる姉さんは、いつもよりちょっと細くて、なぜかとても恐ろしく見えた。

「あ、ああ」

「朝の自己紹介のときも思つてたんだけど、秋空は横井さんとどういう関係なの？」

「た、ただのクラスメイトだ」

「本当に？」じゃあ何で、横井さんは家にいるのかしら  
なぜか。

「」のとき俺は首筋に刃物を添えられているかのよつな、そんな威  
圧感と緊張感を感じていた。

俺はゆっくりと立ち上がると、

「お、俺の忘れ物を届けに来ててくれたみたいでな。今帰るとこりだ  
「忘れ物？」

これは姉が問い合わせたのではない。琴音の言葉だ。

またも空気が凍りついた。

（こいつ氣づいてないのか！姉さんのこのただならぬ雰囲気に…）

「ふふ。嘘だつたんだ。ねえ秋空？もしかして、私に内緒で浮気し  
てたの？」

「う、浮気…？」

別に浮気してたつもりはないんだが……

「あ、秋空。あんたまさか……」

後ろでは琴音が口元を手で覆つて、ワナワナと震えていた。

「あ、姉とそんな関係に……」

まずいな。こっちも完全に誤解してる。

俺にどうしようと。

「……と、とりあえず琴音。俺と姉さんはお前が思つているような  
関係では断じてないから安心して帰れ。疑問があるなら後でメール  
で聞け」

俺はなるべく落ち着いて、言葉を選びながら琴音にそう言つた。  
「悪いが送つていけそうにはないが……くれぐれも気を付けて帰つ  
てくれ」

「う、うん。わかった。それじゃ、また明日ね」

「ああ」

逃げるようになに琴音は去つていった。明らかにまだ誤解してるな。  
まあ、とりあえず一人目は何とかなった。が、本番はここからだ。  
俺は姉さんの方に向き直つた。

「姉さん。どうかまずはその剣呑な雰囲気を収めてくれ。落ち着いて話し合おう」「うう」と、秋空は呟いた。

「剣呑というレベルではないが。

「ふふ。だ一め。それじゃ秋空はホントのことを言ってくれないでしょ?」

その様子じや、本当にこのこと言つても信じるかどうか怪しげにな。

「まず、姉さんは誤解してござる」

「何が?さつき秋空は横井さんと絡まり合つてたよね?おき合つてないとしたら、あれは何だったのかな?」

……これは、相当重症だな。

「ホントのこと話してね?じゃないと、お姉ちゃん怒りますよ」

「」の後、俺は一時間かけて姉さんの誤解を解いた。

「…………よつ」

俺は机の上に鞄を置くと、隣の席の琴音に声をかけた。

「おはよづ。何か、眠そうね」

「ああ。完全に睡眠不足だ」

昨日に続き、今日もあまり眠れなかつた。

あの後姉さんの誤解を解いた俺は、メールで琴音の相手をしていたわけだが……琴音とは怖いくらいの趣味が合つていて、話題が死きなかつた。

しかし萌え属性が違つたがゆえに討論となり(クーデレーツンデレ)、気が付いたら午前四時。起きは学校でということになり、結果睡眠時間はまたも三時間となつたわけだ。一日ならいいが、二日続くとやらや厳しいものがある。

「お前は大丈夫なのか?」

「ちょっと眠いかも。でも大丈夫。それより昨日の続きを……」

「今は勘弁してくれ……というか、そもそも人の萌えについてはどういうことを言えるだろ

俺は机の上に鞄を降ろすと、あぐびをしながら席に着いた。

「本当に眠そうね。大丈夫なの？秋空には例の三人を仲間にするつていう重要な任務があるのよ？」

「わかつてるよ。心配すんな」

例の三人、というのは言いつまでもない。上泉久遠、レキ、神崎アリアの三人だ。

昨日、というか厳密には今日琴音からメールで聞いた話によるとレキはC組、アリアはA組らしい。後で暇を見て教室を覗いておくか。

「抱き枕ガバーのためだ。全力以上でやつてやるよ」

「任せたわよ。……あ、ちなみにSSRは今日から合宿だから

「え？ つてことは今日上泉来ないの？」

ガーンだな……出鼻をくじかれた。

「とりあえず、同じクラスの上泉からと思つてたのに……」

となるとレキと神崎の一択か。何か、どっちも地雷な気がするのは気のせいいか？

仕方ない。今日はレキに声をかけてみよう。玉碎覚悟だが。神崎よりはマシなはずだ。今は神崎関連の情報が少なすぎる。

「秋空、後ろ後ろ」

「ん？」

琴音がそう言つて、俺の後ろを指差した。何だろうと振り返る。

「……！」

振り返つて、驚愕に息を呑んだ。あまりのことに声も出ない。

「……何か用ですか？」

対する彼女は表情一つ変えずに言つた。

「え、と。上泉？」

目の前の少女。見間違えようがない。教室の中でただ一人、明らかに異彩を放つているその少女は紛れもなく上泉久遠だった。

「はい。何ですか？」

急に現れただで、俺は軽くテンパっている。だって昨日の自己

紹介のときも思つたがこいつ、可愛すぎるだろ。……白い肌とか、白銀の長い髪とか、華奢な身体とか、本当にこんなアニメや漫画にしかいなりようなやつがいるんだなとちょっと感心してしまつ。

後どうでもいいが、腰にモロ日本刀を引っ提げているのが気になつた。

「えーと。合宿は？」

（アホか俺は。他に聞くべきことがあるだろ）

「私は特例で合宿を免除されています」

「ああ、そう」

声も綺麗だ。いやそんなこと考へてる場合じゃない。

「ええと、俺に何か？」

思い切つて尋ねてみる。会話の流れは明らかに変だが、「名前を呼ばれましたから」

「……え？ それだけ？」

そんなんはずないだろ？

「それだけです」

どうしよう。ものすくべやうにくい。

助けを求めて振り返ると、琴音のいるはずの席には誰もいなかつた。逃げやがつたなあいつ。

「松永秋空。昼休みに一人で話しませんか？」

「え？」

「話したいことがあります」

無表情のまま、かつ無感情に上泉は言つた。俺と話し始めてから、いや多分その前からずっとそうだ。

多分、こいつもレキと同じタイプの人間、クーデレだな。デレがあるかはわからないけど。

「わかった。昼休みだな？ 空けておくよ。丁度俺も、お前に話したいことがあつたしな。場所は理科棟の屋上でいいか？」

これはまあ、承諾するしかないだろ？ 話がよすぎでちょっと不安だが。

「わかりました。では」

上泉は頷くと、自分の席へと戻つていった。

よくわからないが昼休みに話せるらしい。案外、ここであつさり説得出来て、抱き枕カバー入手で一件落着かもしないな。

でもクーデレキャラって大概一度決めたことに対しで頑固だ。説得はかなり大変かもしれない。……いや、でも俺なら出来る。数多のギャルゲー、エロゲーをクリアする中で、どれも真っ先にクーデレを落としにかかつってきた俺ならいける！

クーデレはいいよなー。クーデレの魅力は何と言つても、最初は表情一つ変えなかつたヒロインが、長く主人公と一緒にいることで笑顔になるあの瞬間にある。基本的ではあるがあれは堪らん。特にふわっと笑うのがいい。なぜ琴音にはわからんのか。

……いや、でも相手は三次元の女だ。これまで三次元の女には色々と裏切られてきた。今回も充分あり得る。

つまり、上泉が猫を被つている可能性。もしかして、上泉はクーデレじゃないのでは？クーデレに見せかけたツンデレなのでは？しかもデレがないやつ。

それだったら駄目だ……俺はハーレムルートやCG「ンプなどの特別な事情がない限り、ツンデレキャラは放置している。

ツンデレは駄目だ。何か、駄目。嫌いとまでは言わないが、萌えない。琴音曰く、ヒロインが自分の気持ちに気づいて、それを否定したいけど出来ないやつ。ぱり好きってところにニヤニヤするらしいが、俺にはさっぱりわからん。

「秋空？何か百面相してるとこ悪いんだけど……」

いつの間にか戻つていた琴音に、俺は頭を抱えながら言った。

「琴音。駄目だ……」

「何がよ」

「やつぱりツンデレは駄目だ……」

「あんたさつき人の萌えにはどういうつて言つてなかつた！？つて

いうか久遠と一体何があつたの！？」

その後、教師が来て授業が始まるまでの間、俺達はお互いの萌えについて語り合つた。多分、周囲にいた他のクラスメイトからは引かれてたと思う。勿論、後から教室に来た姉さんにも。

「秋空、あなた疲れてるのよ」

「ああ。俺もそう思う」

休み時間での、冷静になつた俺達の会話だった。  
さつきのは寝不足のせいで。そつゆうこととした。

僕と契約して、ホームメイド（前書き）

今回も短め。

## 僕と契約して、チームメイトに

「本当にいいんだな？久遠。その……い、入れても」  
熱を持つた視線が、久遠のそれと絡まり合つ。

「構いません。私を……受け入れてくれますか？」

身体が熱い。興奮と期待で、それは芯からどんどん高まっていく。  
じつとりとした玉のような汗が、俺の身体を流れ落ちた。

「……後悔してもしらないぞ」

声が震える。緊張で変になりそうだ。

「ええ」

久遠はそんな俺とは対照的に、どこまでも落ち着いている。そのままでも落ち着いていた。久遠の様子に、俺も少し冷静を取り戻した。

「」ぐりと音を立てて唾を飲み込む。緊張で喉は乾ききつっていた。

「じゃあ、入れるぞ……」

どうしてこうなったのか、それは数分前にさかのぼる。

「というわけで久遠。今日は昼一緒に食えないから」

「何が『というわけ』なのかは全くわからないけど、了解」

上泉は『一人で』と言つていた。理由はわからないが、琴音に聞かれたくないようなことでもあるのかもしれない。

「じゃあ琴音ちゃん、一緒にどう？』

後ろの席で話を聞いていた姉さんがそう言った。仕事明けに居酒屋行くサラリーマンか、と思わずツツ「みたくなる誘い方だ。

「」いうか、いつの間に『琴音ちゃん』なんて呼ぶようになったのか。

「えーと、いいですよ？」

「敬語なんて使わなくていいわよー」

琴音はまだ、姉さんとどう接していくのか戸惑つているようだ。

まあ留学生つてそういうもんだよな。

「行くか」

二人のやり取りを見ながらの俺の言葉に、側にいた上泉がこくりと頷いた。

今日も理科棟の屋上は閑散としていた。吹き抜ける一陣の風が虚しい。

昨日は俺と琴音以外に三人組の女子達が談笑している姿があつたが、今日はそれすらない。俺と上泉の貸切状態だ。とは言え、後から誰か来ないとは言い切れないが。

「……奥に行きましょう」

静かに上泉が言った。

「また聞かれたくない話か？」

おどけたように言つても、上泉は何も言わずに奥へと行くだけだつた。俺もそれに着いていく。見事に昨日と同じ場所だ。

適当な場所に腰を下ろして弁当を広げる。上泉も俺に向き合いつぶにして座つた。座つたのだが、

「……上泉。頼むからその座り方はやめてくれ」

上泉は後ろの柵を背にし、両膝を立てて座つていた。

足の隙間から……その、奥が見える。

「上泉ではなく、久遠と呼んで下さい」

「わかった。わかったからその座り方はやめてくれ」  
「じゃないと前が見えない黒。

「わかりました」

そう言つて久遠は素直に、曲げた足をそのまま横にして座り直してくれた。ほつと胸を撫で下ろす。

「つてあれ？ お前弁当は？」

見たところ何も持つていない、手ぶらの久遠に尋ねると、

「……カロリーメイト？」

俺の問いに無言に頷いた久遠は、ポケットからカロリーメイトの箱を取り出していた。

「おいおい。育ち盛りの女の子が、昼飯力口リーメイトだけじゃ駄目だろ？。弁当ちょっと分けてやるよ」

そう言つて、俺は久遠に割り箸を差し出した。また琴音が分けるとか言い出したとき用に、余分に持ってきておいて正解だった。

「……心遣い感謝します。しかし、私には不要です」

「何でさ。いいから食つとけ」

「私を食べ物で釣るのですか？」

「……んなこと思つてねーよ。いいから食つとけ」

まずい。完全に見抜かれてた。

「なら、いただきます」

久遠は俺の割り箸を受け取った。

飯を食い始めてから五分が経過した。早速問題が発生している。会話が、全く続かない。現在進行形で双方無言だ。

クールな女の子は好みだ。でも度を越せばそれは一次元限定なのだと思い知らされた。現実だと、会話がめんどくさすぎる。黙々と俺の弁当からおかずを口に運ぶ久遠とは裏腹に、俺は話題を探すので精一杯といった感じだ。

とりあえず、この気まずい空氣から解放されたい。話はそれからだ。

「……松永秋空」

「お、おお。何だ」

やつた！久遠から話しかけてくれた。心中で一人歓喜しながら、俺は返事を返した。

「チームに空きはありますか？」

「え？」

突然の問いに思わず問い合わせ返してしまった。少し遅れて意味を理解する。

「……私を、あなたのチームに入れて欲しい」「何だつて？」

「え？本当に？」

無言で頷く久遠。

何を聞かれ、求められたのか未だに実感がない。話が上手く行きすぎてい、それが俺の懷疑心を呼び起こしていった。

「理由を聞いておこうか」

「……この話を、横井琴音に話さないと誓えるのなら」

そう言って、久遠はだしまき卵を頬張った。

「……ああ、約束しよう」

少し逡巡したが、これを聞くかないと何も話が進まないので聞くことにした。

約束は……必要とあらば破るかもしれない。

「……私は今、横井琴音の護衛任務を受けています」「琴音の？」

思わず声に疑いの色がこもってしまった。

あいつの護衛？誰かに狙われているのか？あいつは仮にもアランク武偵だし、あり得る話ではあるが……にわかには信じがたい。

「依頼主は……って、こういうのは聞いたや駄目だよな」

「……依頼主は私も知りません。依頼の内容は両親を経由して、私の元へ来ましたから」

琴音の言葉に、俺は眉をひそめた。

「両親を経由して？」

かなり特殊だ。依頼主がわからないというだけでも結構怪しいのに、なぜわざわざ親を仲介するのか。

「任務の内容は横井琴音を守ること、この任務のこととを横井琴音に話さないことの二つです」

「……それで、チームに入りたいってか」

頷く久遠。確かに護衛するなら、なるべく近くにいる方がいい。

琴音に護衛のことを言えないのなら、チームに入るのは近づくための手っ取り早い方法だ。

……さて、どうするか。これが本当の話なのか否か、俺には判別

する術がない。

正直怪しいが、わざわざこんな中途半端に怪しい話をする意味も見当たらない。

「理由は以上です」

「あのさ、聞きたいんだけど、琴音って護衛されるようなやつなんか？」一応Sランク武僧らしいけど……

「……話せません。それは、横井琴音が望んでいない」

久遠が一瞬俯く。長い白銀の髪がはらりと舞い落ちた。

「あなたも人に聞かれたくないことが少なからずある。……松永の末裔よ」

顔を上げた久遠は、俺をじっと見つめてそんなことを言った。

「……！」

どくんと、心臓が脈打つ。

久遠から目が離せない。

「お前……」

言葉が続かない。

お前、何者だ？

「……震えていますね」

これはブラフだ。俺は震えていない。久遠はこの言葉で、俺の反応をうかがっている。

落ち着け。冷静になれ。

「そんなことないとと思うが」

声に違和感はなかつた……はずだ。

「いいえ。確かにあなたの魂は震ている」

「へ？」

意味不明な久遠の言葉に、俺は思わず間抜けな声を出した。

久遠は表情一つ変えず、何も言わずにじっとこちらを見るだけだ。少しの沈黙の後、俺はおずおずと切り出した。

「あー、まあ済まなかつた。琴音のことはもう聞かないよ」「これでうやむやになるとは思つてないが……俺は、逃げた。

「……ええ」

久遠は視線を俺から外すと、弁当と向き合つた。

同時に、さつきまで無意識に感じていた息苦しさのようなものがなくなる。

それと入れ替わるかのように、再び沈黙が訪れた。見ると弁当の中身はほとんどなくなっている。久遠が大方食べてしまつたらしい。

「なあ、さつきのチームの話だけど……」

何か話さなきゃと思いつつ、久遠はちらりちらりを見上げてきた。

相変わらず無言だが。

「えーと、本当にいいのか?」

「ええ」

「本当に? さつきのお前の話が本当かどうかはわからないが、もし他に組みたい仲間や友達がいるんならそっちを優先すべきだ」抱き枕カバーのためにも、久遠にはチームに入つて欲しい。だがそれは久遠が自分の意志で入りたいと思う前提での話だ。無理して仲間にしても何の意味もない。

「いません。それに、さつきの話は本当です」

淡々と告げる久遠からは、何の感情も読み取れない。

「本当にいいんだな? 久遠。その……(チームに)い、入れても」「(え? っていうかもう『ゴール? ……やばい。テンション上がつてきた。報酬のボカラ抱き枕カバーが見えるんだけど』)

熱を持った視線が、久遠のそれと絡まり合つ。

「構いません。私を……(チームに)受け入れてくれますか?」

身体が熱い。（抱き枕カバーの）興奮と期待で、それは芯からどんどん高まっていく。

じつとりとした玉のような汗が、俺の身体を流れ落ちた。

「……後悔してもしらないぞ」

声が震える。（抱き枕カバー入手の）緊張で変になりそうだ。

「ええ」

久遠はそんな俺とは対照的に、どこまでも落ち着いている。その

久遠の様子に、俺も少し冷静を取り戻した。

ごくりと音を立てて唾を飲み込む。緊張で喉は乾ききっていた。

「じゃあ、（チームに）入れるぞ……」

僕と契約して、ホームメイド。（後書き）

…………。出来ない」とはするもんじやないです。反省。

とりあえず、今回で武偵殺し編でのパーティー編成は完了です。

## 猫探し少女（前書き）

バスジャックまでの 猫 猫とした日常パートが続きます。

## 猫探しと少女

「だから、mooはアンチRPGなテーマだけじゃなくて、独特のキャラクターとドット絵、謎の言語、それに良BGMがあつたらここその神ゲーでしょ?」

「あー、確かに変なキャラは多かつたな。でも、ちゃんとみんなそれぞれの『ラブ』があつた。悪いやつはいなかつたし。勇者も、大臣も……」

俺、そして琴音は青海の公園に猫探しに来ていた。  
いや、厳密には俺だけだ。

「けど、みんな悪い人じやなかつたからこそ、最後の石版には胸が痛んだわね」

「わかる。あれは鳥肌。でもあれで終わらないのがmoo」

俺は、久遠との話が終わつた後、猫探しの依頼を受けていた。単位は0・1。報酬は一万。

で、青海まで猫を探しに来たはずが……

「ところでだ。琴音」

「何よ」

「猫、見つかった?」

「そんなわけないでしょ。雑談してるだけなんだから」

なぜか、俺達は公園を歩きながら雑談してるだけだった。

「あのな。お前はともかく、俺にとつては貴重な単位なんだ。邪魔すんな」

「あつそ。ていうか猫の居場所に、何か当てでもあるの?」

「あるわけないだろ。しらみつぶしだ」

そもそも俺も、見つかればいいなーくらいにしか思つてないし。

「お前は、授業サボつていいのか?」

「私はもう今年分の単位は揃えてるもんね」

琴音は得意げにそう言った。

「はあ。さいですか」

「つていうか、あんた単位そんなにヤバいの?」

「いや、別にヤバいつてほどではないけど……」

まあ、この先猫探しクラスの依頼が一つも来ない、なんてことがあれば話は別だが。

「ふーん」

「何だよ……」

急にニヤニヤし始めた琴音にちょっと吊りつつ俺は言葉を続けた。

「そんなに俺に留年して欲しいのか?」

「まさか。逆よ逆。留年なんてしたら許せないから。まあ、明日楽しみにしてなさい」

「?」

「何だろ? またよくない」とを考え付いたようだ。

「それより、あんた昼休み、どうだったのよ

「どうつて、何が」

「久遠と話してたんでしょう? どうだったの?」

どうやらこれが聞きたいがためだけに、俺に着いて来たらしく。単に雑談したいからかもしれないが。

「チームに入るってわ」

「え? ホントに? やつたじやない!」

よっぽど嬉しいのか、琴音はその場でぴょんぴょん飛び跳ね始めた。小学生か。見た目小学生みたいだけだ。

「こら暴れるな。子供か」

「いいじゃない、あんたも喜びなさい。それに、子供じゃない」  
飛び跳ねたせいで、久遠ほどではないとはいえ長い髪が浮き上がり、甘い匂いが漂ってくる。

「ていうか、あんまり寄つてくれんな」

「何でよ」

「周りを見てみろ」

言つて、ちょこちょこと軽く周囲を指差す。

「？」

俺の言葉に、琴音は周りを見渡した。

「」、青海唯一の公園は、海が近く、新しくて綺麗なセいかデー  
トスピットとしてそこそこ有名な場所だ。

つまり、まあ、ちよつと濃厚にへつらつてゐやつらが少くない。

「……」

近くのベンチに、大学生らしきカップルが絡み合つてゐるのを見  
て、琴音は顔を真っ赤にして声もなく硬直してしまった。  
爆ぜる。誰とは言わん。あのカップル、今すぐ爆発しろ。

「あ……あう」

「そういうわけだ。こんなところで一緒にいるの見られたら、付き  
合つてゐなんて噂されるぞ」

「あ、あたしは……れ、恋愛なんて……」

「どうでもいいんだる。なら帰るか、離れるかしら」

俺がそう言い放つと、琴音は顔を赤くしたまま少し離れた。

「あれ？ 松永？」

「……遠山」

急に俺の名前を呼ぶ、聞き覚えのある声がした。声のした方を見  
ると遠山と、何か背の低いピンク色の髪の少女がいた。両方某ハン  
バーガーショップの紙袋を手に持つてゐる。

「何してゐんだ？」

少し驚きつつも俺がそう聞くと、

「猫探し」

「猫探し？」

俺達と同じだ。まさか同じ猫じゃないだらうな。

「まあいいや。その子は？」

「人に名前聞くときは、自分から名乗りなさいよね」

俺の言葉につづけんどんに少女が答えた。声高つーすげえアニメ  
声だ。

「わ、悪い。俺は松永秋空。遠山の知り合いだ。お前は……？」

「神崎アリアよ」

そつけない。そつけなく答えただけなのに、俺にはなぜかものすごく棘のある言い方に感じられた。

……にしても『神崎アリア』。なるほど、じにしが。遠山と何かしら関わり合いがあるのはわかつてたけど、まさか一緒に猫探しするくらい仲がいいとは。今度遠山に神崎の情報を教えてもらおう。

「ああ、そうだ遠山」

ふと思いついた俺は鞄からファイルを取り出すと、

「聞きたいんだが、こんな猫見なかつたか？」

猫の写真を見せて言った。

真っ黒な猫だ。鈴は付けているが、何というか、どうでもいうな猫というのが正直な感想。遠山が見ていても忘れないぞうである。

「……見てないな。一応、俺のも

遠山も写真を差し出してきたが、

「……いや、見てない」

遠山と一人揃つて肩を落としてため息をついた。

「じゃあ、俺はこっち探すわ。お前の見つけたら連絡するよ

俺はそう言つて、遠山に向けて軽く手を挙げた。

「ああ。俺も見つけたら連絡する」

遠山の言葉を背で受けながら、俺は端の方に向かつて歩き始めた。

夕方。ようやく迷子の猫を見つけた。

場所はさつき遠山と会つた広場。じつには案外あつさつと見つかるものだ。

そして、後はこれを捕まえれば解決……

「ふふ。妾に撫でられて嬉しいか？愛いやつめ

そう、解決のはず……

「どうするつて……私に聞かないでよ

「どうするつて……私に聞かないでよ

猫は、広場にいた。

厳密には、ベンチに座っている、小学生くらいの少女の腕の中にいた。

金髪。淡い水色の目。フランス人形のような外見の、明らかに外人の少女は、嬉しそうに笑つて黒猫と戯れている。猫の抜け毛が付着して、白いワンピースがところどころ黒くなっていた。

日本語ペラペラなところを見るとハーフかクオーターかも知れないが……そんなことはどうでもいい。今問題なのは、どうやってこの少女から猫を取り返すかだ。

「ふふつ。お主、どこから来たのだ？」

「みやー」

「ふふ。そうかそうか」

……こんな楽しそうにしてる少女に声をかけて、「猫返して下さい」か。憂鬱だけど、やるしかないよな。

「あ、あのー……」

「それにしてもお主、温かいな。妾が冷え性なのもあるが……」「気づいてもらえたかった……

「あ、あのー！」

俺は物怖じせずはつきりと言つ。無視されるのは面倒だ。

「うにゅ……この温かさは中々に心地よいが、こせとか眠くなつてきた」

駄目だ。全く気づいてない。

しかも何か、うつらうつら舟を漕ぎ始めていたようだ。

「あのー！」

俺は少女の肩に軽く手を添えて、なるべく耳元で言つた。

「うわっ！な、何じやー！きなりー！」

少女は閉じかけていた目を見開くと、飛び上がつて身を引いた。

「そろそろその口調に激しくツッコみたいけどその前に……その猫、飼い猫なんだ。返してもらえないか？」

そう言って、少女の様子をうかがう。

少女はもう落ち着いて、青い目でじっと俺の目を見つめていた。その目は驚いているよりも、俺を踏みしているように見える。

偏見かもしれないが、しっかりと目を合わせてくるのはやはり外人だからか？……いや、それ偏見だな。久遠も結構しっかり目合わせてきたし。

「ふむ。この猫、お主の飼い猫なのか？」

「いや、違う。でもその猫の飼い主に頼まれて来たんだ。だから、返してくれないかな」

俺は中腰になって、少女と目線を合わせて言った。

「…………わかった。お主に返そう。済まなかつたな」

「あ、ああ。ありがとう」

意外だった。あっさり信じてもらえるとは。それにつきり駄々をこねるものだと思つていたのだが。聞き分けのいい素直な子のようだ。

「飼い主によろしく伝えてくれ」

そう言つて、少女は名残惜しそうに少しだけ猫の頭を撫でて、俺に手渡した。少女の手が小さいせいか、猫がやたらと大きく見える。

「わかった。確かに伝えておく」

答えてから、俺は受け取つた。

これで任務完了だ。さあ、帰ろう。

「…………ぐすつ、うつ…………」

「…………帰れない。」

「あ、あれ！？どうしたんだ？」

少女はサファイアのような瞳に涙を溜めて、猫を見つめて震えていた。

「は、離れていても……お、お主は……ぐすつ、お主は妾の……友だ。ずっと、わ、忘れ……うつ……うわあああ！」

「ええつ！？ちょ、ちょっと落ち着けて」

猫と離ればなれになるのがそんなに悲しかったのか、少女は泣き出してしまった。全然素直な子なんかじゃない。さっきのクールな

のは意地張つてただけのようだ。

猫を持つて両手が塞がつた状態でオロオロする俺を、琴音はため息をついて見ているだけだ。

「こ、琴音、何とかしてくれ！」

「はあ。猫は私が持つとくから、自分で何とかしなさい」「わかつた！」

俺は琴音に猫を渡すと、少女に向き直つた。

「ちょ、とりあえず泣き止んでくれないか。ほら、これで涙拭け」そう言ってハンカチを差し出すも、

「嫌だ！が、がなじいどぎには……ぐす、い、一杯泣くのだ！」「わかつた。もう思う存分泣いていいからとりあえず涙拭け」そんなに悲しいのか。すでにすごいことになつてる顔を少し拭いてから、俺は少女にハンカチを手渡した。

「う、うわあああん！」

「落ち着いたか？」

少女は頷いて、

「み、見苦しい」とこりを見せてしまつたな。すまぬ」

一応、少女はもう落ち着いていた。まだ泣き止んだばかりで、目が腫れているのが痛々しいが。

「いやいいんだけど……そんなに悲しかつたのか？」

またも頷く少女。

「わ、妾の友達だからな。でももう大丈夫だ。礼を言つぞ」

少女はぐしょぐしょになつたハンカチを、俺に返してくれた。

……重い。ただのハンカチなのに、受け取つた瞬間結構ずつしききた。

「どういたしまして」

ハンカチをポケットにしまいながら、一応そつまつておぐ。

「それにしても『友達』って、変わってるわね」

琴音がようやく会話に加わつてきてくれた。

「？ なにゆえだ？」

「だつて猫でしょっ？」

「猫だ。でも妾の友なのだ」

少女は微笑みながら言った。

「ふーん。やつぱり変わってるわね」

「それより、お前、一人なのか？お母さんは？」

「……妾に母はいない。ここにも一人で来た」

少女の微笑みと瞳が少し憂いを帯びたものになつた。気がした。

「だから、お主らが妾のことを心配する必要もない」

「……そうか」

心配するに決まつてゐるだらう。

さつきの号泣、それにこの表情。何かあるに決まつてゐる。

「なあ、猫と離れるのは……嫌か？」

「ちょっと、何言つてんの？」

「いいから！……で、どうなんだ？」

俺だつてこの猫は当然依頼主に返す。そのことではなく……

「……嫌

少女はポツリと言つた。

「そうか」

「でもいつかは離れねばならぬときが来る。それが少し、早まつただけだ。だから、辛くはない」

「……」

思わず目を丸めて少女を見直した。

「驚いたな。こんな大人びた小学生がいるとは。何年だ？」

「……妾は小学生ではない」

「え？ も、もしかして中学生？ わ、悪い！」

「……もう良い」

少女はなぜかすごく疲れた顔をしていた。

「まあいいや。お前、この公園にはよく来るのか？」

「そこそこじやな」

「じゃあ、俺は毎日来る」

「な、なにゆえ？」

少女は驚いたで顔見上げてきた。

「お前と話したいから。友達になりたいから」

「妾と？」

「嫌か？」

そう聞くと少女はうつむいて、

「い、嫌じゃ」

「そ、うか。でも俺は毎日来る。現存する全てのクーデレキヤラヒ誓

つてもいい」

「何それ……」

呆れたようにそう言つ琴音を無視して、俺は言葉を続けた。

「今まで猫が話しだす相手で友達だつたんなら、代わりに今日から俺と友達になつて欲しい」

俺はうつむいたまま黙る少女の頭に手を置いて、ぐしゃぐしゃとかき回した。

「や、やめぬか」

「まあ、俺の言葉を覚えてくれると嬉しい。じゃあな」

そう言って少女の頭から手を離すと、俺は公園を後にした。

「どうしてあんなこと言つたの？」

「……言いたくなー」

「？ 何でよ」

帰り道。小首を傾げる琴音に、俺は顔を背けて言つた。

「俺、あの子に対してもう失礼な推測してゐるから。つていうか推測といつよつ勘だし」

言つて、あの子の名前を聞きたかったことを思い出した。

「何よ？ 言ひなさいよー」

「……」

だんまりを決め込む。五分くらい会話をなく歩いていたところ、

ふいに琴音が話しかけてきた。

「あの子……寂しそだつたね」

「……ああ」

道端にいた猫を友達として扱い、母親がいなこよつな」とも言つていた。それに、あの目。

あの水色の目は恐ろしいくらいに澄んでいて、でもなぜか寂しそうで、とても印象的だった。

「中学生が放課後に公園来る理由つて考えたときによく、猫に会いに来たんじやないかって。それに母親の話したときのあの反応。多分……」

「もういいわよ。確かにあなたの推測、いや勘はあの子には言わない方がいいわね」

「そんなことわかってる。当たり前だろ?……じゃあ、俺は学校戻つて依頼の報告してから帰るから」

「私も行く」

「ええ! ? いいけど……」

結局、捕獲した猫は猫違ひだった。確かに、よく見たら鈴の形が微妙に違つ。

単位と報酬はもらえなかつたが、もう少しこの猫があの少女といふれると知つて、喜んでしまつたのは秘密だ。

**猫探しと少女（後書き）**

今回は変なところも・・・また後日直します。

速やかに立つない（前書き）

今回も変なところあります……

## 速歩が足りない

「秋空。今日昼ご飯食べ終わったら、探偵科の前にいなさい」

「いいけど、何だよ」

「いいから来なさい。来なかつたら……死刑だから…」

「おお。今のはちょっと似てたな」

そんなやり取りが今朝、俺と琴音の間で行われていた。行わ  
れていたはずだった。

そして、今聞こえたのは五時間目開始のチャイムだ。昼休み終了  
のお知らせでもある。

「琴音……何やつてんだ……」

晴れて五時間目をサボってしまった俺は、探偵科の入り口前で思  
わず額を押さえてうめいた。

いや、全く時間確認してなかつた俺も悪いけどさ……

「てかあいつ……俺にここで待つとけとは言つたけど、自分が来る  
とは一言も言わなかつたような……」

もしかして俺、琴音に騙されてる?

そこまで考えたところで、急に待つているのがバカらしくなつて  
きた。

「……戻ろう」

そう呟いて、俺は探偵科に背を向けた。階段を降りながらため息  
をつく。あーあ、五時間目……六時間目も休んでしまおうか。

「だーれだっ！」

声とともに視界が黒に染まり、背中に何か重みがかかった。

「これはこれは、同じクラスの鈴木さん」

「予想外すぎてリアクションに困るんだけど……」  
目を覆っている手をどこで、探偵科の方に向き直る。  
「遅い。遅すぎる」

階段の数段上にいた琴音に、俺は言い放った。

「速さが足りない」

「「じめんじめん。手続きに時間かかっちゃつてん」

「手続き?」

「何の?まさか任務の?」

「じゃあ、行きましょ」

「行くつてビニに?」

「いいからあんたは着こなさい。早く来ないと置いてくわよ

そう言つて、琴音はさつさと歩いて行く。

「え?おいで、待つて」

俺も慌てて、その小さな背中を追いかけた。

「おいで琴音。俺達今ビニに向かってるんだ?」

東京の街並みを琴音と並んで歩く。田舎地はわからないが、俺は琴音に着いていった。

「ゲーセンよ」

「ゲーセンー?授業サボつてゲーセンつて……立派な不良じゅねえか」

まあ何かの依頼なんだろうけど。さつき手続きがどうとか言つてしまし。

「で?どんな依頼なんだ?」

「何だ。ちゃんとわかってるじゃない。そう、今からあんたにある事件を解決してもらつわ」

「……え?俺?」

「何でや。」

「他に誰がいるのよ」

「いや、てつときつお前が依頼を受けるのかと」

「何で今年分の単位取つてる私が依頼受けなきゃいけないのよ  
最もである。」

「まあそりだけど……何で俺に一言も断りなくそんなことするんだ

よ……俺受けたくないんだけど

「0・5単位で報酬五万」

「やだ。絶対何か変な依頼だ」

だつて俺達今ゲーセン向かってるんだぞ？ゲーセンで事件……窃盜、置き引きくらいしか思いつかん。そして、そんな事件は武偵には回つてこない。0・5単位ももらえたりもしない。

「まあそう言わず話くらいは聞きなさいよ。今回あんたにやつてもらう事件は殺人事件よ」

「何か今から俺が人殺すみたいな言い方だな」

殺人か。その手の関連の依頼は受けたことないな。

「一週間前、今向かつてるゲーセンで殺人事件があつたわ。被害者は女性。真田裕香。死因は……」

「おい待て。そんな詳細な情報、こんな道端で話すのはまずいだろ」「一応機密情報だろ。誰が聞いてるかもわからないのに。」

「誰も聞いてないと思うけど……まあいいわ。今日は昼食べてなかつたから、何か奢つてよ。どこかの店で話しますよ」

「ええー？まあとりあえず奢つてやるけど、俺が依頼受けなかつたら金返せよ」

「わかった。じゃあ早く行きましょ」

「待て、走るな」

そんなんに走れるんなら飯いらねーだろ。

結局、そのゲーセンの近くのデパート内にある業務用バーガーの店で食べることに決まった。琴音が勝手に決めただけだが。隅っここのテーブルについた俺達は、早速話を再開した。

「どこまで話したっけ？」

琴音の問いに、俺は顎を押さえて少し記憶をたどる。

「……一週間前ゲーセンで殺人事件があつたこと。被害者は……誰だっけ？」

「さ、さな……出てこない。」

「ああ、思い出した。真田裕香。二十歳の大学生よ。死因は、後頭部を鈍器で一発殴られて即死よ」

「……後で『ほぼ』即死とか言い直されそうな死因だな。ていうかちょっと待て。メモ取る」

「そうは言つても手ぶらで来たからな……紙も筆記用具もない。

「悪い。何か書くものない?」

「はいはい」

琴音は俺が手ぶらなのを予想していたらしく、シャーペンヒートの切れ端一ページ分を渡してきた。

「ありがとう」

「じゃあ説明するわよ。ええと、被害者は店内一階に置かれたダンボール箱の中から発見されたわ。発見したのは、ゲーセンに来ていた一般人」

「ダンボール箱の中つて、人入るのか?」

言つてから、某蛇がダンボールに入つて『で、美味しいのか?』と無線に話しかける光景が脳裏をよぎった。

「被害者の身長は百四十一。私と同じくらいよ。実験してみたけど、余裕でいけるわね」

「実験したのか……」

想像しようとして……なぜか虚しさを感じて止めた。

「被害者の首筋には一点の黒点があつたわ」

「スタンガンか。腕時計は?」

「付けてなかつた」

まあ、ですよね。

「てか、わざわざメモ取つてるんなら質問は後でまとめてしなさい。

……で、遺体の発見場所は一階の」。の筐体前だったんだけど、一階のトイレから被害者の携帯が発見されたわ

「へえ

「じゃあ次。容疑者の説明ね」

「これはいいヒントだ。

「じゃあ次。容疑者の説明ね」

「え？容疑者いるの？」

「じゃあ俺何しに来たのさ。

しかも被害者の説明今ので終わり？

「言つてなかつたかしら？容疑者は元ゲーセン店員の前原拓郎。今は留置所にいるわ。容疑がかかつた一番の理由は、殺害に使用したと思われるダンベルが容疑者の私物だから。指紋は彼のものしか付いてなかつた。ダンベルは被害者の入つたダンボール箱の中から見つかつたわ」

「……なるほど」

「ん、じゃあ質問どうぞ」

「ええつ！？もう終わり？早くね？」

正直、全くと言つてもいいほど何もわからなかつたぞ。

「まだまだ説明することあるけど、話してたらキリないし、現場で話した方が効率いいし、てか説明するの飽きたし。あ、結局この依頼受けけるの？」

「あー、わかつた受けるよ」

下手に断ると後がめんどくさいだ。

「やつた！」

目をぎゅっとつぶつてガツッポーズする琴音を見ていたら力が抜けて、何かもう色々とどうでもよくなってきた……

「……人、いねーな」

「まだ平日の昼間だし、つい最近殺人があつたゲーセンだしね」「どこからか閑古鳥の鳴き声が聞こえてきそうなほど、ゲーセンには人つ子一人いなかつた。

「てか、ここかよ。遠山とよく来るところだ」

「そうなの？」

「最近来てなかつたから殺人があつたなんて知らなかつたけどな。L.O. ワンクレ百円排出あり、戦 大戦五百円入れて三クレサービス。プライズや音ゲーも中々良心設定だ。ただ、ACTCGに関し

てはリア抜きをしているという噂が後を絶たない」

それでも、安田担当でプレイに来る人は多い。主に俺や遠山の  
ような学生が。

「……ん? そういえば、事件があつた一週間前つて、ちょうどこのバージョンアップあつた頃だよな?」

「変なところに気づくわねー。まあ、そうよ。事件の日はバージョンアップの前日。結構大がかりな作業があつて、当日はL.O.はプレイ出来なかつたそよ。ちなみに、容疑者の前原拓郎はバージョンアップの作業を担当していたわ」

「ほー」

「それと、遺体が入つていたダンボールは、元々新排出のピロー袋の箱がぎつしり入つていたらしいわよ」

「……おいおい。マジかよ」

ピロー袋とは、要するにカードの入つたパックのことだ。ACT CGは他のカードゲームと違いカードパックを購入するのではなく、ゲームプレイ終了時に筐体から排出される仕組みになつている。

「とりあえず、二階に上がりましょ。それから店員に話聞いて、留置所行つて、後はあなたの推理次第」

「そうだな、上がるか」

出入り口から見て左に見える階段を上つて二階に上がる。

二階は一階ほど過疎なわけではなかつた。それでもちらほら程度だが。

階段上つてすぐ右手がメダルゲームコーナーと戦の絆、左手がビデオゲームコーナーになつてゐる。犯行があつたのは左手のビデオゲーム。具体的な配置は手前から順番に戦 大戦、Q A、その右にブレイルー、Q Aの奥に 拳、L.O.、三国 大戦、その右にエア・ースト、そしてそのさらに右の一 角に麻雀ゲームが並んでゐる。

件のトイレは三国 大戦のすぐ後ろにある。L.O. の筐体との距

離は三国　との筐体一個分だ。

「トイレで殺害して、ダンボールに入れて、ＬＯ 筐体前まで持ってきて、外に持ち出すタイミングをうかがつてた。自然っちゃ自然な流れよね」

「……嫌に計画的だな」

琴音とＬＯの前で言葉を交わす。

確かにトイレとＬＯは結構近い。周りのゲームも過疎ゲーが多い。充分に可能な犯行だろう。

「一応聞くが、ここ監視カメラとかないのか？」

「あつたらとっくにこんな事件解決してるわよ。この不景気じゃ、カメラ付ける余裕なんてなんでしょう」

「だよなーと、俺はがっくりと肩を落として脱力した。

「仕方ない。横着せずに、店員に一人一人話を聞くか」

十分後

「どうぞ」

そう言つて、店員が俺と琴音の前にインスタントコーヒーを置いた。

「ど、どうも」

俺達はスタッフフルームにいた。もつと狭そうなイメージがあつたのだが、横長の机と椅子、それにロッカーと、何といふか運動部の部室のような場所だ。

なぜここにいるのかといふと、一階で見回りをしていた店員に武偵憲章を見せながら話しかけると、どうやら話は事前に聞いていたらしく、こここの店長と話をするためスタッフフルームに通してもらつたからだ。

「えっと、店長、なんですね？」

俺は真正面にどっかりと座つて構えている、髭面で妙に威圧感のある中年の男に話しかけた。

「ああ。今日は例の事件の捜査に来たと伺っている」

(声にも妙な威圧感がある。……正直怖い)

「は、はい。では早速、話を聞かせてもらえますか？事件の日のことを詳しく述べたことは何でも言つてください」

「その話は、もう警察に話したが

あまりよろしくない雰囲気だ。

「我々は、武偵です。警察ではない」

(まあ、こういうのは本来武偵の仕事じゃないけどな)

結局詳しい依頼内容は知らないが、俺が何をすればいいのかおおよそ見当は付く。逆に言えば、今俺に出来ることはそれくらいしかない。そして、それは武偵の仕事にしてはかなり変わっている。すなわち容疑者の決定的な証拠を見つけるか、真犯人を見つけるか。

まあどうせ真犯人なんていないだろうから、証拠を洗い出せばいい。そのために、この店長からは事件当日の容疑者の行動を残らず吐いてもらつ。

「……あの、すいません。話してください。お願ひします」「無言の睨みの圧力に負けて、俺は思わず頭を下げた。怖い！やつぱこの人超怖い！『吐いてもらつ』とか生意気思つてしまふん！」  
「……はあ。わかった。話す。話すから、頼むから涙目で見るのはやめろ」

言われて、ゴシゴシと田を擦る。

「とは言つても、あの日はあの事件以外には特に変わったことはなかった。何を話せばいいのやら」「じゃあ、よつ……前原さんは事件当日、何をしていましたか？」  
「前原、ねえ……彼はあの日、あるゲームのバージョンアップを担当していた」

「……、ですね」

「ああ、知つてゐるのか」

店長は少し驚いた顔をした。

「そう。それで午前中はずっと一階で作業していらっしゃい」「『『らしい』？実際に見たわけではないんですか？」

「私は一階で仕事してましたから」

そう言つて、店長はコーヒーを一口すすつた。

「具体的には何を？」

「プライズゲームの設定調整を。後は雑用とか」

俺は「コーヒーに砂糖とミルクを入れながら、俺は質問を続けた。「ここ、スタッフルームは一階だ。彼はここに来なかつたんですか？」

「いや、それはないだろう。そこらへんは、あの田一階にいた店員の中井の方が詳しいはずだ」

「なるほど。後で聞いてみます。ちなみに、こここの店員は全員で何人ですか？」

「私を入れて六人だ。みんな仕事があるから一気に呼ぶことは出来ないから、順番にここに来るよう言つてある」

六人……紙一枚で足りるかな。

「ありがとうございます。では……」

一時間後

「お、終わった……」

机にうつ伏せに突つ伏しながら、俺は言葉を絞り出した。ようやく全店員に話を聞けた。流石に、六人に連続で同じような質問をしていくのは中々疲れる……

「お疲れ。ちょっと見せてくれる？」

そう言つて琴音はノートの切れ端を手に取つた。

「裏面に要点だけまとめておいた」

「ふーん」

相田……当口はずつと一階でプライズの設定をしていた。特に変わ

つたことはなかつた。

中井……一階で見回りや台を拭いたり、掃除したり受付したりと雑用していた。容疑者はずっとバージョンアップの作業をしていたが、昼飯を食べに一度一階へ降りた。

浜田……一階でプライズ景品の宣伝をしていた。ずっとマイクで一階に響き渡るくらいの音量でしゃべっていた。

田中……一階で雑用。容疑者に『スタッフルームにあるダンボール箱を持ってきてくれ』と連絡を受け、二階に運んだ。このダンボールは、被害者が入っていた物。ガムテープでしっかりと閉じられていたため、中に何が入っていたかは不明。重かったため、中に何か入つてはいたのは確実。

佐藤……休んでいていなかつた。

八木……一階で雑用。昼時にスタッフルームに入る前原を目撃している。

- ・容疑者は、朝スタッフ用の服を着る際、全員と一緒に一度スタッフルームで顔を合わせている。
- ・事件発覚後、二階のトイレの携帯が見つかった場所で、大量のレモンピローの箱が見つかっている。
- ・客がダンボールの中身を見て、叫び声を上げて、中井が通報した。その時、ダンボールにガムテープは付いていなかつた。発見した客は外していない、元からガムテープなんてなかつたと証言している。
- ・事件当日、ゲーセン店内で佐藤を見た者はいない。
- ・遺体の発見時刻は午後一時十四分。

「随分簡潔ね……」

「実際簡潔な事件だと思うが。容疑者が一階のトイレで被害者を殺害して、店員の田中に頼んでダンボールを持ってきてもらい、箱の中身と死体を入れ替えた。で、箱を持ち出す前に客に見つかった。自然で、疑うようもないと思うが」

「ホントにそう思ってる?」

「……微妙なところだ」

少なくとも、現状で前原拓郎が犯人だと断定することは出来ないだろう。

この証言だけだと、アリバイがあるのは大音量でずっとしゃべっていた浜田と、休んでいた佐藤くらいだ。やううと思えば、その日前原がバージョンアップの作業をすることを知っている者、つまり店員なら誰にだつて出来る。

容疑者の指紋の付いたダンベルをあらかじめ用意しておけば、後はさつき俺が言つた通りの流れだ。この状況じゃまず前原が疑われる。

強いて言つなら、ダンボールを運んだ田中は怪しい……か?

「ああ、今更言つ必要もないかもしれないけど、依頼内容は『この事件を解決すること』になつてるわ」

「予想通りか。つたく、真犯人でもいるのかねえ」

仮にいると仮定して考えれば、そいつは間違いなく前原拓郎をはじめようとしている。そして、結構大胆なやつだ。

状況から考えれば、犯行の流れは明らかだ。だが、そこから犯人をあぶりだす術が存在しない。

まるで挑発されているようだ。見つけられるのなら見つけてみると。

「てか、お前探偵科のSランクだろ? わからないのか?」

「これだけの情報じゃわからないし、わかっても秋空には言わない」

「何でさ」

「この任務で、秋空の実力を計りたいからよ」

琴音はやう言つて、一気に冷めたコーヒーを飲みほした。

「そういうのを明確に示すのが、武偵のランクじゃないのか？」

「ランクなんてあてにならないわよ。あんた、これまで地味な依頼ばかり受けてきたでしょ？それじゃ口で当然よ。だから、あんたの本当の実力が知りたいの」

琴音は立ち上ると、スタッフルームの出入口に向かつて歩いて行つた。

「おい。どこ行くんだ？」

「決まつてるでしょ。留置所よ。容疑者と話。それとも、まだここでやり残したことある？」

「ある、けど、先に留置所の方がいいな  
先に前原の話を聞く。その後でまたここでやるべきことがある。  
行くか。どこにあるんだ？」

「新宿」

結構めんどくさいことにあるな。ここからだとモノノレールか。

「わかった。行こう」

俺も立ち上ると、スタッフルームを出た。

## 速さが足りない（後書き）

中途半端ですが、今回ここまで。ゲーセンでバイトとかしたことないので、結構私の想像入っています。

後Lo のver.2ですが、2 Re2くらいの規模のものです。

## 「番町二ツメン?」(前編)

「ふつむやけ、この事件のパート、いらなーいんですね……。(え

## 一番高いワーメン？

ゲーセンを後にした俺達はそのまま新宿へ行き、新宿警察署へと向かった。ここに容疑者、前原拓郎がいるらしい。

事情を話し、面会室に通してもらうと、そこにはすでに透明な板一枚隔てた先に男がいた。容疑者の前原拓郎だ。

そして、こちら側に向こう側に一人づつ男が立っている。監視員か。前原は少し憔悴した様子でこちらを見ていた。恐らく、度重なる警察の尋問と、裁判のせいだろう。琴音の持っていた資料によると大学生らしいが、今の彼は春の風物詩でもある疲れ切ったサラリーマンにしか見えない。

前原と向き合いつつ設置された椅子に腰掛けると、こちら側の男が口を開いた。

「面会時間は十分です」

「あ、あの、あなた達は一体……」

おずおずといった風に、前原が切り出した。

「時間がない。手短に話しましょう。まず、私は武偵です。依頼を受け、この事件を解決しに来た。出来れば、今から私がする質問に正直に、正確に答えて頂けると嬉しい」

「……あなたも、私を疑っているんですか？」

前原はそう言つてうつむいた。

『あなたも』か。警察の取り調べの様子が目に浮かぶようだ。

「そうですね。少なくともあなたは怪しい。今私の中では一番怪しいです。でもそれは、同時に他の店員も怪しいことを意味します」多分。

「……? どういうことですか?」

「この犯行は、あなたが事件当日にバージョンアップすることを知っていた者、つまり店員なら誰でも出来ます。あなたのダンベルさえあれば話しだすが。そこで聞きたいのですが、犯行に使用さ

れたと思われる、あなたの私物のダンベル。あれはどこで、どういう方法で手に入れ、どう管理していたのか。教えてもらいますか？」

「久々にこんなにしゃべったな、どどつでもいいことを思いながら、俺はダンベルの写真を見せた。

「あれは確か……ゲーセンの隣にデパートあるじゃないですか。あそこで買った物です。スタッフルームのロッカーに入れて管理していました」

「……マジですか」

「デパートで同じ物を買うにしろ、何とかしてロッカーをこじ開けるにせよ、簡単に偽装出来るじゃないか……」

「では、次。犯行の際使用したと思われるスタンガン。心当たりはありませんか？」

「スタンガンって私、触れたことすらないんですが……」

「ふむ。そうですか」

「ちなみに俺も触ったことがない。」「

にしてもあのスタンガン、何か引っかかるんだよな。もやもやして気持ち悪い。

「なるほど。では、あなたは事件当時、L.O. のバージョンアップの作業をしていました。間違いませんね？」

「ええ。そうです」

「あのゲーセン、レア抜きをしていくという噂がありますが……どうなんですか？」

「……ええ。しています」

「えらくあつさり認めたな。後で遠山に教えてやらないと。」「

「では、そのための作業が必要なはずだ。そのレア抜きをしていたのは、誰ですか？」

「私です」

「それはいつのことでしたか？また、どこでしていましたか？」

「事件があった日の、十一時頃。場所はスタッフルームです」

「その時周りに誰かいましたか？」

「いえ、私一人でした」

なるほど。確かにこの人怪しいな。当口はほとんど一人で作業、凶器は彼の私物、遺体が入っていたダンボールも彼が管理していた。だが流石にここまで来ると、怪しい要素が多くすぎる。

「では、結構重要な質問ですが、答えたくなればそれでも構いません」

前原は頭上にマークを浮かべて、不思議そうな様子だ。

「被害者、真田裕香とあなたの関係についてです」

「……！」

被害者の名前を出した瞬間、前原はピクリと肩を震わせた。明らかに動搖している。

前原はつづむいて頭を抱えた。聞きたくない。そんな前原の声が聞こえてきそうだ。

「被害者とあなたは同じ大学に通っていた。学部もサークルも違いますが。でもその様子だと、何かあるみたいですね」

「ゆう……真田さんは……」

「あー、もういいです。無理に言わなくとも

今間違いなく『裕香』って言いかけたな。

名前で呼ぶような仲。でも学部もサークルも違う。意味するところは一つだろ？まあ前原はレスリングサークルだから、サークル違うのは当然なのが。

「面会時間、残り五分です」

男の言葉が沈黙を破る。え、速くね？ええい、グズグズしてはいられない。

「前原さん。あなたは店員の田中さんに頼んでダンボールを一階に運んでもらった。そうですね？」

「ええ。そうです」

俺の質問に顔を上げて前原は答えた。さつき以上に覇気のない面持ちだ。

「その時、リア抜き作業はすでに終わっていましたか？」

「ええ」

「レア抜きが終わつた後、ピローはどうしましたか？」

「元々入つていた小箱に詰め直して、それをダンボールに入れました」

「それで、ガムテープで閉じた？」

前原は小さく頷いた。

「万が一、お客様に開けられたら困るので。それでスタッフルームに置き忘れて、田中さんに運んでもらつたんです」

「なるほど。作業を終えてスタッフルームを出たのと、田中さんに連絡したのは何時頃でしたか？また、連絡方法は？」

「確かに……十一時半頃に出て、十分後くらいには無線で連絡したと思ひます」

遺体発見時刻は一時十四分、か。

よし、とりあえず聞きたいことは全部聞けたかな。

「わかりました。協力、感謝します」

そう言つて席を立つ。

「え？あの……」

「もしかしたら、あなたは犯人ではないかもしれない。その可能性が見えました」

「そう、ですか」

この上ない朗報のはずなのに、依然、前原の顔は浮かないままだ。それも当然か。

「では、失礼します」

面会時間はまだ残つていたが、俺は前原に背を向けた。

「あの！」

出入り口の扉に手をかけると、後ろから前原の声がした。

「必ず、犯人を見つけてください。……お願いします」

「……わかつてます」

交わした言葉は少なかつた。それだけで充分だ。

「失礼しました」

その言葉を最後に、俺は留置所を後にした。

「何か、留置所と事件現場を行ったり来たりするのって、逆転判  
みたいだな」

「そう？ 武偵ならよくあることだと思うけど」

帰りのモノレールで、俺と琴音は並んで座つて話していた。  
疲れたのか、琴音は少しつらつらしている。

「で、どう？ 何かわかった？」

「ああ。少なくとも、犯人は一人まで絞り込めた」

メモ用紙を見ながら俺は言った。やはり、こいつは怪しい。仮に  
犯人が前原じやないとしたら、多分こいつだ。

「私も同じ。てことは、今から戻つて調べ《・》る《・》のね？」

「ああ。地味な作業になるな」

「私もちょっと手伝つてあげるわよ」

大きくあくびを手で押さえながら琴音が言った。

「悪い。退屈だつたら」

「くあ……ホントよ。サクサク話進め過ぎで、私も入り込めなか  
つたわよ」

「まあ、こつからは琴音が主役だ。任せたからな」

「はいはい。任せました」

結局、何だかんだで琴音も協力してくれることになった。  
でもまあ、多分前原じやないでしょ」

「何でわかるんだよ」

「女の勘」

「全くあてにならないな……」

厳密には女の勘はあるになるが、琴音の場合は例外という意味だ。  
でも、俺は前原が人を殺すようなやつには見えなかつた。友達か、  
想い人かはわからぬが、少なくとも被害者の死に悲しんでいる。  
その心には嘘偽りない……ような気がした。

「まもなく……」

車内に響き渡る駅到着のアナウンスが、会話の終わりを告げた。  
しかし……何か忘れてるような……何だっけ。

「」の懸念を、俺は一時間ほどたつてから思い出し、後悔する「」と  
になる。

「悪い！本当にすまなかつた！！」

「……」

午後八時。俺は昨日の公園にいた。ゲーセンで琴音と別れてから  
全力疾走して来たので、少し息切れしていく苦しい。

真つ暗闇の中街灯だけがきらめいている。

そして俺の前には頬を膨らませた昨日の女の子がいた。

「すまない！この通りだ！」

手を合わせて上体を四十五度傾ける。

「……妾を待たせるとば。お主、何様のつもりだ？」

「すいません！」

完全に忘れてた……今は心の底からすまないと思つている。

「妾は五時頃から「」におつたのだ。三時間待たされたのだぞ？」

「す、すいません……本当に反省します」

「確かに『友達になりたいから』などと申しておつたな？お主は友達  
を三時間も待たせるのか？」

「……すいません」

「いやそんなに謝られても困るのだが？まあ？妾は怒つてないのだと  
ぞ？本当に。けど偉そうなこと言つときながら、これではいささか  
信頼に欠けるというか？」

「……すいません」

「いやだから謝られても時間は戻つてこないし？」

ヤバい。相当怒つてるぞ、これは。キャラと口調が崩れるくらい  
には。

「け、けど、来てくれたんだな。俺と友達になるの嫌なんて言つて

たのに、「

少々強引に話題を変えてみた。このままでは埒があかないと思つたからだ。

「そ、それは……あれだ。た、たまたま、この近くに用事があつたから……」

「でも待つてくれたんだよな?」

そう言つと、少女は赤面してそっぽを向いた。

「そうだ! 晩飯まだか?」

「え? あ、ああ、夕餉はまだじや」

「じゃあ、ラーメン食いに行こつ! もちろん俺の奢りだ

これくらいで待たせた罪が消えるとは思わないが、せめてもの…

…といひやつだ。

「う、うーめん?」

「ああ、駄目か?」

「い、いや、構わんが…」

「じゃあ行こつ!」

そう言つて少女の手をつかむ。

「…! ? お、お主、て、て、手…」

「ん? ああ、悪い。はぐれたらまずこと思つてな」

「こ、子供扱いするな!」

少々は勢いよく手を振つて俺の手を離すと、ズンズンと先に歩き

始めた。

「おー、やつち逆だぞ!」

「……お、お主がさつひと歩かないからだ!」

「うつしゃこませーつ! カウンターまでビリギー!」

「こ、こじが『うーめんや』か……」

キヨロキヨロと店内をせわしなく見ながら、少女は舌足らずな声で言つた。

「来たことないのか?」

「ない」

「……もしかして、ラーメン食つたことは？」

「ない」

「なんてこつたい。」

「まあ、不味いもんじゃねえよ」

「さ、左様か」

まだ店の雰囲気に慣れないのか、若干そわそわしながら少女は力  
ウンター席に着いた。

「ご注文お決まりでしたらどうぞ……。」

若い店員が注文を尋ねてきた。

「えーと、じゃあラーメン一つと、この子には一番……」

一番高いのを。

そう言つて無駄な甲斐性を見せよつとした俺だが、突如言ひよつ  
もない悪寒に襲われて口が止まつた。な、何だ？ 今背中がぞわあつ  
て……

「すいません。やっぱりラーメン一つで。あ、後餃子一人前」

思わず言い直していた。

「はいよ。ラーメン二つね。注文入りまーす。ラーメン一人前餃子  
一人前！」

（ホントに何だつたんだ……何か、俺はどんでもない」とをじょつ  
としてたんじや……）

「どうかしたのか？ 何やら顔色が悪いよつに見えるが

「何でもない。気のせいだる」

水を一杯煽る。今日はしつかり仕事したからか、はたまたさつき  
の悪寒が原因なのか、水の冷たさが喉に妙に心地よい。

「てか、連れて来といて何だが、こんな時間に出歩いててもいいの  
か？」

「構わぬ。ほーにんしゅぎといつやつだ」

「……そうか。ああ、そうだ。昨日の猫、どうやら探してたのと違  
つたみたいでな。もしペットオーケーなら、飼い主が見つかるまで

お前が預かつててくれないか?」

「そ、それは真か!?」

「ああ。嘘つこてどうする」

田をキラキラさせて聞こえてくる少女に、俺は苦笑しながら答えた。

何でいうか、可愛いな、ここ。頭を撫でたくなる。

「つひやあつーな、何をするつー」

「ああ、悪い悪い」

と思つたら、無意識に少女の頭を撫でていた。サラサラした髪の感触を名残惜しみながら、俺は少女の頭から手を離す。

「全くお主は……つぐづく箸を子ども扱いしあつて……」

「だから悪かつたつて」

「へい、ラーメンお待ち!」

今度は、いかにも『ラーメン屋のおつかん』といった風な男が俺と少女の前にラーメンを置いた。

「? これは?」

「嬢ちゃん可愛いからおまけだ」

ヒッシュッと笑いながら餃子の隣に置かれたそれは、

「……だしまき卵?」

「おつよー美味しいから兄ちゃんも食つてみな」

言つておつさんは奥へ引っ込んでしまつた。

「……ラーメンにだしまき卵。いや、深く考へるべきではないか」

俺は割り箸を一本取ると少女に一本渡し、

「一応聞くが、箸の使い方はわかるか?」

「当たり前じゃ。日本にはそこそこ長くいるから」

そう言つて、少女は割り箸を割つて、固まつた。

「どつした? やつぱりわからないのか?」

「いや、そうではない。この……らーめん? であったか? ドウエダして食すのだ?」

「……そうこえばラーメン食べたことないんだつたな

とは言え、どう説明したらいいものやない。

「そうだな。ほれ」

俺は少女にスプーンを手渡した。

「とりあえずスープ飲んでみる」

「？……美味しい」

ふむふむ。悪くない反応だ。

「後は周りの人みたいに、箸で麺をすすって食べる感じだ」

「ほ、ほう」

「というわけで俺もいただきます」

手を合わせてスープを一口含む。うん！これは美味しい。これはいいスープだ。

さて、麺は……

ちゅる。

「うん。美味しいな」

隣からの視線を感じながら、俺は麺をすすった。美味しい。平凡な味と言えばそれまでかもしれないが。

「お、美味しい」

「おお、そうか。よかつた」

どうやらラーメンの味は気に入つてもらえたようだ。

すずー。

しばらくそんな音だけで、互いに言葉を交わさずに黙々とラーメンを食べた。後、餃子とだしまき卵も。

「……ふう」

息を吐いて、今日のことを思い返す。

(犯人は……やつだ。間違いない。問題は、それを決定づける最後のピースが欠けていること。何とかして、それを埋めないと)

餃子を食べながら、俺は思考を続ける。

(……少々危険だが……いや、やる価値はあるか？うーむ)

「何を気難しい顔をしておるので？」

「ん？ああ、ちょっとな」

知らずの内にくわえていた箸を離す。

するする。

またも沈黙。

気が付くと、器の中には汁しか残つていなかつた。

「む。すまぬ。妾はまだ……」

「ああ、わかつてゐる。ひとつくり食えよ」

俺は水のおかわりを注ぐと、すぐに飲み干した。

「ふー。食つた食つた」

ラーメンを食い、外に出ると、夜風が涼しくて気持ちがよかつた。眠氣を感じ始めていた身体が少し起きる。

「うむ。美味であつた。礼を言つぞ」

少女も満足げな顔だ。よかつた。これで少しは怒りも収まつただろつ。

「もう九時か……どうする？お前がよければ家まで送つていぐが」

「……いやいい。妾一人で帰れる」

「え？ けど……」

こんな夜道を女の子が一人は危ない。ここは強引にでも着いていくべきだらうか。

構わぬ。妾の家はここからでは遠いからな。着いてくるのは面倒だらう。

「いや、それなら尚更俺が送つていいくよ」

「構わぬ」

少女はさつきよつもちよつとだけ強く、そう言い切つた。

「……そつか。なあ、また明日も、公園に来てくれるか？」

「さあな。それは妾の気まぐれだ。ただ確かなのは、次からは一秒足りともお主を待つてやらぬといふことか」

「う……肝に銘じておくよ。俺はいつうただけど、お前は？」

「逆方向じゃな」

「ことは」」でよならか。

「じゃあな。また明日」

「さらば……って、明日会うとは限らんだろうに……」

言いながら、少女の口元が少し緩んでいる。

よかつた。本当は嬉しいのか。

「ま、楽しみにしどくよ。それじゃ」

俺はそう言って、一人歩みを進めた。

また、名前聞くの忘れたな。

## 羽音と解決（前書き）

バスジャックまで日常パートが続くと言つたな。

あれは嘘だ。

## 羽音と解決

携帯を開き、電話帳から一件の連絡先の電話番号にカーソルを置く。

横井琴音。

名前の欄にはそう書かれている。昨日教えてもらつたばかりの電話番号だ。俺は意を決すと、携帯のボタンを押した。

「も、もしもし？」

たつたワンコールで、上擦つた声の琴音が出た。速い。

「もしもし。今どこにいる？」

「が、学校よ」

「そうか。俺は今例の事件のゲーセンにいる。犯人がわかつた」

「本当に？誰？」

「犯人は……佐藤だ。間違いない。証拠もつかんだ。今すぐ来てくれないか？」

「じゃ、じゃあ、ちょうど授業も終わつたところだし、急いでそつち行こうかなー？」

琴音はそれだけ言うと電話を切つたらしく、いきなり電話から音声が消えた。電源ボタンを押して携帯を閉じる。

これで仕込みは完璧。俺はじつと汗ばんだ手で、ホルスターから銃を引き抜いた。

mk22。消音性能に優れる暗殺用の銃……らしい。遠山に聞いた話そのままだが。まあ一年以上使い続けている俺の愛用の銃だ。実際に撃つたことほとんどないけど。

……そろそろ来る頃か。俺は安全装置を外し、息を潜めて外の様子をうかがつた。

……足音がする。来たな。

俺はそろりと外に出ると、閉まりかけているすぐ隣の扉に身を滑り込ませ、

「動くな」

その男の後頭部に銃を突きつけた。

しばらく沈黙が続く。お互の息をつく音すら聞こえそうな静寂だつたが、やがて男が口を開いた。

「何の用すか」

「御用だ」

俺はトイレに誰もいないのを確認してから言葉を続けた。

「『大胆』。俺が犯人に、最も色濃く抱いた印象がそれだ。計画的な犯行とは裏腹に、自ら犯行の手口をさらすような真似をしているのは挑発しているのかと思つたほどだ」

だんまりを決め込む男、佐藤に、俺は一方的に話を続ける。

「だからこそ昨日の尋問のとき、お前が俺に盗聴器を付けたのに気づけたし、その盗聴器を通じてお前が犯人だと語つてやれば必ず何かしらの行動を起こすのは目に見えていた」

「……何適当なこと言つてるんすか。盗聴器なんて知りませんよ」

「その盗聴器にお前の指紋が付いてたとしても？」

鑑識科に回すまでもなく、指紋くらいなら自分で調べられる。昨日のうちに盗聴器の接触不良を装つて調べておいた。

「まあそうですね。認めましょつ。昨日付けましたよ。盗聴器

「へえ。認めるのか」

やはりこういうところが大胆。

「でも、それだけで俺が犯人って決めつけるのは横暴つすよね？何か証拠もあるんすか？」

「そうだな……まず、トイレに落ちてた携帯。あれ、明らかに不自然だよな？」

「どういうことすか」

「遺体は移動している。なのになぜ、携帯だけは事件現場に残つたままだつたのか」

助けを求めていたのか、たまたま携帯を持っているときに襲われ

たのか、いざれにせよ本来あの場に残つてはいるべきではないはずだ。

「被害者の真田さん、でしたつけ？その人が誰かに助けを求めて…

…つてのが一番自然じやないっすか？」

「それなら、犯人は当然、被害者が携帯を手に持つていたのを知つていたことになる。しかし、それは明らかに矛盾している」

「どういうことすか」

「だつて、仮に犯人が携帯を持っているのを知つていたら、その場に残すのは不自然だ。遺体を移動したのは、犯行現場を誤魔化そうとしたから。だとすると、携帯は必ず回収する」

「せめて見つかるならダンボールの中から。それが自然だ。

「じゃあ、犯人は携帯のこと気づいてなかつたんじやないんすか？」

「それもあり得ない」

「何でそんなに断言出来るんすかね？」

「お前のポケットの中のそれが、答えた」

……反応はない。

だが俺の言葉にその場の空気が、引き伸ばされた一本の糸のように張りつめるのを感じた。

「犯人は犯行の際にスタンガンを使用している。だから被害者がその時まだ携帯を持っていたとしたら、携帯は壊れていなければならない」

「そうつすね」

「だが実際は壊れていない。つまり、スタンガンが使用された際、被害者は携帯に触れていなかつたことになる」

「そうつすね」

やる気ないだろお前。

「つまり、もし犯人が携帯に気づいていなかつたなんて状況はありえないってことだ。あるとすれば、そう、被害者が犯行のあつたとき携帯を持っていなかつた可能性」

「そうつすね」

いかん。今思わず引き金を引きかけた。

「だから俺は、あの携帯は、犯人が犯行現場を一重に誤魔化すために後でわざと置いた物だと考えた」

「へー。それが俺にどう関係してんすか？」

「まだシラ切るつもりか？そもそもその犯行現場が違うんだ。俺は留置所に行つた帰り、隣のデパートを調べた」

「……それがどうかしたんすか？」

「デパートの監視カメラにはあの日、彼女は映つていなかつた」

「なら問題ないじゃないすか」

「いや、だが監視カメラのないある場所から、彼女の痕跡が見つかつたんだ」

佐藤は黙つてゐる。でもそろそろ動く頃合いか。

「デパート内にある業務用バーガーの店。あそこは必要最低限しか、監視カメラが設置されていない」

「……」

「だが店員や客に聞くと、多数の目撃証言が得られた。また、店のトイレの個室の壁から彼女の指紋が検出された」

指紋が残つていたのは奇跡に近いが。ちなみに壁のかなり高い部分に残つていた。

「けど、そんなの俺には関係ないっすよね？」

「んなわけないだろ。殺人現場はゲーセン店内じゃなかつた。なら当日非番だった誰かさんが犯人なんじゃねーの？」

力ちやりと音を立てて銃を強く押し付ける。

「お前は事前にスタッフフルームの合鍵を作つておいて、先にスタッフ用の服を取つておいた。被害者を殺害し、それを大きな袋にでも入れて、スタッフを装つて無人のときを見計らつてスタッフフルームに入つた。で、死体を前原が管理していたダンボールに入れれば、後はどう転んでも疑われるのは前原だ。そして」

「あー、もういいっすよ。認めます。俺が犯人っすよ」

佐藤はそう言うと、両手を上げてこちらへと向き直つた。

俺は銃を構え直し、じつと様子をうかがう。

「俺が、あの女を殺したっす

「……認めるのか？」

おかしい。この落ち着き振り……まさかこれも想定内、なのかな？

「あんた、中々鋭いっすね。驚きましたよ」

「……そうは見えないが

「俺を犯人と見抜いたことじやないっすよ？『挑発』のことつす何だと！？」

「本当に、俺を挑発していたのか？」

「そうつすよ。……覚えるつすか？去年、ホテルに爆弾を仕掛けて、その上で姉を人質にとつて、あんたを脅迫したテログループ」

「！その、残党？」

「そうつすねー……微妙に違うつす」

佐藤は薄く笑みを浮かべながら、

「まあ、わざわざ説明してやる義理もないっすからね。あんたには

ここで死んでもらうつす

佐藤がどこからともなく取り出したナイフを振るうつと、俺が引き金を引くのとはほぼ同時だつた。

「つ！」

何とか回避。だが制服に切れ目が入つてゐる。かなり危なかつたらしく。

この狭い室内で、銃は危ない。

そう判断した俺は銃をホルスターにしまつと、右腰からナイフを取り出した。

「どうした？スタンガンは使わないのか？」

「洗面所の下にバケツ見てるつすよ」

それはやつがスタンガンを使おうとしたときに水を被せてやろうと、俺が事前に用意したものだ。

「はつ！」

佐藤はナイフを逆手に持つ、左手で俺の胸ぐらをつかんできた。

「がつ……」

は、速い……全く反応出来ずに、俺は拳をモロに臉らつていた。  
しかも鳩尾。綺麗に入った。

「去年のあの要求、覚えてますか？」

崩れ落ちる俺に、佐藤が問いかけてくる。

俺はそれに答えず、起き上りざまに佐藤に斬りかかった。

「あんたホントに武儀つすか？ 弱すぎつす」

「ぐつ！」

俺の拳は佐藤の手に受け止められ、ぐるんと捻られた。  
再び崩れる俺。カラソとナイフが床に落ちる音がした。

首筋にナイフを添えて、佐藤は言った。

「去年の要求。あれを受け入れるなんなら、命までは奪わないっす

「……くく。ようやくか」

「？ 何がつすか？」

「聞こえないか？」

しーっと口元に人差し指を当てる。

「……サイレンの音。去年と同じっすか」

「俺の十八番だからな」

近づくようにして大きくなつてこいるこの音は、パトカーのサイレンの音だ。

俺は琴音に電話する前に、警察に連絡を入れていた。佐藤に関するデータも送つてあり、警察は佐藤を容疑者として捕らえるべく動いてくれた。つくづく便利な連中だ。厄介もあるが。

「もし俺が犯人じゃなかつたらどうしたんすか

呆れたような口調で言つ佐藤だが、

「まあいいっす。どうせこいつなるだろつとは思つてたつですから

「どうするんだ？ 逃げるのか？」

「そう言つあんたは捕まえないとんすか？」

「どうも俺一人じゃ無理そうだし」

腹が痛くて立てないだけだけどな。

「じゃあ、ありがたく逃げさせてもらひますね」

そう言つて、佐藤は悠々とトイレから出て行つた。

「お疲れ」

痛む腹を押さえながらトイレから出て、一階に降りた俺を迎えたのは琴音だった。

「犯人、取り逃がしたよ」

「そう? どうかしらね?」

琴音は言いながら悪戯っぽく笑う。

「どういうことだ?」

「捕まつたわよ。犯人」

「え? 誰が捕まえたんだ?」

「ほら、あそこ」

そう言つて琴音が指差した先には、

「……なるほど。後で礼を言つとかないとな

琴音の指の先では、遠山と神崎が警察と話していた。

たまたまゲーセンに来てたのだろう。遠山の驚いている様子がこ

こまで伝わってくる。

「ま、今回は素直に褒めといてあげるわ」

「あつや。で、実際の俺のランクがどれくらいなのか、わかつたのか?」

「この事件だけで判断するなら、Cランク」

「そんなもんか?」

まあそれくらいが妥当なところか。

「はあ、じゃあ俺、青海の公園寄つてから帰るわ

「え? もう帰るの?」

「面倒な警察は遠山達に押し付けられたしな  
じゃあーと手を振つて、俺はゲーセンから出て行つた。

羽音と解決（後書き）

何といつ荒い推理・・・

直じゆ、非日常への駆動（前書き）

そんな結果を進展させたい・・・

## 声と姉と、非日常への胎動

扉を開けて踏み込んだ先。そこは普段あるべき教室とはかけ離れた、名状しがたい空間だった。

床一面に広がる赤黒い液体、鼻を刺すような異臭、生温い空気が肌にまとわりつき、黒板には血文字で解読不能な言語が殴り書きされている。ポタ、ポタと何かが垂れる水音が妙にはつきり聞こえる気がした。

いつの間にか、教室の中央に影が立っていた。教室は薄暗いが、うつすらと見えた顔は緑色のエルのようだ。

そのエル人間は、こちらの存在に気付くと両手を広げて襲いかかってきた。

「……では、戦闘の前に、このよくな漫流的で名状しがたい惨状を見てしまつた探索者はS A Nチエックどつぞ」

話をさかのぼること一時間。俺と少女、そして琴音は青海の公園でベンチに座りのんびりと雑談をしていた。俺だけ別のベンチに座つていたが。

そんな折、少女の発した言葉が、事の発端となつた。

「そういえば……秋空は昔と余つたことがあるじゃね？~

「え？ そうなの？」

少女の言葉に驚いたように琴音が聞いてきた。

「いや、そんな記憶はないが……」

言いながら少女の顔を見つめる。……全く覚えない。こんな綺麗な髪と目、見ていたら忘れることがないだろう。

「しかし、妾はお主の声を聞いたことがある」

「声？」

「つむ……つかし思に出せぬのだ。お主の趣、一体どうで聞いたのか」

「声、ねえ。思い違ひじやないのか？」

「始めお主と会つたときから、何やら声に妙な違和感を感じておつたのだ。間違いない」

でも、声の印象なんて曖昧だしな……変えよつと思えばこくらでも変えられるし、電話や無線を仕切りにするだけで声の高低は豹変する。その変化した誰かの声が、たまたま俺と似ていたとしても何もおかしな話ではない。

「のう、お主、兄弟とかおらぬのか？」

「姉ならこるけど、俺とは似てもつかない声だぞ？ もうひとい意味で」

透き通りのような綺麗な声だ。俺の声は……まあ、普通。高くなはなく、どちらかと言えば低いだけの、特に特徴のない声。

「その姉上、今はどこにゐるのだ？」

「？ 学校か、家かだと思つけど」

「なら、今からお主の家に行くところのはじめにや？」

少女は胸の前で軽く手を打つて、『それだ』と言わんばかりに頷きながら、衝撃の提案をしてきた。

「いいわけないだろ。お前はもつひとつ警戒心とつものを学んだ方がいい」

「なにゆえじや？」

少女は不思議そうな表情で首を傾げた。

何せ名前も知らない男に『ラーメン食いに行ひ』と言わされて、普通に着いて行つてしまつ女子中学生（自称）だ。俺が身も心も紳士だからいゝものの、やけりへんの怪しこいつさんにも着いて行つたりしてやうで心配だ。

「とにかく、駄目つたら駄目だ」

「嫌じや嫌じやー」

「……何でそこまで来たがるんだ

何なんだろう。琴音もそうだったが、俺の家は人を惹きつける何かがあるのだろうか。

「別に行つてもいいんじゃない？」

「え、えーーー？」

琴音がまさかの裏切り発言。まあ、元々敵味方の関係ではなかつたが。

「だつて、猫の件があるでしょ？ それ、今済ませちゃいましょ。秋空の家で。どう？」

「どう、と言われてもだな……」

腕を組んで考え込む。肯定か否定かで悩んでいるのではない。どうやつて断るうか、真剣に考える。

「そうだな……」

琴音は俺の言葉に被さるほど素早く、

「決まりね」

「え？ 何が？」

「あんた今『そうだな』って言ひたじゃない。同意したじゃない。私は確かに聞いたわよ

「はあ！？」

何だその小学生のような言い分は。

「別に同意したわけじゅ……」

「『そうだな』」

「…」

雑音混じりの俺の声が聞こえてきた。驚いて息をのむ。

俺が発した声ではない。誰かの声マネでもない。だがこれは……

「正真正銘、秋空の声ね」

あまりのことに、開いた口が塞がらない。

録音されていたのだ。俺に気づかれないようにしてやられた。

「いつが探偵科Sランクなのを完全に忘れていた。

「じゃあ行こつか」

「うむ。よくはわからんが、要はアキラの姉に会えるのだな

琴音が少女の手を引いて一緒に立つ。

「ちょ、ちょっと待て。そんな発言撤回するに決まってるだろ」「ふーん。じゃあ抱き枕カバーあげないけど、いいの？」

「なん……だと？」

俺は衝撃でその場から動けなかつた。

「お前……何て卑怯な……」

琴音の意地の悪い笑みを見て、俺は悟つてしまつた。あの、報酬に抱き枕カバーという一見オイシイ条件は、最初から俺を釣るための餌だったのだ。そして、そこまで気づいても、俺が抱き枕カバーを諦めることが出来ないここまで、あいつはわかっている。

嵌められた……何てことだ。そこまで計算されていたなんて……

「それじゃ、私達は先に行くから。秋空は猫の回収よろしく」

なぜかとても嬉しそうに去つていいく琴音の背を、俺は無気力に見送ることしか出来なかつた。

学校に預けていた黒猫を無事に受け取つた。ダンボールに入つているため、ものすごくかさばる。

猫の入つたダンボールを抱えて探偵科の廊下を歩いていると、意外な人物に出くわした。

「久遠」

白い少女に話しかける。まだ帰つていなかつたようだ。

「…………何ですか？」

久遠を見るたびに思うのだが、じいつ、ただ立つてゐるだけで異様に目立つ。浮世離れしてゐる、とでも言うのだろうか。

「いや、まだ帰つてなかつたんだなと思つてな。何してるんだ？」

「今は何も。さつきまでは白雪と模擬戦をしていました」

「白雪？」

確かに遠山のところの通い妻も白雪といつ名前だつたような。

「松永君？」

たまたま通りかかったのか、星伽が久遠の後ろから姿を現した。

噂をすれば、というやつか。

相変わらずすごい美人だ。

「呼んだ？」

「いや、呼んでない。久遠が今模擬戦してきたって言うから、その話してただけだ。というか、SSRは今合宿じゃないのか？」

「私はどうしてもやらなくちゃいけない生徒会の用事があつて、今田から行くことになつてるの」

「大変なんだな」

あんまり優等生過ぎるつてのも、考えものだ。

「久遠さんと松永君つて、お友達だつたんだね」

ああ、と口元まで出かかった言葉を、すんでのところで飲み込む。バカか俺は。また妙な噂に悩まされたいのか。星伽はわざわざそういうこと他人に広めるようなやつには見えないが、念には念を。ここは否定しておくべきところだ。

「いや、ただのクラスメイトだ」

「え、そうなの？ その割にはすごい仲良しそうだつたけど」星伽が驚いたように、さつきよりも少しだけ目を大きくした。

「……いいえ。私と彼は、ただのクラスメイトです」

おお。ナイスだ久遠。

「チームメイトでもあります」

それは余計だ。

「へー、そうなんだ。松永君、久遠ちゃんが強いからつて、守られてばつかじやダメだよ？」

「はは。そうだな。俺も頑張らないと。ところで、久遠つてどれくらい強いんだ？」

俺は前から少し気になつていたことを尋ねてみた。

「うーん。私がさつきの模擬戦で、何回やっても歯が立たなかつたくらーい？」

「……え？」

星伽つて確か、めちゃくちゃ強いんじや……

「……あれは、お互い能力使用禁止の縛りがあつたからです。実戦ではああはならない」

それつて、純粹な剣術勝負で星伽を圧倒したつてことだよな？久遠つて実は、俺が思つてるよりも数段強いのか？

「あ、私生徒会の用事があるから、もう行くね」

「え、ああ。わかつた。頑張つてな」

「うん、ありがと。それじゃあな」

星伽は手を振つて、足早に去つて行つた。

「いや、お前強いんだな」

「……いいえ」

短く答えると、久遠は俺を通り過ぎて歩き始めた。

「え、おい。どこ行くんだ？」

慌ててその後を追つ。

「帰ります」

「これから用事は？」

「特にありません」

「じゃあ今から俺の家に来ないか？琴音と……もう一人来る」とことなつてな

「……それは、あなたが公園で出会つた少女のことですか？」

少しだけ久遠がうつむく。

「え？ 何で知つてるんだ？」

「……私が横井琴音を護衛していること、忘れましたか？」

「そういえばそうだつたな。てか、いたの？」

「いいえ。基本的に、能力を使って遠隔から護衛していますから」「能力？」

「……いずれあなたもわかります」

しばらくお互い何もしゃべらず、一階に降りて、探偵科を出ると、久遠がポツリとつぶやいた。

「……あの少女には近づかない方がいい」

「え？」

久遠は質問には答えなかつた。

「あなたの家、行く」とします」

「あ、ああ、そうか」

いつも以上に不思議な発言を残した久遠だったが、家に着く頃にはすっかり頭から抜け落ちていた。

それからの展開は速かつた。

運よく家にいた姉さんの声を聞き、その声に聞き覚えのないことを見出したら、やることがなくなつてしまつた。俺、姉さん、琴音、久遠、少女の五人でやるようなゲームもそうそなく、久遠以外はTRPG経験者だったので、部屋の引き出しの奥からCのリプレイシナリオを引っ張り出してきてやることになつたのだ。

だが、

「終わっちゃつたねー」

リビングに、姉さんの声が虚しく消えてゆく。

早い。終わるのが早すぎる。そこそこ長めのシナリオなのだが、一時間強で終わってしまった。

流石に探偵科のSランクが一人もいると、謎解きが一瞬で終わってしまう。少女も久遠も中々頭の回転が速く、キーパーである俺の仕事は極端に少なかつた。

「普通に全員生還したな……」

このゲーム、一応死亡率の高さに定評があつたはずなのだが。

「一回、このメンバーでバラ イアとかやってみたいわね」

ソファーに座っていた琴音は、ぐつたりとソファーの背もたれにしなだれかかつた。

「楽なのに疲れる、なんて経験初めてじゃ。こんなクトゥルフもな」

「久遠はどうだった？正直このプレイでTRPGを誤解してほしくはないんだが……」

「……楽しかった」

「おお、それならよかつた」

テーブルの中央に置かれた林檎ジュースを、自分のコップに注いで一気に飲む。

「まあ、そうは言つてももう六時か」

「そうだ。みんなご飯食べきなさいよ」

言つと思つたよ……姉さん。

まあ異論はないが。

「どうする？お前らがよければだけど」

「残念じゃが、妾はそろそろお暇をせてもらおうかの」

少女は、本当に残念そうに眉を寄せた。

「そうか。琴音は？」

「私はこの後やることあるから……次の機会を楽しみにしてるわ」

「久遠は？」

久遠は何も言わず、首を横に振つた。

「てことはこれで解散か」

「ありやりや。まあ、しようがないね」

姉さんが椅子を立つ。

他の三人もそれにならい、放置してあつた荷物を取る。

「あ、送つて行くには一人足りないな……」

「私は別にいいわよ」

「妾も構わぬ」

「……大丈夫」

「けど……」

心配だ。まあ久遠は強いし、琴音も一応拳銃携帯してるから大丈

夫だろうけど……

「妾が心配か？」

「ああ」

「その気持ちだけ受け取つておこつ」

「気持ちもそうだが、猫も忘れるなよ」

「あ」

忘れていたらしい。少女はバツが悪そうに笑みを浮かべてダンボールを受け取ると、わっと玄関の方に歩いて行つた。すぐに他の三人も後に続く。

「「「お邪魔しました」」」

「また来いよ」

玄関先で挨拶を交わし、三人は各自の帰途へとついた。

「秋空が家に友達連れて來たの、初めてだね」

「……そうだつたか?」

リビングに戻つた姉さんは、すぐに台所に入つてしまつた。  
しばらくしてキャベツを刻む音とともに聞こえた声に、俺はとぼけて返事をした。

……いや、あながちとぼけてもいない。この前琴音が家まで押しかけてきたことは、姉さんの中ではノーカンらしい。

「そうだよ。お姉ちゃん嬉しいな」

「……そうか」

姉さんは、迷惑かける。心配も、いつぱいさせてる。

今回のことでの、それが少しでも払拭されればなど、思わなかつたわけではない。

「今日の晩飯、何だ?」

俺は強引に話題を変えた。

「今日はねー……」

穏やかな日々が過ぎていいく。

「お帰り」

「うむ。ただいまじゃ」

ギイと扉が軋む音がして、一人の小さな少女が、蠟燭の光に灯された薄暗い部屋に入った。

そして、それを迎え入れる人影が一人。

「どうだつた？」

「ふむ。お主の言つた通り、やつらで間違いなさそつじや」

「それで？」

「松永の末裔は心配しなくてよさそつじや。しかし竹中の末裔と上泉の末裔。あの二人は要注意じやな」

「やはりな。姉の方はともかく、あれはただの意氣地なしだ」

少女が近くの椅子に腰掛ける。

「バスジヤックは明日だ。兵達も血に飢え、こちらに負けはない」「妾の出番もないがの」

少女は少し頬をふくらませた。それを見て人影が笑う。

「そう怒るな。この作戦の大部分はお前が考えたものだ。それに、血なまぐさい闘いは、お前には似合わん

「むー。また妾を子供扱いして……」

「実際、俺はお前より長く生きている」

「そつらしきの」

長い金色の髪をいじりながら、少女は切なそつにすつと田を細めた。

「……もっと早く、お主と出会つておきたかった」

人影は何も答えない。だが、さつきまでの少しおどけた雰囲気とは打つて変わって、戦場に挑む兵士のような緊張感をまとつた。

「絶対に手に入れるぞ。『漆漆色金<sup>シジイロカネ</sup>』を。そして解放される。必ず

だ」

「……本当に、いいのだな？」

「今更何を。俺はやると決めたことは、必ずやる」

その言葉で、二人はお互の意志を再確認した。

「先へ進む。俺達は、それだけだ」

## 声と姉と、非日常への胎動（後書き）

白雪がまだ学校にいるのは、ぶっちゃけ私の確認不足です。後から苦しいのは承知で理由をじっくり見てみました。

## 不死の王（前書き）

話が進むにつれて、原作から外れていいく（・・・・）  
まあ、いつか。

## 不死の王

まどろんだ意識の中、頬の辺りに柔らかさと温かさを感じながら、俺は目覚めた。

……なんだらか。これ。すごく柔らかくて、安心する。

まだぼんやりとしたまま目を開けると、肌色の何かが視界に映つた。

「ううん……」

どうやら、俺は今抱きしめられているようだ。あむつけと何かに締められる感覚。

「あきら……」

耳元で囁かれたその声で、俺の意識は完全に覚醒した。  
隣に寝ているのが姉さんである」と、姉さんが下着しか身につけていないことを認識する。

俺はなるべく姉さんの方を見ないようにしながら、その肩を軽く揺さぶった。

「姉さん?」

返事の変わりに、すやすやと安らかな寝息が返ってきた。  
天井と壁をおろおろと交互に見ていた俺だが、ふと枕元の携帯で時間を確認した。

十七時四十一分。

今からなら七時五十八分のバスになる。あれを逃したら、もう後はない。

「おいつ、起きろ姉さん。遅刻するぞ」

俺は焦つてベッドから飛び出そうとするが、

「うにゅう……」

「離せ、姉さん」

離れようとする俺を、背中に回された手が許さなかつた。一体、

姉さんの細腕のどこにこんな力があるのか、びくともしない。

「むにゃ……もづ、秋空つたら、私のライフはゼロよ?」

「はなせー! なんて言つてる場合じゃねえ! 起きるー・マジで遅刻するつて!」

「ふふ。私はもう準備出来てるもん」

「姉さん、もう起きてるだろつ。とつと離せーー!」

「はあ……はあ……」

バスに、乗り遅れた。

バス停で荒い息をつきながら、去つていくバスを見送る。その窓から、先に行つた姉さんの顔が見えた気がした。

「はあ……はあ……あれ? 遠山?」

「ん、松永か。お前も乗れなかつたんだな……」

二人揃つてため息をつく。何か、最近こいつと行動が似通つてゐる気がする。

「一時間田はもう無理だな。お前、自転車ないの?」

「この前爆破された。そういうお前は持つてないのかよ」

「ねーよ。諦めて歩こう」

降りしきる大雨のせいか、授業サボるくらい普段の俺なら何ともないのに、陰鬱な気分になる。

遅刻確定の道のりを、俺達はとぼとぼ歩みだした。

大雨の道を、一人で歩く。

雨のせいか、学園島の無駄に細長い道路が、いつも以上に億劫に感じられた。

「なあ。松永は一時間田どづする?」

「サボる」

「即答がよ

遠山の声に呆れたような色はなく、疲れたような声色だった。多分、遠山もフケてしまうかどうか迷っているんだろう。

「お前もサボっちゃえよ。後で星伽にノート見せてもらひつか、勉強教えてもらひうかすればいいだろ」

「それが嫌だから悩んでるんだよ…………」

苦々しげに遠山が呟く。

「そんなに嫌か？」

「当たり前だ。女嫌いの同志ならわかるだろ」「嫌な同志だな。事実だけぞ」

俺がそう答えて少ししてから、俺と遠山の携帯が同時に鳴った。

「遠山もか。誰だろ」

携帯をポケットから取り出して開くと、知らない番号が表示されていた。通話ボタンを押す。

「もしもし」

『秋空。今ど』

琴音の声だ。

今はもう授業中、………というかそれ以前に携帯番号は教えてないはずなのだが………どういうことだ？

「強襲科の近くだ」

『ちょうどいいわ。今すぐ探偵科まで来なさい』

「どうこうことだ。何があった？」

『武偵高の通学バスが、ジャックされたわ』

「何だと？」

ゾクリと、背筋に氷嚢を押し当てられたような感覚がした。

「それ、俺ん家の前で何分発のバスだ？」

『七時五十八分。誰か乗ってるの？』

「多分、姉さんが乗ってる」

電話の向こうで舌打ちする音が聞こえた。

「とにかく、早く来なさい」

電話が切れた。携帯を折りたたんで、通話の終わった遠山に早口で話しかける。

「遠山。誰からどんな内容の電話だった?」

「アリアから、事件があつたから来いって。どうした、顔色悪いぞ?」

「さつき俺達が乗り損ねたバスが、ジャックされたらしい」

「何だつて?」

遠山が田を見開いて驚く。

「てことは、アリアの言つてた『事件』って」

「ああ、バスジャックだらうな」

「お前はどうするんだ」

「とりあえず、琴音のところに行く」

「わかった。じゃあな」

それだけ言って、俺と遠山は別々の方向に向かって駆け出した。

琴音は恐らく、バスジャックの件で俺を呼んだのではない。

あいつなら神崎が動いていることは知つてゐるだろうし、もし琴音も目的が同じなら、協力しようとするはずだ。

多分、バスジャックと関係する何か。思いつくとすれば、犯人から脅迫されているとかか。

「はあ……はあ」

本日一度目の全力疾走。運動不足がたたつたのか、体力が落ちている。汗のせいで制服が肌にへばりついて気持ち悪い。

「遅い」

「はあ……」の前とは逆だな

琴音は探偵科の建物に腕を組んでもたれかかっていた。久遠もいる。

「時間がないから、歩きながら手短に話すわよ」

「走らなくていいのか?」

「大丈夫よ。まだ余裕あるし。気づいてるかもしれないけど、今から私達が向かうのは例のバスじゃないわ」

「そうは言いつつも、歩く琴音の足はいつもより断然速い。

「さつき、私の携帯に、非通知で電話がかかってきたわ。これがその音声よ」

琴音は携帯の録音リストの中から一つ選んで、再生した。

『今から 十分以内に シシ イロカネを メールで指定した 場所に 持つて来い』

「ボカロの声、か」

また『武偵殺し』の模倣犯といふことか。キンジのチャリジャックのやつと同一犯だろ？

それに『シシイロカネ』か。聞き覚えのある単語だ。

「指定の場所ってのは？」

「この近くにある教会よ。今は使われてないみたいだけど」

「それで、どうするんだ？ 要求された物、何なのか俺にはよくわからぬが、渡すのか？」

「それが、私もわからないのよ

困ったように、琴音は眉を寄せた。

「え？ 持つてない物なのか？」

「ええ。聞いたこともないわね。あんたはどう？」

「いや、俺も聞いたことないな」

真顔で嘘をつくのなら任せろ。とはいって、俺もその実態は知らないのだが。

「まあ、今アリア達がバスに向かってるんだけど、解決したらすぐ連絡入れるように言つてあるわ」

「それまで相手して、逃げればいいわけか

「それはヤバくなつたとき。しつかり捕まえる氣で行くわよ

「……無茶だる」

正直、逃げられるかどうかも怪しいところだ。

相手が一人とは限らないし、そうでなくとも飛んで火にいる何と

やらだ。相手は爆弾のエキスパート。どんな罠が仕掛けられていてもおかしくはない。

「大丈夫。こっちには久遠がいる。開幕から一気に仕掛けなければ何とかなるわよ」

「そうか?じゃあ、久遠が闘つてる間に、俺達が他のやつに人質に取られたりしたらどうする?」

「……問題ありません。三分四十秒ほど前から、二人の周囲に私の思念を配置しています」

……ちょっと何言つてるかわからないです。

「あんた、まだ久遠の能力知らなかつたの?」

俺の表情から困惑を察したのか、琴音が久遠の能力について話し始めた。

「久遠の能力は『感情の具現化』。喜びとか、悲しみとか、そういうものを削つて、自在に操れるエーテル体として召喚する……らしいわ」

「その通りです」

「……テ ミバチみたいな?」

俺が額を抑えながらそう聞くと、

「その解釈で、概ね問題ないかと思われます」

あ、久遠テ ミバチわかるのか。

「でもそれ、強いのか?」

「戦闘は、全て私の操作で行われます。問題ありません」「でも強い弱い以前に、この能力はリスクが高過ぎるわ」「リスク?」

「『感情を削る』っていうのは、一時的とはいえ久遠の感情の一部がなくなるってことよ。例えば喜びを削れば、久遠はあらゆるこの世の快樂から最も遠い存在になるの」

「お前何でそんなに詳しいの?」

俺なんて昨日直接聞いたのに、やんわりと流されたんだぞ。

「悲しみを削れば、人の死に何も感じなくなるし、恐怖を消せば、

死の恐怖を捨てることになる。強いけど、絶対に多用は出来ないわ

「なるほど。危ない能力だな」

完全に感情を失つた久遠がどうなるか、想像するだけでも恐ろしい。

「ていうか、削られた感情とやらは、元に戻るんだろうな？」

「ええ。再生します」

久遠が静かにそう言った。

「まあ、そうじゃなきゃ本当に使い物にならないよな」

しかし、今の久遠の言葉に引っかかるものを感じたのは、気のせいだろうか。

「とにかく、あんまり久遠に頼り過ぎないこと。自分の身は自分で守る」

「そつは言つても、俺もお前も何も出来んだろ」

「『武僧殺し』なんて言つても、所詮はただの人間だし、久遠も能力なしで二十人くらいは余裕で相手出来るらしいから。大丈夫よ」

「……あれ？ 結局久遠が頑張るだけ？」

まあそれであの爆弾魔が捕まるなんならいいんだが。俺の存在意義が限りなく無に等しい件について。

「ほら。着いたわよ」

角を曲がった先を少し行くと、石造りの道が続いていた。その向こうには古びた教会がそびえ立つてゐる。両脇には墓地があり、整備はされているらしく、草は刈り取られていた。

「……ここからは私が先行します」

石造りの道に踏み込む一步手前で、久遠が腰の刀を引き抜く。俺と琴音も、銃を抜いて構えた。

久遠、琴音、俺の順に並び、慎重に進んで行く。

途中、念には念をと俺が教会の壁に起爆式の爆弾を設置したりもして、教会の扉の前まで辿り着いた。

木製の、重厚そうな大きな扉だ。

「下がつてください」

「？」

久遠の言葉通り、一步下がる。  
すると久遠は、手に持ったその刀を扉に向かつて三度振り、柄を叩きつけた。

「！嘘だろ……」

扉が、砕けた。

吹き飛んだ木の欠片がチャペルの床を滑る。わずかに残った、もう到底扉とは言えないそれから、パラバラと木の屑が舞つた。

「……気を付けてください。誰かいます」

驚いた俺を氣にも留めず、油断なく久遠が先へ進む。その久遠の様子に、俺は少しだけ落ち着きを取り戻した。

チャペルは静かで、薄暗かつた。正面の壁にあるステンドグラスから差し込む光が、細かい塵を照らしている。

そして、俺はそれを見た。ステンドグラスの下にある、玉座のようになされた椅子に座るそれを。

顔はよく見えない。いや、うつむいている。

それを見た瞬間、俺は何か気配のようなものを感じた。奇妙な感覚。鼓動が、脈拍が速くなつていく。

「……来たか」

低い声がした。俺はその玉座に座つた人影に銃を向けた。シルエットから、刀を握っているのがわかった。

「ん？三人？……鈴木桜は一緒じゃないのか」

うつむいたまま、こちらを見向きもせずに、人影が呟くようにして言った。

「まあいい。よく來たな」

「お前が『武偵殺し』の模倣犯か？」

銃を向けたまま、俺は高鳴る鼓動に耐え切れず、声を上げた。

「そうだ。だが、その呼び名は氣に入らんな。俗人が勝手に決めた、

くだらない呼び名だ」

人影が立ち上がった。依然、うつむいたままだが、頭がステンドグラスから差し込んだ光の軌道に重なる。

その頭は白濁としていて、髪はなかつた。

「顔を上げる。心を構えろ」

目が、離せない。

その顔は白く、炎の消えた蠅のように溶け、固まっていた。白く、白濁としたその顔には二つの穴があり、その奥の黒い光は、間違いない、俺を見つめている。

視線が交差したまま、その恐ろしい外見に恐怖しながら、動けない。だが、不思議と意識だけはしつかりと働いていた。

直感する。俺とこいつは、決して相容れぬ存在であり、本来会うべきではなかつたのだと。

「あ、あ、あ……」

ぐらりと琴音の身体が揺れて、俺は我に返つた。

「おい、琴音！しつかりしろ！」

倒れる琴音を抱き寄せる。琴音の手から滑り落ちた銃を慌てて拾い上げる。

「琴音！おい……」

気を失っている。あんなものを見たんだ。精神的なショックは大きいだろう。

俺は琴音の銃を自分腰のホルスターにしまいながら、目の前の異形の存在に問いかけた。

「お前、何なんだ。人間か？」

あの顔は、特殊メイクではない。目が慣れてきたのでわかつたことだが、あいつ、身体が透けている。赤黒い身体を通して、濁った骨や脈打つ血管が見える。

黒い、擦り切れたスウェットを穿き、マントを羽織っている以外は、何も身に着けていないようだ。

「人間、だった」

「だつた？」

「そうだ」

男はゆっくりと、じらりに近づいてきた。

「動くな！」

三歩ほど歩いたところで、俺は引き鉄に当てた指に力を入れながら叫んだ。意外にも、男はそれで歩みを止めた。

「俺は、『ノーライフキング』。無機の王でも、不死の王でも、どちらに取つてくれても構わん」

「不死の……王？」

思わず声に出して呟く。『不死』だと？

「そうだ。一度死に、あの世を見て、再び蘇った者達の頂点だ」「何意味わかんねー」と言つてんだ。そんなのあるわけないだろ」「くく。貴様にはもう、俺の醜い身体が見えているだろう？それが答えた」

ノーライフキングがせせら笑う。

「もう少し現実を見ることだな。……さて、今日どうしてお前達をここに呼んだのかは、わかっているだろ？」「

「『お前達』？俺と久遠が来るのがわかつていたとでも言つのか？」「いや、もう一人来ると思っていた。まあ、今来なくとも、結局は同じことだ」

ノーライフキングがまた一步踏み出した。そのとき、今まで黙っていた久遠が口を開いた。

「動くな」

久遠の鋭い制止の声を無視し、ノーライフキングは一步進んだ。瞬間、久遠が消えた。

辺りに鉄を打つ音が鳴り響く。今の一瞬で、久遠とノーライフキングは切り結んでいた。

「『動くな』だと？それはじらのセリフだ。自分の立場をわかっているのか？俺が今、大量の武僧高の生徒の命を握っていること、忘れたわけではないだろうな？」

そうだった。神崎から連絡が入るまでは、こちらかは動けない。久遠がゆっくりと刀を引いた。ノーライフキングも、構えていた腕を下ろす。

「……何が目的なんだ」

「電話でも言つたが、俺の望みはただ一つ。お前らの持つ『漆漆色金』の欠片カネが欲しいのだ」「何なんだよ。そのシシイロカネって

去年、姉を人質に取つたやつらの要求もそれだつた。軽く調べたが、その正体は全くの闇の中だ。

「とぼけるのか？所詮貴様は、百人あまりの武僧高の生徒よ……」

「とぼけるつもりなんかねーよ。何なんだ。そのシシイロカネってとにかく今は、神崎からの連絡があるまで時間を稼ぐ。この会話を長引かせて、撤収。落ち着いてやればいい。「くくく。はははは！」

「な、何だ？」

ノーライフキングの高笑いに、俺は一步たじろぐ。

「浅はかだな。くく、時間稼ぎか。なるほどなるほど」

ノーライフキングの嘲笑は、俺を凍りつかせるのに充分だつた。心を……読まれた？バカな。

「しかし、悪いがそういうはいかん」

ノーライフキングは、その骨ばつた両手を掲げて、合わせた。

その手の音を合図にして

「上です。気をつけて」

久遠そう言つて刀を構え直すのと、天井を突き破つて、何かが落ちてくるのはほとんど同時だつた。

## 兵と逃走

「言つたまう？俺は『不死の王』だ。王とは、民を従える者のことだからな。

ノーライフキングの言葉が、遠くから聞こえてくるように遅れて脳に届き、理解する。それほどまでに、その光景は壮絶だった。見ているだけで吐きそうになるような異形の存在達が、俺達を取り囲んでいる。ある者は肉体を持たぬ骸骨で、ある者は生氣のない目玉が飛び出している。四肢の一部が欠けている者や、身体が溶けたようになつていてる者もあり、それら全てが輪郭だけは人の形を保っていた。

「……中に三人、特殊マイクの人間が混じっています。気をつけてください」

この光景を目の当たりにして、久遠は冷静に言葉を紡いでいた。  
何人くらいいるんだ？四十、五十人……いや、もつとか。  
逃げればバスに乗つてるやつらが死ぬし、ここにいても俺達が死ぬ。  
一体どうすれば……

「私が戻るまで、耐えてください」

「は？お前、何を……？」

久遠が腰を深く落とした。

「動くなよ？動けば乗客の命は……」

ノーライフキングの声を無視して、久遠は真っ直ぐに、あり得ないくらい速く飛んだ。ノーライフキングの数歩前に立ち、刀を向ける。その刀から、ポタポタと何かの水滴が垂れた。

遅れて、ノーライフキングの周りにいた五体のゾンビの首が吹き飛んだ。

「……それが答えか？上泉」

久遠は答えずに、刀を横薙ぎに一閃する。

「いいだろう。かれ」

久遠の斬撃を刀で受け止めたノーライフкиングは、静かに命令を下した。

唸り声を上げて、ゆっくりと向かってくるゾンビ達を視界に捉えながら、不思議と俺の頭は冴え渡っていた。現状を確認する。

まず、今のノーライフкиングは久遠の相手で、起爆の余裕がないこと。

そして仮にこのゾンビ達に自我がないとすれば、バスを爆破出来る可能性があるのはノーライフкиングと、特殊メイクの三人ということになるが……この期に及んで未だ何のアクションもないということは、恐らくやつらに起爆は不可能なのだろう。

久遠は、能力なしでも二十人相手出来ると言っていた。が、ゾンビの数はその倍以上。結局、ある程度は俺が何とかするしかないということか。

厄介なのは中に三人混じっている人間だ。これのせいで、銃の使用が極端に制限されている。

このゾンビ達はどうなのかわからないが、人間を殺すのは武偵法九条に反する。

ゾンビは……恐らく殺しても武偵法には引っかからない……はず、だ。でなければ人間を三人紛れ込ませる意味がない。

俺は左腕でぐつたりとした琴音を抱き寄せたまま、右手で銃を構えて発砲した。これは威嚇射撃だが、人間なら銃声に何かしらの反応を示すかもしれない。

「いつ……！？」

肩に激痛が走る。片手で銃を撃つたのは初めてだが、ここまで反動の負荷が大きいとは思ってなかつた。痛みより先に驚きを感じる。

「くそつ」

すでにゾンビとの距離は三メートルを切っていた。

どうすれば、どうすればいい？どうやってこいつらの相手をすれ

ば……

迷っている間にも、ゾンビ達はさうじて距離を詰めてくる。いや落ち着け。確かに俺の周囲には、久遠の思念とやらがあるはずだ。よく狙つて手足、頭の順に撃てばいい。それくらいの余裕はある。手足や胴体なら、人間でも死ぬことはない。

俺はホルスターから琴音の拳銃を取り出し、構えた。片手撃ちなら、反動の少ない SIG Sauer P230の方がいい。引き鉄を引く。放たれた弾丸は、狙つたゾンビの右腕を貫通した。傷口から青緑の、どろつとした液体が溢れている。

それがゾンビであることを確認して、俺は頭を撃ち抜いた。脳漿や頭蓋骨を飛び散らせてゾンビが倒れる。

「う……」

こみ上げてくるものを抑え、俺はなるべくそれを見ないようにしながら、隣のゾンビに銃口を向けた。これを繰り返せばかなり時間が稼げる。

そのはず、だった。

一休目の腹を撃ち、頭に照準を構えた俺は、驚きのあまり固まつた。引き鉄にかけた指に力を込めようとしても、凍つたように動かない。

「え……」

さつき頭を撃ち抜いたゾンビが、のつそりと起き上がり、一いちに腕を伸ばしてきている。

「何で……」

動ける。

撃ち抜いたはずの頭は、沸騰したように泡立っていた。

「何だよ……」

ゾンビの首から上の細胞が、みるみる構築されていった。ものの数秒で、頭が元に戻る。

有り体に言えれば、そいつは再生していた。

「う

そのグロテスクな光景に、無意識に抑えていた恐怖心が溢れ始めた。

る。

怖い。逃げたい。死にたくない。死にたくない。  
いや冷静になれ。今逃げたら死ぬ。

せめぎ合つ心の葛藤は、ゾンビの手が俺に届く隙を生むのに充分  
だつた。眼前に伸びてきた白い手に、俺は叫び声を上げて飛び退  
いた。

「うわあああっ！……え？」

壁に阻まれているかのように、ゾンビの手は俺の顔の数センチ前  
で止まっている。

「はあ……はあ……これが、久遠の能力か……」

危なかつたが、おかげで冷静さを取り戻した。

もうここに来て何分経つた？

ふいにそんな疑問が浮上した。

神崎からの連絡はどうした。さすがに遅過ぎないか？

俺は銃を琴音を抱えたままの左手に持ち直し、自分の携帯を取り  
出して遠山にかけた。

『もしもし。どうした？』

『遠山。そつちは今どうなつてる』

『さつき爆弾を解除した。今はもう大丈夫だ』

『何だと？』

俺は携帯を取り落としそうになつた。

『神崎は今どうしてゐる？』

『……アリアは……』

『……おい！何があつたかは知らんが、早く答えてくれ！』

いつ、この見えない障壁が破られても、おかしくはないのだ。そ  
うでなくても、大量の死者の腕が、目の前で蠢いているのは心臓に  
悪い。

『アリアは、額を撃たれた。今医療科に運び込まれたところだ』

「そういうことか」

「どこか弱々しい遠山の声で、事情は把握出来た。

「わかった。切るぞ」

言い終わると同時に電源ボタンを押す。

そうとなれば、話は早い。今すぐここから逃げるだけだ。

「久遠！バスに仕掛けられていた爆弾が解除されたらしい。逃げるぞ！」

「……了解」

久遠の声が耳に届くより早くに、俺は発煙筒を投げ、爆弾の起爆スイッチを押した。

そこからのこととはよく覚えていない。

ただ煙の立ち込める教会を抜け出し、東京の街並みを普段の俺ではありえないほどの速度で駆け抜け、医療科のベットに琴音を寝かせるまでが、映画のフィルムをぶつ切りにしたかのように、途切れ途切れに俺の中に残っている。

「はあ……」

琴音の寝ているベットの隣のパイプ椅子に座り、俺はため息を漏らした。

「あなたも休んでください」

ポツリと、隣に座つている久遠が言った。

「俺はそんなに疲れてないから。お前こそ、五、六人一気に相手して、しかも感情削つたんだろ？ 休め」

「私は軽く『恐怖』を削つっていた。ですがあなたはそうではない

「……ちょっと便利な能力に思えてきた」

再びため息をついて、俺は立ち上がった。

「電話していくる」

久遠は何も答えず、こくりと頷いただけだった。

「もしもし。理子」

「うん。どうしたの? アキくん」

俺は病室を出ると、探偵科の峰理子に電話をかけた。

「『武偵殺し』について情報が欲しい。調査を依頼してもいいか?」

「くふ。だーめ」

そんな声とともに、理子が俺の前に回り込んできた。

「……いたのか」

「あれ? あんまり驚かないんだ?」

さっきまでの恐怖が抜け切つてないのと、自分の不甲斐なさに落ち込んでいたせいで、俺はジト目で理子を見ていただけだった。

「どうかしたの? 何か暗いよおー?」

「いつものことだろ。それより、『武偵殺し』の件、何でダメなんだ? 報酬なら出す」

通話を切りながら、俺は尋ねた。

「はい。これ」

理子が無地のクリアファイルを手渡してきた。

「? 何だこれ」

「報酬は秋葉原で一日テートね。では、りこりんは忙しいのでこれにて失礼しますっ」

理子はなぜかびしつと敬礼して、その場を走り去った。

「え? おい、ちょ……行つちまた。何なんだ? これ」

手元のファイルを見て、俺は再度ため息をついた。

「ただいま

病室は、出て行ったときと何も変化がなかった。

「……模倣犯では、ないのですか」

「どうやら聞いていたらしい。

「遠山の話では、そ「うらし」」

パイプ椅子に腰掛けながら、俺は答えた。

「遠山からさつきメールがきてな。捕まつたやつは真犯人じゃないんだと」「

俺は言いながら、理子からもらったクリアファイルの中身を取り出した。

「これ……『武偵殺し』のデータ? 何で……」

それは十数枚の、簡単な『武偵殺し』に関する情報が書かれたデータだった。理子には何も言つてなかつたのだが、なぜ俺がこれを必要だとわかつたのだろう?

不思議だが、その疑問は氷解することなく、すぐに頭の片隅に流れ行つた。それ以上に、データのある一ページが俺の意識を引いた。

「これ、遠山の兄さんか?」

そこには、『浦賀沖海難事故 死亡 遠山金一 武偵(19)』と書かれていた。

この事件はよく覚えている。

あのときは酷かつた。マスク!!でもも酷かつたがそうじやない。遠山がだ。

あのときの抜け殻のような遠山は、本当に見るに耐えなかつた。目を離したら次の瞬間遠山が首吊つてそくな、そんな氣すらして、でもあいつが一人になりたがつてるのはわかつたから、俺はしばらく遠山の家に通い詰めていた。

あいつが武偵を辞めたいと言つたとき、俺はそれでいいと言つた。深い理由なんてない。ただ、あれ以上あんな遠山は見たくなかった。

「……いかん。集中しないと」

ぶんぶんと頭を振つて意識を戻す。

これによると、これはいわゆる可能性事件で、本当に『武偵殺し』かどうかはわからぬようだ。だが、仮にこれが『武偵殺し』の犯

行だとすると、ある規則性が浮かび上がってくる。

「バイク、車、船。自転車、バス……次は飛行機か新幹線つてところか」

規則性とは言つても何てことはない。乗り物の大きさが徐々に大きくなつていき、目標を殺した時点でまた小さくなるだけだ。

「…………あれ？」

じゃあ今回の目標つて何だ？ノーライフкиングは『シシイロカネ』だと言つていた。

この規則性は『次も三回で仕留める』という意味合いを持つ可能性が高い……と思う。船や飛行機、新幹線以上の乗り物なんてそういうないし。するとノーライフкиングは、次の取り引き場所に、琴音が『シシイロカネ』を持つてくる公算が高いと見ていることになる。俺も、琴音も、久遠も知らないものを、持つて行くと……

次で捕らえ、拷問でもして無理やり吐かせる気だろ？？あるいは、俺達を人質に親族と取り引きするか。どちらにせよ、それは三回で目的を果たしたことになるのだろうか。

そもそもこのメッセージの意味つて何だ？なぜノーライフкиングは、遠山の兄さんを狙つた？

様々な疑問が脳内を駆け巡る。

「わけわかんねー……」

両手で目を覆つて、膝に肘を付いて考える。

ほどなくして、俺は二つの可能性にたどり着いた。

一つ目は、『シシイロカネ』なんものは最初から存在せず、俺達を誘い出すための妄言である可能性。

二つ目は、ノーライフкиングと『武偵殺し』が、別人である可能性。

そう。犯行から推測出来る『武偵殺し』の人物像と、ノーライフкиングの行動は所々食い違つていて、遠隔から武偵を操作するだけの臆病者かと思いきや、今日は直接俺達と会つた。兵士は全自動で使い捨てのセグウェイではなく、耐久に優れるゾンビ兵。

しかしもし、仮に、ノーライフキングが『武偵殺し』ではないとすれば、今日のあれはただのはつたりだったことになる。でも、はつたりであそこまで出来るものだろうか？

「ん？ 何だこれ」

ファイルの中に小さな紙切れが入っていた。

『アリアは五日後、十九時の便だよ』はあと

理子の丸っこい字で、そう書かれていた。

それで、全てが繋がった。

「なるほど。『武偵殺し』も『無機の王』も、中々粋なことをしてくれる」

「……何か、わかつたのですか」

「ああ。今この状況が、どうしようもない袋小路だつてことがな」

忌々しく思いながら言葉を吐き捨てて、

「すぐ戻る」

それだけ言い残して、俺は再び病室を後にした。

## 兵と逃走（後書き）

どうでもいいんですが私、バイオやったことないんです。

(くそつ。してやられた。初めからこれが狙いか……)

やつらの作戦はあまりに単純で、気づけなかつた間抜けな自分に苛々する。

(なぜ……見抜けなかつた)

走りながら、悔しさに歯噛みする。

まず『武偵殺し』と『不死の王』は別人だ。それは間違いない。そして、その上で次にノーライフкиングが指定してくる場所は、飛行機。『武偵殺し』が次にジャックする飛行機だ。

そして、神崎はそれに乗る。遠山が知ってるのかはわからないが、多分それに着いていくのだろう。

だとするとノーライフкиングの次の入質は、飛行機の乗客ではな

く……

「ぜえ……はあ……つ、着いた……」

男子寮のある一室の前で、俺は乱れた息を整える。

今日は走りすぎた。明日は確実に筋肉痛だ。

息が落ち着いたところでインター ホンを押す。だが、

「……いない、か

何も反応がない。

確か遠山は、アリアが撃たれたとか言つてたつけ。てことは医療科か、武偵病院にでもいるのだろうか。

考えてもしようがない。俺は携帯を取り出して、遠山に電話をかけた。

「留守電……」

後でかけなおすか。

医療科の病室に戻ると、琴音はもう田を覚ましていた。

外傷はなく、精神的なショックが原因で、今はもう大丈夫だが、少し安静にして行けとのことらしい。いやまあわかりきつてることなんだが。

「気分はどうだ」

パイプ椅子に腰かけながら言ひ。

上体だけ起こしてベットに座る琴音は、少し顔色が悪かった。

「最悪……」

おい、全然大丈夫そうじやないぞ。

「とりあえず、久遠から大体何があつたかは聞いたわ」

琴音の声からは疲労が色濃く読み取れた。自分が見たもの、久遠から聞いたことを、信じたくない精神の疲れだ。

「そこの資料は読んだか？」

「いや、何これ？」

琴音は具合悪そうにのっそりとファイルを手に取り、中のしおり状の紙をめくつた。

「これ『武偵殺し』のデータ？ やるじゃない、秋空」

「いや俺じゃない。理子っていう俺の知り合いがくれたんだ。一応、信用出来る情報だと思う」

あいつにはよく情報収集を依頼するからな。いわゆるお得意様だ。

「ふーん」

しばらく三人とも黙り、紙の擦れる音だけがした。

「……何これ。私達まんまと嵌められてるじゃない」

読み終わった琴音は、目に怒りの色を顕わにしていた。

「……久遠もそれを読めばわかるだろうが、状況の整理も兼ねて俺が説明する。まず、ノーライフキングは『武偵殺し』じゃない。バスジヤックの犯人は他にいて、ノーライフキングはそれを利用して、俺達を教会に呼び寄せた。でも、これは『本命』じゃない

「……次、ですか」

「そう。次が『本命』。俺達は今日、あの教会から逃げおおせたんじゃない。より確実に俺達を仕留めるため、いつたん逃がされたん

だ

あれだけの兵に囲まれて、逃げられるといつのもおかしな話だしな。

「次にノーライフキングが指定してくる場所は、五日後、神崎アリアの乗る飛行機だ。そこには『武偵殺し』、神崎アリア、ノーライフキング、そして俺達が乗ることになる」

「……爆弾魔とあの不死者が別人なら、応じなくともいいのでは?」「そういうわけにはいかない」

俺は頭を振った。

「言つたろ? その飛行機には神崎が乗るんだ。『武偵殺し』は、多分神崎を狙つてる。遠山がそれを知れば、あいつも着いて行くだろう」

「このとき、俺達が行かなければ、飛行機には『武偵殺し』、神崎、遠山、ノーライフキングが乗ることになる。」

「ここまで言えばわかるだろ? 神崎達は『武偵殺し』、ノーライフキング、そしてゾンビ兵達を一気に相手にしなくちゃならない。『武偵殺し』がどれくらい強いのかはわからないが、ノーライフキング一人でも久遠と互角にやりあえるくらい強いんだ。それに単純に考えても、二対一+不特定多数。多分遠山達は勝てないだろう」

「つまり、やつらの次の人質は、遠山達つてことね」「そうだ。だから次の要求に俺達は応じざるを得ないっていうのが、やつらの狙い」

そこで仕留めるつもりだ。本当に『シシイロカネ』なんでものがあるのかはわからないが。

「まあ、これはあくまで俺の『読み』だ。当たらなければそれに越したことはないが……」

「そんなわけないでしょ。ビツ考へてもあんたの言つ通り、最初から一段構えだつたのよ」

拳を握りしめて、琴音は悔しそうに言つた。

「と、琴音も考へてるんだし、まず間違いないだろうな」

そこまで言つたところでじばらく沈黙が続き、久遠が口を開いた。

「……これからどうするのですか」

久遠の問いに、俺は少し躊躇つてから、意を決して言つた。

「……俺は、次にノーライフキングから連絡があつても、応じるべきじゃないと思ってる」

「はあ！？何でよ！」

明らかに怒氣のこもつた、予想していた琴音からの反発に、俺は目線を琴音から外した。

「私達が行かなかつたら、遠山とアリアが死ぬかもしれないのよ！？それに、ここまでコケにされて黙つてられないわよ！」

「俺達が行つても大死にするだけだ。ノーライフキングとゾンビ兵を、久遠一人で抑え込むのは無理だろ」

「そんなの、やつてみなくちゃ……」

「やつてみて……？それで死んだらどうするんだよ！」

俺は自然と、ついさつきゾンビ兵に囲まれたときのこと思い出していた。あの理性を欠いた瞳と、生氣の失せた腕が、俺を殺そうと迫つてくる様を。

負けたらどうなる？やつらの本当の狙いは未だにわからないが、負けた俺達に何があつてもおかしくない。

「それに久遠にどれだけの負担がかかると思つてる。久遠の能力は多用出来ないつて言つたのは、お前だろう！」

知らず、語氣が強くなる。ここが病室だといつことは、とつてくに頭から吹き飛んでいた。

「お前はさつき気絶してたから、あいつらを見てないからそんなこと言えるだけだ！」

「じゃあんたは、それで遠山達が死んだつていつて言つのー？」  
ほとんど泣き叫ぶようにして言つ琴音の言葉に、俺の煮え切つた脳が底冷える。

「それは……」

「いいわけない。

遠山は俺の友人で、恩人で、憧れでもあり……とても大切なやつだ。

「いいわけない。

「……そうだ」

言葉が、口をついて出てきた。

「……つ

「俺は死にたくないからな。いいか？今ノーライフキングに挑んでも勝ち目はない。だがハイジャックの次。それまでにノーライフキングかゾンビ兵と対等に渡り合えるやつを味方に付ければ、まだ何とかなるかもしれない。ここで応じるのは敵の思う壺だって、お前にも……」

「秋空のバカツ！」

視界が揺れる。遅れて頬に痛みを感じた。

平手を、喰らつたらしい。

「秋空のバカ！アホ！大つ嫌い！！」

琴音は目に涙を浮かべながら、自分の鞄をつかんで、戸口の方へとズンズン歩いて行つた。

「琴音……」

「いいわよ別につ。あんたみたいな役立たずがいなくつたつて！私と久遠だけで行くから！じゃあね！」

ピシヤリと扉を閉めて、琴音は行つてしまつた。足音が徐々に遠ざかる。

「……今のはあなたが悪い

「うぐ……」

的を射た久遠の指摘が、深々と俺に突き刺さる。まさか久遠に言われるとは思つてなかつた。

「い、いや、一概に俺が悪いとは……」

「いいえ」

久遠はきつぱりと否定した。

「……そこまで断言しなくても

「……横井琴音が心配なら、素直にやつと言えばいいでしょ。なぜあんな言い方を」

「琴音が心配？ 誰が？」

「……呆れました。無意識ですか」

「そう言いつつも久遠は表情一つ崩していない。でも、呆れる？ どういうことだ？」

「あんな。一応言つとくけど、俺は本当に自分の命が惜しくてああ言つたんだ。何か勘違いしてないか？」

「これは本当に自分の本心だ。死ぬのが怖い。そんなのは当たり前だ。誰だつてそうだ。

「私は、能力上人の心には敏感です。あなたの考えていることは手に取るよつにわかる」

「絶対勘違いだつて」

「……そうですか」

久遠は立ち上がり、

「私は横井琴音を追いかけます。では」

「あ、ああ。じゃあな」

そういえば、久遠は琴音の護衛だつたか。白い髪をなびかせて、久遠は出て行つた。

「……青海の公園寄つて、帰ろつ

部屋で一人呴いて、俺は今度こそ病室を後にした。

その日、少女は公園に来なかつた。

## 金の髪の少女（前書き）

年内にノーキン編完結するだろ？か・・・多分しないんだろ？な・・・  
・なんて思つてみたり。

## 金の髪の少女

結局、何の打開策も思いつかないまま、日曜日を迎えた。あれから琴音とは一言も口を聞いていない。久遠から聞いた話では、ノーライフкиングから、俺の予想した通りの内容の連絡があったそうだ。

琴音にはあんなことを言つてしまつたが、ノーライフкиングの件はもう無関係などと割り切れるほど、俺は器用な性格ではなかつた。ラノベ読んだりアニメ観たりしても、掃除や洗濯をしていても、何となく上の空で、いつの間にか琴音のこと、ノーライフкиングのことを考えている自分がいる。一日中引きこもつてゐるのもアレなので、気分転換も兼ねて、夕方、俺は青海の公園に行くことにした。

最近、あの謎の少女が来ていない。何があつたのかはわからないが、心配だ。

「……今日もいなか

公園で、ベンチで寄り添つてゐる二人組を睨みつける。周りを見渡せばどいつもこいつもカツプルカツプル。くそつ。爆発しろ。これ以上ここにいると白骨化してしまいそうだが、どうしようか……どうせすることもないし、もうちょっとだけここにいようかな。

「アキラ」

「ん？ おお、久しぶりだな」

振り返ると、沈みゆく夕陽を背にして、少女がいた。

水色の田は、これまでにないほど真っ直ぐに俺を見つめ、少女の金髪は黄金色の夕陽を反射して、いつも以上にキラキラと輝いている。思わず息を呑んでしまう美しさだ。

「アキラ。今日は、妻に会いに来たのか」

「あ、ああ。最近お前来てなかつたし、気になつたから

少女は俺のすぐ手前、ほんの一歩手前くらいまで来て、水色の瞳で俺を見上げた。

いつもとは雰囲気の違つ少女に、少しどキリとさせられる。

「話したいことがある。どこかで一人きりになれぬか?」

「大事な話なのか?」

少女はいつになく真剣な目で俺を見ながら、一くりと頷いた。

「じゃあ、今姉さんいないし、俺の家来るか?」

「……すまぬな

「いやいいって

誰かと話して、この陰鬱とした気分をまぎらわしたかったから、ちょうどいい。姉さんは七時頃帰ってくるって言つてたから、今メールしておけば少女の分の夕飯も買つてくれるだろ?。

「んじゃ、行くか

家に帰る道中、少女は自分からは一言もしゃべらなかつた。俺の振つた話には答えてはいたが、『ああ』とか『そうじやな』とか、相槌程度のものだつた。

俺と会つていなかつたここ数日で、何かあつたのだろうか。とうか、そうとしか思えない。今の少女を見ていると、とても心配にさせられた。

「ほら、着いたぞ

「お邪魔します」

少女は靴を脱いで、どこか緊張したような様子で家に上がつた。

一応来るのは一回田のはずなんだがな。

「そう緊張するな。今茶でも入れてくるから、リビングのソファーで待つてろ

「ああ。承知した

そして俺は、少女に背を向けた。

いつか琴音と絡まり合つようにして倒れ込んだ、あの細長い形状

の廊下で、俺はその先にあるコビングへと足を運ぶ。

「？ どうした？」

後から続くはずの少女の足音が聞こえないのに違和感を感じて、俺は首だけ振り返って後ろを見た。

そして、そのあまりに現実味のない光景に、俺の頭の中は真っ白になつた。

少女が、拳銃を構えている。

俺がそう理解したとき、少女はすでに引き鉄を引いていた。銃声は鳴らない。消音器が拳銃に取り付けられていた。

「ぎ、ぐ」

左の脇腹に、焼け付くような強い痛みを感じる。手で抑えると、生温かい血の感触がした。

何で？ どうして？ 疑問が痛みに搔き消えていく。

休日だから防弾制服は着ていない。上下黒の、ただのジャージ。当然、そんな布切れで銃弾を防げるわけもない。完全に、油断していた。

「お前…… 何で？」

「お主は計画の障害になりうる。ここでも消えてもらつた」

続けて一発、銃弾が放たれる。一発は外れ、一発は左腕上腕部をかすめた。

「いつ……」

まずい。当然、こんなジャージ姿で帶銃などしていない。

銃は俺の部屋にある。が、残念なことに、玄関入つてすぐ左にあるのが俺の部屋だ。今は少女が塞いでいてたどり着けない。逃げるか？ どこに？ リビングに行つてもジリ貧だ。遮蔽物は精々ソファーくらいしかないし、五階のこの部屋からダイブすれば、骨折ではすまないかもしね。

後ろがダメなら、前しかないか？ 銃はないが、バタフライナイフ

は携帯している。近づいてしまえば、腕うぶしで負ける」とはないはずだ。

遮蔽物は全くない。だが俺と少女の間にある、トイレの扉を開け放てば、木の板一枚分の防壁になる。トイレに身を隠し、期をうかがうことも、鍵をかけて籠城作戦にも移行出来る。

まだこちらの方が分があるか？

行け。行くしかない！

ここまで思考を瞬時に終えた俺は、ポケットから取り出したナイフを開き、突撃した。

「愚か者め」

少女は銃を構えなおすが、引き鉄を引く前に、俺がトイレのドアノブに手をかけた。

「うおおっ！」

渾身の力を込めて、それを引く。勢い余つてバネのように戻ろうとする扉を、慌てて足で食い止める。

三発中一発しか命中していないところを見ると、多分少女は銃に関しては素人だ。見えない敵など、撃つことは出来ないだろう。

一応トイレの個室に入り、深呼吸して意識を落ち着かせる。

「おい！何で俺にこんなことをする！」

返事はない。

「お前、あいつらの……ホールライフкингの一味なのか？」

返事はない。

「あの特殊メイクで紛れ込んでいた三人とやらの一人は……お前なのか？」

「……とんだ見当違いじゃな」

金属を弾いたような音がした。

手榴弾の、ピンを抜いたときの音だ。

ここは、動いちや駄目だ。

「う、うう……」

プレッシャーに、声が漏れる。身体が、震える。

今は逃げても、少女に向かっても無駄だ。昔遠山に聞いたことがある。手榴弾の殺傷範囲は、一般人が考へているよりよっぽど広いらしい。ここで投げればあの少女も死ぬ。つまり、はつたりだ。安全レバーを押さえているか、何かの再生機で音を鳴らしだけかはわからないが、いずれにせよ、これはこけおどしだ。

それに、少女は拳銃に消音器を取り付けていた。あれは目立ちたくないという意思表示。爆音が鳴り響く手榴弾は、できれば使いたくないだろう。

逆に、今俺が目立つような真似をすれば、本当に手榴弾が投げられるかもしれない。

「ぐ……」

脇腹の痛みに、顔をしかめながら考へる。

もうどれくらい経ったんだ？一分？五分？いやもつと短いか？大分落ち着いてきた。状況を整理する。

状況は至つて単純で、奇しくも、俺とあの少女の取るべき行動は一致している。

少女はこのまま、俺が出血で弱るのを待つ。俺は姉さんの帰りを待ち、一対一に持ち込む。それが両者の理想の形だ。

本来なら。

だがそれは、あくまで戦略的な観点。あくまで『取るべき行動』だ。

俺は、姉さんを巻き込みたくない。相手はただの幼い少女一人。姉さんは関係ない。

そう。落ち着いて闘えばいい。相手はただの幼い少女一人。俺一人でも勝てる。勝てるはずだ。

口に広がりつつある血の味を舐めながら、俺はなるべく音を経てないようとにかくレットペーパーを丸々抜き取つた。芯の部分に、洗面器のところにあつたガラス製の小さな置き時計を入れる。

出来れば止血に使いたいが、今は一手でも多く、武器が欲しい。

(まあ……行くぞ)

気を奮い立たせ、俺は扉の陰から飛び出した。

一発の発砲音がして、銃弾が頬をかすめていく。

「はあっ！」

俺は少女の顔めがけてトイレットペーパーを投げつけた。狙いは少女の顔。これでも俺はコントロールはいい方で、トイレットペーパーは少女の顔に吸い込まれるように飛んで行つた。

「きやう……」

少女は怯んで一瞬目を開いたが、すぐに目を開け、走る俺に銃を向け直した。

だが、

「コト。

「！」

少女が、トイレットペーパーの芯から滑り落ちた時計に目をやり、

俺から意識が外れる。

俺はその隙に、一気に飛び込んで距離を詰めた。

手が届く！

「うおおっ！」

「あ、いたっ！」

俺は右手で少女の肩をつかんで、床に押し倒した。左手で、銃ごと少女の両腕を頭の上にやり、しつかりと握りしめる。左脚で少女の両脚を押さえ込み、完全に動きを封じた。

「おい！お前、何でこんなことを……」

「うるさい！離せ！妾に触れるな！」「

ジタバタと暴れる少女に、俺は肩をつかんでいた右手を離し、その手で眼前にナイフを突きつけた。

「暴れるな。銃を捨てろ」

声を低くし、凄みを利かせて俺は言った。少女は答えない。銃も捨てない。それどころか、挑戦的な笑みを浮かべていた。

「それで妾を斬るか？お主にそれは出来まい」

俺は応えず、床にはらりと広がった長い金髪に、ナイフを突き立

てた。

「悪いが、俺は自分の命を狙いにきたやつを、まだ小さい女の子だからと手加減してやるほど甘くはない」

ナイフを床から引き抜く。

「もう一度言つ。銃を捨て……」

ぞわ……

少女の髪の、切られた部分がうごめいた。

髪が、伸びている。切られたところまで、寸分違わず。

俺は言葉を失つて、その様子を茫然と見ていた。

急に、俺の脳裏にゾンビの頭部が再生する映像がフラッシュバックする。まさか、こいつ……

「どけつ！」

少女が、俺を跳ね除けて立ち上がった。尻餅をついた俺に銃を向けてくる。

「お前……まさか……」

「ますますお主を生かしておけなくなつたな」

少女が引き鉄にかけた指をゆっくりと引いていく。

「さらばだ。妾に殺されること、誇りに思つて死に逝くがいい」

死んだ。

俺は本当に死を覚悟して、目をつぶつて身を固くした。

「……？」

死んで、ない？撃たれてない？

おそるおそる目を開けると、

「そこまでだ」

少女の腕を、あいつがつかんでいた。

あの男、ノーライフキングが。

「ノーライフ……キング。何で……」

いつの間に家に入ってきたのか。あの異形の男は、確かにそこにいた。

「ふん。敵に救われるとは、情けない男だな」

ノーライフキングは俺を鼻で笑つて、少女の持つてゐる銃に手を添えた。

「銃を下ろせ」

「じゃが、こいつは……」

「そう焦るな。いや、焦る気持ちもわかるが、こんなやつ殺そつと思えばいつでも殺せるんだ。安心しろ。計画に支障はない」

「むつ……」

「どうせ後で鈴木桜と、こいつの姉も回収せねばならんのだ。何も今ここで面倒を起こすことはないだろ？？」

「…………わかった」

ノーライフキングの説得に納得したのか、少女は渋々といつた風に銃を下ろして、俺に背を向けた。

「ゆくぞ」

「待て！お前ら、何なんだ。何で俺達を狙うんだ？」

「死にたくなかつたら、今は黙つていることだな」「興味なさげにそう言つて、二人は扉の外へと歩いていく。

「おい、う……」

ズキリと撃たれた脇腹が痛む。

「今日のことを他言すれば、お前も、お前の姉もただでは済まない」と思え

その言葉を最後に、ノーライフキングは少女を抱え、地面を蹴つて飛び去つて行つた。

今回は超短いです。

何よ！あいつ、そんなに死にたくないわけ？そんなに自分の身が大切なの？プライドは、誇りはないの？それで友達を見捨てるなんて、最低の屑野郎もいいところじゃない！

あいつ、頭の回転は早いし、伸び代もある、将来が有望な武偵だと思ってたけど、人間性がまるでダメ。あれじゃいつ裏切るかわからないわよ。

嫌よ。私は。アリアを、遠山を見捨てて自分だけのうのうと生き延びるのは。絶対に。

それに、私は負けない。あいつは私と久遠じや勝てないなんて言つてたけど、そんなことはない。久遠の能力でゾンビ兵を抑えつつ、一対一でノーライフкиングと闘う。そのまま時間を稼いで、『武偵殺し』を倒したアリア達と合流してゾンビ兵を叩く。要は、向こうがやろうとしてた作戦を、こっちがそのままそつくり返してやればいいんだ。大丈夫。これはチャンスよ。秋空の言つてた『次』を待つまでもない。ノーライフкиングとゾンビ兵を抑え込むカードは、『今』あるもの。そう、これでいいのよ。

……でも、なのに、何で……

『やつてみて……？それで死んだらどうするんだよ！』

何で、この期に及んであいつの顔を思い出すの？

「これが最善の策よ。最善の、はずなのよ……」

『こちらから連絡するまでは動くな』

それは、高級感のあるスイートルームに入った途端の私に、ノーライフкиングから届いたメールだつた。

この飛行機、片道二十万は伊達ではないよつて、普通の旅客機とは明らかに異なる構造をしていた。

一階はバーになつていて、二階は左右に合わせて十一枚の扉が並

んでいる。それぞれの部屋が高級ホテルの一室のように、シャワー やベット、テレビなども完備していて、私達は酷く場違いに感じられた。

「……何と？」

そんな高級感溢れる部屋でも、久遠は表情一つ変える様子はない。普段からお姫様みたいな雰囲気てるし、もしかしたらこれくらい慣れてるのかかもしれない。

「今は動くな、だつて。こっちからすれば好都合、よね」  
今はなるべく時間を稼ぐこと。それだけを考えればいい……はずだ。

でも、そんな目先を追うような考え方で、本当に大丈夫かしら？  
「とにかく、今は待ちの一手よ。久遠は適度にリラックスしながら、いつでも戻れるようにしておいてね」

何かを振り払うようにそつそつと、私は座席に座った。

「……了解」

強風の中、AN600便……私達を乗せた飛行機は東京湾上空に出た。

久遠はベットで、刀を片手にあぐらをかけて瞑想している。スカートの中が丸見えだが、ここには私しかいないし、本人も何とも思っていないようだ。

私は、特に何の考えもなしに窓の外を眺めていた。

「……松永秋空のことが、気になるのですか？」

見ると、久遠は目を開いてこちらを見ていた。

「秋空が気になる？ 誰が？」

「あなたがです」

そんなことない、とは言えなかつた。心当たりは、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけならある。

「彼は、あなたを心配していました」

「……もしそうだったら、今ここに来てるはずでしょ？」

秋空は、来なかつた。

いても足手まといにしかならないから、来なくてよかつたけど。でも、もし私が心配なのなら、来る。

思えば、あいつは会つたときからそつだつた。遠山の危険を、目の前で見て、気づいていながら無視した。それは、多分目の前に私が倒れてたからじゃない。自転車に仕掛けられた爆弾に気づいていたから、自分が死にたくないからだ。

結局、あいつは、そういうやつなんだ。

「お客様に、お詫び申し上げます。当機は台風による乱気流を迂回するため、到着が三十分ほど遅れることが予想されます」

機内放送が流れ、600便は少し揺れながら飛ぶ。外では雷鳴が轟いていた。

「……る」

「え？」

久遠が窓の外を見て、何か呟いたようだけど、聞き逃してしまった。

「とにかく、秋空は来なかつたんだし、この話はもうお終い。いいわね？」

久遠は窓から目を離さず、頷いた。

感情のこもらない瞳で外を見る久遠は、何だか寂しそうで、ここにはない何かを見つめているようだった。

「久遠……」

「……心配はいりません」

「何か思い出してるの？」

何となくそんな気がして、尋ねてみた。

「……ええ。少し、昔のことを」

久遠は窓から視線をそらして、立ち上がった。

「……扉の外に、誰かいります」

「え？まさか……向こうから来たの？」

「そのようです」

随分急展開ね。

『こちらから連絡するまでは』動くな、なんて言つてたから、罠を張つて待つのかと思つてたけど、向こうから不意打ちで殴り込んでくるなんて……いい趣味してるとじやない。

「でも、気づいてしまえばこいつらのモンよ。ゾンビ兵が数体部屋に入る」と、具現化させた思念で扉を閉めて、少しづつ倒すわよ

「了解」

パン！パン！

扉の外で銃声が鳴り、闘いの火蓋は切つて落とされた。

## Hの配置 巻(前書き)

ヒヤツハー！一連投稿だー！

今回も超短いです。

目が覚めると、そこは暗く、冷たい闇の中だつた。身をよじると、自分が地べたに座り込んでいて、手足に枷が付いているのがわかつた。じやらり、と枷に繋がつた何かが音を立てる。多分、鎖だ。

何も見えない。何も聞こえない。

私はいつからここにいるのか。ずっと前、五年も十年も前か、あるいはついさつき、ここに来たばかりなのか。ここに来る前は何をしていた？

記憶がほとんどない。あるのはただ、炎。自分の身体を貪欲に食り続ける、赤い炎。

……そうだ。思い出した。痛くて、いたくて、あつくて、いきがくるしくて、氣を失って、まだ痛くて……次に目が覚めたとき、私はここにいたんだ。

……そつか。私、また死ねなかつたんだ。

もうずっと何も食べてないんだし、今寝たら楽になれるかな、なんて思つたけど、ここまで来たら認めるしかない。

私は死ねないんだ。多分、これからもずっと。

……寝ようかな。することないし。  
ゆづくじと瞼が落ちてゆく。

キイ……

永遠に続くかと思えた静寂に、錆び付いた金属のこすれ合う音がして、私は落としかけた瞼を開いた。

「だ……れ？」

白い吐息とともに、疑問が漏れる。

人だ。

人がいる。

自分以外の人間をここで見るのは初めてだ。

近づいてくる。顔は暗くて見えない。

「なに……して、るの？」

その人は、私の側まで来ると、膝まづいて枷を鍵で外した。

力チャヤ　力チャヤ　ガシャン。

「すまない。助けるのが遅くなつて。見つけるのに手間取つた」

「え？」

少し低めの、男の声だ。

「ここから逃げる。ここから北に三マイルほど行つた街に、かみ……ジャックという男の家がある。そこでかくまつてもらえ」

「あなたは……誰……？」

「俺は……ただの侍だ」

サムライ？ 变な名前。名前がない私が言えたことじゃないけど。

「誰にも見つからないよう、森の中を進んで行け。幸運を祈る。ノーライフキング」

あ、そうだ。私の名前、あつた。思い出した。  
そうだ。私は、私の名前は……無機王ノーライフキングだ。

無機』の『王にしたいのに、そうするとルビが上手くかからないよ。  
・・どうすればいいのか、誰か教えてエロい人。

「今回も、キレイに引っかかってくれやがりましたねえ」「あんた……一体……何者……」  
「理子・峰・リュパン四世 それが理子の本当の名前」「そ、それがどうしたのよ……四世の何が悪いってのよ」「悪いに決まってるんだろ!! あたしは数字か!? あたしはただの、DNAかよ!! あたしは理子だ! 数字じゃない…どいつもこいつもよオ!!」

「五年前、曾お爺様同士の対決は引き分けだった」「何もかも……お前の計画通りだつたつてワケかよ……」「……兄さんを、お前が……お前が!!?」

「ノン、ノン。ダメだよキンジ」「くッ……このつー」「あはっ、あはははっ!」  
「カドラ  
**双剣双銃** 奇遇よね、アリア」「うあつ!」「あは、あはは、あはははははー」「アリア……アリア!」

「よつやく、終わったか……」

ガタツ、ガタガタツ。

頭上の蓋を開け、酒樽の中から這い出た俺は、ふう、と一息ついで辺りを見た。

「……酷えな」

そこには、キッチンには、バーのマスターや裏方のコックと思わしき人物数人が倒れていた。死屍累々、とはこのことか。死んでないけど。

この機体のエンジンがまだ温まらない内から、俺はこのアテンダントに変装し、色々と下準備をしていった。罠や、小型カメラの設置を主に、隠れ場の樽を組み立てたり……他にも、色々と小細工を。で、樽の中に隠れること一時間。そろそろ頃合いかと思って出ようとしたら、変装した理子が来て十秒ほどでキッチンを制圧してしまい、樽から出られなくなってしまった。その後、理子は樽の周囲をぐるぐる周りながら、「あれえ？ おつかしいなー？ 何でこんなとこに一つだけポツンと樽があるんだろうなー。もしかして、誰か入ってるとか？ くふつ、まさかねー。そんな『バカ』なこと考える人、いるわけないよねー」と、なぜか『バカ』を強調して言い、「人がいないなら、ちょっとこのナイフの切れ味、試してみようかなあ」と、箱に剣を突き刺す手品師のごとく、ザクザクと俺の身体ギリギリのところにナイフを刺し、少ししてどつか行つたと思えば、今度は遠山達と交戦。逃走した遠山達を追つて、ようやく理子がこのフロアから消えたところだ。

まさか、理子が『武僧殺し』で、あんなやつだったとはな……

……いかん。遠い目をしている場合じゃない。理子がいたせいで、完全に出遅れた。急いで二階に行かない。久遠の能力は長期戦向きではない。無理をすると、本当に取り返しのつかないことになる。俺は、ずっと同じ姿勢だつたせいで凝り固まつた筋肉を軋ませて、

一階へと駆け出した。

「これは、厳しい……」

廊下の陰に隠れて、部屋の様子をうががう。

そこはB級ホラー映画のように、ゾンビ達が部屋に殺到していた。扉は開いてはいるが、見えない壁に阻まれているかのように、ゾンビは何もない空間を引っ掻いている。久遠の能力のせいだ。

さて、どうやって部屋に入るうか。

「…………いや、無理だろ。これは」

あいつらだけならまだしも、久遠の思念の壁をも破らないといけないのは無理だ。

正直、俺に久遠の能力を破るくらいの力があるなら、こんな面倒なことにはなっていいない。

「仕方ない。これはやりたくなかったけど、ちょっとダイナミックに入るしかない、か」

扉には、教会で使つたものと同じタイプの爆弾を、あらかじめ設置してある。

ちなみに、俺のお手製だ。爆薬の調整も完璧。

部屋に仕掛けた小型カメラの映像を、携帯で確認する。扉の前には……誰もいない。今だ。

俺は起爆ボタンにかけた指に、力をこめた。

爆音が辺りに鳴り響く。扉とともに、部屋の前で溜まっていたゾンビ達が吹き飛んだ。

俺は硝煙の匂いに包まれながら、部屋の中に駆け込んだ。

「な……秋空！？」

俺を呼ぶ、ここ最近で聞き慣れてしまつた、でも聞くのは久しぶりなその声に安心する。

「おお、琴音」

よかつた。怪我一つない。ペンペンして、ゾンビと相手に銃を構えている。

それに、ゾンビに対しても扉を背にする立ち位置。これなら今すぐにでも逃げられるな。久遠も琴音のすぐ近くにいる。

「あんた……今更何しに来たのよ！」

琴音は一瞬俺の方を見たが、すぐにゾンビに向直って、銃を乱射した。

「何つて、協力しに来たんだよ」

琴音は不愉快そうに眉を釣り上げて、

「いらない。あんたなんて、足でまといにしかならないんだし……」「嘘つけ。今は足でまとい一人でも戦力が欲しい場面だろ？」

「でも、あんたどうせ何も出来ないじゃない」

琴音がリロードする。

「その言葉、そっくりそのままお前らに返してやるわ」

『お前ら』。

俺のこの物言いに、琴音はつこにキレたらしく。琴音は弾倉を取り落としかけた。

「はあ！？あんた、今久遠がどんな気持ちで闘つてると……」「でも事実だろ？」「あんたねえ……」

「あんたねえ……」

声にな怒りを通り越して、俺への敵意が感じられた。

「いい加減認めろよ。撃つても斬つても再生する、そんな相手とともに闘つても、勝ち田なんか力スすらねえんだよ」

「何よ……じゃああんたは何しに来たのよ」

「お前、擒賊擒王きんぞくきんおう」という言葉を知ってるか？」

会話が噛み合っていないのを自覚しながら、俺は唐突に切り出した。

「いきなり何よ。敵を擒えんとすれば先ず王を擒えよ。知つてゐるこ

決まつてゐるでしょ？」

「わかつてゐるなら話が早い」

擒賊擒王とは、兵法三十六計の一つで、敵を倒すならまず王、首謀者や司令官などの中心人物から倒せ、という意味だ。

「お前はこの部屋から出て、飛行機のどこかにいるノーライフキングをあぶり出せ」

「え？ ノーライフкиングって……」

「その間、俺があいつを食い止める」

刀を構え静止し、久遠と睨み合つてゐる男を見据える。

男がちらり、と俺を見た気がした……と思つたら、久遠が男と斬り結んだ。

「ちょっと待つてよ。ノーライフкиングはあいつでしょ？」

「違う。俺は昨日、こいつらのボスに襲われてる。だからわかるんだ。詳しく説明してゐる時間はないが、とにかく機内にいる。そいつを見つけ出してくれ」

「襲われた？」

「ああ。とにかく急げ。ここは俺が何とかするから、行けつ」

ここで『公園の少女』とは言わない。言えばただでさえ薄い現実味が、皆無になる。

「久遠もだ。行け。ここは俺に任せろ」

「……了解」

偽者に向かつて、俺は銃を撃ちながら一步踏み出す。

「ちょ、ちょっと！ 久遠もつて……あんたは……一人であいつの相手するの！？」

琴音は慌てて俺の腕をつかんで引きとめようとする。

「ああ。他に誰がいる。撃つても斬つても倒せない相手に、久遠ほどの戦力を割り当てるのは、あまりに無意だ」

「だからって、あんただけじゃ時間稼ぎにもならないわよ」「安心しろ。策はある」

俺は首だけ琴音の方に振り向いて、にいつと口角を吊り上げた。

「もう聞き飽きたらうが、俺は死にたくないんだ。いざとなつたら

お前ら見捨ててでも逃げてやるさ」「

「……もつ、勝手にしなさいよー行くわよ、久遠」  
背を翻し、足早に琴音は部屋を出て行つた。

「……後で謝つた方がいいですよ」

「そう、だな」

「すぐに戻ります」

久遠が一陣の風を残し、その場から消え去つた。

「……さあ、来いよ」

いつの間にか、動きの止まつてゐるゾンビ達を挑発する。意味あるかはわからないが。

こつちの狙いが時間稼ぎなのはバレてゐる。なのに、ゾンビの動きが止まつてゐるのは……不気味だ。動いても不気味で怖いが。劣勢のときほど、目先を追つてはいけない。目先を追うのは追随戦略、強者の取るべき行動だ。

「くく。……お前達、ここから退出しろ。松永秋空には、指一本触れるなよ」

「何?」「

偽者の命令に従い、ゾンビ達は琴音の後をを追つよつて、唸り声をあげて部屋から出て行く。

「おい、どういうつもりだ」

「くくく。貴様ならこの思考に至り、一人で俺と鬪あつとすることはわかつていた」

「…………こまでがお前の手の内、ってことか」

俺の思考。それはまず、俺を襲つたあの少女がノーライフкиング、やつらのボスなんぢやないかといふ考え。そして、ノーライフкиングを捕えることに全戦力を注げば、今日の前にいるこいつの焦りを生み、そこから勝機が芽生えるのでは、という考え。

あの少女がノーライフкиングである根拠はないが、この読みの大前提として、あの少女がノーライフкиングの軍団の一員であるということ。そう考へると、俺と闘つて負けるような少女が、やつらの

仲間である意味がない。あるとすれば、司令官、作戦立案者、あるいは、ボス。

決定打は、人を見下すような態度ばかり取っていたこの男が、俺を殺しに来た少女に対しては、なだめるような態度だったこと。あれで確信した。

しかし、この偽者には、どうやら全て読まれていたらしい。

「安心しろ。俺は貴様と一緒に話したかつただけだ」

「俺と？」

「ああ。貴様にとつても、決して悪い話ではないはずだ」

偽物が、手に持っていた刀を投げ捨てる。刀は、俺のすぐ側に突き刺さって震えた。

これで対等、とでも言いたいのだろうか。だがやつなら、素手でも俺を圧倒出来る。状況は何も変わっていないと見るべきだろう。

「では単刀直入に聞くが……『イ・ウー』に来ないか？」

「『イ・ウー』？ 何だそれ」

「まあ、知らんだろうな。簡単に言うと、超人達の戦闘集団だ。お互いがお互いの持つ技術を交換して、己を鍛え、超人を生みだすのが主な活動目的……と、思つておけばいいだろう」

「そんなところに、何で俺が……」

言つまでもなく、俺は超人ではない。普通のロランク武僧。それ以上でもそれ以下でもない。

「お前はな。だが、あの二人は違う」

「つ！」

教会でもあつたが、まだ。まるで心を読まれているかのような

……

「横井琴音。上泉久遠。あの二人のまとめ役は貴様だからな

「いや、それはない」

まとめ役は琴音だ。俺とはあまり話さない久遠は、琴音とはそこそこしゃべってるみたいだし。

「どうしても、貴様は鼻が利く。得るべき能力、切り捨てるべき能

力の選別が出来る。それに、貴様は伸び代があるからな。」

「……なるほど。洞察力のある俺が効率的にあいつらを育てて、俺がその能力を丸々頂く。いいかもしないな」

「ほう。妙に物分りがいいな。では、『イ・ワー』に来るのだな?」「だが断る」

行くわけがないだろう。

「俺がここに何しに来たか。それだけは見失わない。必ずだ」「ここに来た、目的?」

「ああ。琴音と久遠を連れて、生きて帰る」

姉さんとした、この誓いだけは、絶対に破らない。  
やるべきことは見えている。簡単だ。

「やるべきことは見えている?ぐだらんな」  
また思考を読み取られた。どういうことだ?

「何なんだお前。人の心が読めるのか?」

「少し違う。『ヨウシキ条理予知』という能力を知っているか?」

「いや、知らない」

俺は眉をひそめた。

「俺のこれは、それに近いものだ。『条理予知』は卓越した推理力により『予知』をするのに対し、俺の『条理読心』は、あらゆる判断材料から敵の考え方を『読む』能力だ」

「はつたりだ」

俺は偽者の世迷い言を、一言で切り捨てた。

そんなわけがない。自信を持つてそう言える。人の考え、心は文字通り千差万別で、そう単純なものではないんだ。

多分、やつの読心術の正体は、超能力ステルス。

「超能力か。そう思うのも無理はないな。まあ、どう思つてもらおうとも構わんよ」

こいつの言う通り。超能力だろうが、『条理読心』だろうが、結局は同じ。あいつが俺の心を読めるという事実は変わらない。

「だが一つだけ言っておこう。これは、『条理読心』は貴様がこれ

から至る境地。俺との闘いは、貴様にとつてはいわば『予習』だ

「予習?」

意味不明な男の言葉には、霧がかかっつたように、俺の中ではぼやけている。何だ? このもやもやした感じ……

「これ以上は、自分で推理することだな。……さて、交渉は決裂した。時間もない。そろそろ始めるか

「……ああ。そうだな」

時間稼ぎで終わるつもりはない。久遠が戻るのを待つまでもない。

今、ここで、俺がこいつに引導を渡す。

傍に刺さつた刀を引き抜く。それを合図に、偽者が視界から消えた。

メモ記憶 式（複数形）

短いです。

目が覚めると、そこは明るくて暖かい、木でできた洋風の部屋のベットの上だつた。

「目が覚めたようじやな」

声のした方を見ると、ベットの脇に置かれた振り椅子に、白髪で立派な白鬚を蓄えた、初老の男が座つていた。

「だれ？」

「わしはジャック。お主を守るよう、ある者に頼まれておる」

ジャックは立ち上がり、部屋の奥に姿を消したかと思つと、湯気の香り立つティーカップを片手に戻つてきた。

「飲みなさい。ハーブティーだ」

「はーぶ、てー？」

「茶じや」

ジャックは振り椅子に戻つて、じちらをじっと見てゐる。

「人外の不死と聞いておつたから、どんな恐ろしげな怪物かと思えば、美しい姫ではないか」

「うつくし？」

飲みかけのカップに口をつけたまま、首を傾げる。

「どうだ。味は」

「おいしい？」

「……ふむ。そうか」

ジャックは近くの机に山積みにされていた紙から一枚抜き取ると、筆で何か書き始めた。

「どういった風に美味しい？」

「ん……何か、温かい？」

「ほうほう。左様か」

薄ら笑いを浮かべて、嬉しそうに男は筆を走らせる。

「きもちわるいよ」

「へへへへ。何とでも言つがいい。それと、最近記憶が飛ぶよくなことはなかつたかの？」

「きおく？……あつたよ。私、焼かれてたの、忘れてた」

「ふむ……」

ジャックは少し気落ちしたような顔になつたが、すぐに元の嬉しそうな表情に戻つた。

「お主は、自分の名前の意味を知つてあるか？」

「むきの、王？」

「やうじや。心のない、名前もない、あるのは製造名称と、己の『生』のみ。『無機の王』とはやうじの意味じや」

「……でも、私、心あるよ」

「やうだ。お主には心がある。永遠に生きるために創られたお主じ、心を与えた何者かがいるのじやよ。しかし、それはまだ酷く不安定のよひじや。お主の記憶がたまに飛びるのは、それが原因のようじやの」

……よく、わからない。むずかしい。

眉間に皺を寄せる私を見て、ジャックは笑つた。

「くく。難しい顔つきをしておるの。まあお主はわからんでもよい。わかつておるべき事柄は一つ。わしは今から、お主の不安定な心を、時間をかけて定着させるところ」とじや

「わかった」

とりあえず頷いておいた。わからないけど。

「やうかそうか」

「ゴツゴツとした手で、くしゃくしゃと頭を撫でられる。

それはとても大きくて、温かくて、胸の辺りに何かがじんわり広がる。

これが、私とジャックの出合ひだった。

## 偽りの終幕

「大口叩いた割には、その程度か」

「ぐああっ」

偽者の拳が、鳩尾に迫る。身体を捻るが、拳は脇腹に突き刺さった。

激痛が走る。戦闘開始から五分。過度な運動により、少女により撃たれた銃痕の縫合痕が開いていた。そこに拳を叩き込まれ、服の上から肉を抉られる。

痛みは身体中に響き、偽者に殴られた他の部位の痛みと共鳴する。痛みを堪え、刀を横薙ぎに振るうが、偽者はすでに姿を消していった。

「こちらだ」

声がした方、後ろから衝撃が飛ぶ。

蹴り飛ばされた。向かい側の壁に身を叩きつけられてから、そう認識する。

(さすがに……分が悪いな)

身体中の痛みにフラフラとよろめきながら、考える。

琴音には『策はある』などと言つたが、そんなことはない。無策だ。

しかし、あいつを倒すこと自体は、そう難しいことではない。ここは空。つまり、突き落としてしまえばいいのだ。

でもどうやって? この部屋の壁、ベットの裏側には、俺が事前にプラスチック爆弾を仕掛けてある。壁を抜けば、気圧差で突風が発生し、偽者を外に吹き飛ばすことが出来る。

だが、この状況では、俺が今出来ること、考えていゆることがもつとも危険だ。

なぜなら今俺が考えていること、思つてゐることが、どうこうわけかあいつには筒抜け。丸聞こえなのだから。

というかそれ以前に、今壁を壊せば俺」と吹き飛ぶ。

「ほら、どうした。策とやらがあるのでないのか？」

一直線に飛び込んでくる偽者に、俺は受け止めようと刀を構える。

振りをして、思いつきり前にダイブした。受け身を取って、

立ち上がって振り返る。

……あれ？俺、あいつの攻撃をかわしたのか？さつきから一回も避けられなかつたのに？

「……ほう。もう『予習』の効果が現れているな」

偽者は面白そうに、口元を歪めている。

予習……さつきもあいつが言つていたが、どういう意味だ。

「わからんか？今貴様の読みが、俺の『条里読心』の上を行つたのだ

だ

「何……言つて

「さて、な

偽者の姿が消え、今度は右腕に衝撃を感じ、刀をその場に残して吹っ飛ばされる。

「があ、ああああ！」

「今の一撃で、貴様の腕は碎いた。これで文字通り打つ手なし」「あまりの痛みに、意識が霞んでくる。が、何とか立ち上がる。右腕は……だらりと垂れ下がつたまま、動かない。動かせない。骨が折れているようだ。

どうする？どうすればいい？何か、やつの弱点みたいなのを……悪いが俺にはどこぞの吸血鬼のように、都合のいい弱点など存在しないぞ」

ああ。そうだった。思考が、読まれてるんだ。

てことはいくら考へても、何か打開策が思いついても先読みされるのか。

「くくく

本当に、弱点なんて見当たらない。付け入る隙もない。

八方塞がりな状況に、笑いすらこみ上げてきた。

「どうした？諦めるのか？」

「まさか」

刀は落とした。右腕も動かない。

でもまだ、俺の意識はある。頭は回る。腰には銃と、ナイフがある。左腕、両脚も無事だ。

（久遠は互角にやりあつてたんだ。俺にだって、不可能なことじゃないはずだ）

『そんなの、やつてみなくちゃ……』

「ホント、その通りだよ」

ふと思いつ出した琴音の言葉に、自らの窮地を忘れて思わず苦笑する。

俺はナイフを取り出し、同時に偽者がその場に残像を残して消える。去つた。

「――！」

視界の右端に、偽者を捉える。

俺は身体を翻し、ナイフを振るつた。

「あああっ！」

正面から、再び脇腹に激痛が走る。右は凹だつたらしい。俺が視認出来る時点で、怪しいと思うべきだった。

壁に打ち付けられた俺にはもう、立ち上がる力は残つていなかつた。

「はあ……ぐあっ！」

「痛いか？まあよく粘つた方だ」

偽者が俺の首をつかんで、人形にそつするかのように、片手で軽々と持ち上げた。左腕でそれを解こうとするが、びくとも動かない。無意識の内に、ジタバタと身体が暴れだす。

息が、出来ない。

「さて、最後に確認しておこう」

偽者はおもむろに話し始めた。

「『漆漆色金』を渡し、『イ・ウー』に来る気はあるか？」

(お断りだ。大体『シシイロカネ』って、何なんだよー。)  
声が出ないため、心で思う。

「『漆漆色金』は、簡単に言えば神になれる金属だ。不滅の特性を持ち、我々はその恩恵で不死であり続けている」

(神に……なれる?)

「くくく。神になるからと言つて、何も世界を創り変えるとか、そんな大それたことを考えているわけではない。ただ……殺したい者が一人いるのだ」

(誰のことだよ)

「さあな。そこまで話してやる義理はない。……さて、このまま首を握りつぶしてもいいのだが」

偽者は残忍な笑みを浮かべて、

「貴様は生きてさえいれば、人質として機能する。殺しはしない。だが……その淵にまでは追いやるとしよう」

偽者は半身を捻ると、右腕を後ろにやつた。

ああ……何をするのか、わかるぞ。確かにそれは、死の淵が見えるだろう。

そして、その右腕は、俺の左胸を貫いた。

恐らく、心臓の、僅か数センチ下。肋を割り、偽者の腕が突き刺される。

視界に、赤みがかかる。口元から血が流れ落ちる感覚。痛みに声すら出ない。何も考えられない。

意識が、遠ざかつて行く……

……いや、駄目だ。

それだけは、手放せない。

生きてここから出るんだ。

琴音を、久遠を助けないと……

偽者の、血に染まつた腕が引き抜かれる。

「固い床の感触を、頬に感じた。

「放つておけば、出血多量で死ぬ。動いても折れた肋が心臓に突き刺さって死ぬ。助かる方法はただ一つ。あの一人の応急処置で、奇跡的に一命を取り留めた場合のみ。詰めろだ。限りなく必死に近い、な」

「コツ、コツと、偽者の足音が近くに聞こえる。

「ま、て……」

「貴様はそこで朽ちていろ」

「足音が……遠くなる……」

偽りの終幕（後書き）

秋空フルボッコ（笑）

勝機（前書き）

新年、明けましておめでたございます。今年もよろしくお願いします。

焼けつぶように痛い。凍えそうなほど寒い。

相反する二つの苦しみが、俺を、俺の存在を削り続ける。

そんな、誰がどう見たって朽ちる寸前の、虫けらのように惨めな俺の中で、何かが高まりつつあった。

波一つない、死んだように静かな湖畔。その奥から、ふつふつと湧き上がってくる。

(……チャンスだ)

思えば、さつきまでは、まるで勝機はなかった。

弱者が強者を打ち取るのは決まって、奇策、奇襲、不意打ち、僅かな隙間をついた、ギリギリの一発芸だ。しかし、それすら完全に見抜かれるのでは、もうあいつを破ることは不可能に近い。純粹な力の差では敵わないし、それで勝ったとしても、やつは不死、死がないのだ。

でも、今は違う。今、俺はあいつに思考を読み取られることはない。

あいつの意識に、もう俺がいないからだ。

わかる。はっきりと、伝わってくる。今あいつには、俺は眼中にない。どういうわけか、それが俺には鮮明にわかつた。

死にかけの敗者に用はないということか。でも、それは驕りだ、偽者。俺はまだやれるからな。

しかし……チャンスは一度きり。こちらが一手でも動けば、偽者はそれをすぐに悟り、俺に意識を向けるだろ? その一手で、あいつを討てるのか?

……何だ何だ? 何弱気になってるよ、俺。

やつの『条理読心』は、あらゆる判断材料から、人の心を読む能力だ。なら、その『判断材料』を『えることなく、こちらが一方的に手を紡げばいいんじゃないのか?

もう、逃げるのは終わりだ。今なら、策はある。生きて帰れるかどうかはわからないが……やうひ。このまま何もせず、ただ無為に死ぬよりかは、遙かにマシだ。

どういうわけか、これだけの出血がありながら、身体は動く。左手の指先が動かせるんだ。なら何とか……

『動けば肋が心臓に刺さつて死ぬ』

偽物の言葉が、脳内で蘇る。

けつ。知るか。バカ。

死ぬのは怖い。あの日常に戻れないのは怖い。でもこうなつたら、ここまで来たら、俺は助からなくていい。そんなことに固執してはいられない。琴音を、久遠を、あの日常に帰そう。

今俺は、そのために生きている。

俺は倒れたまま、震える左手で発煙弾を取り出すと、ピンを引き抜いて、

「まだ、抵抗するのか」

音で気づかれたらしい。構わず発煙筒を投げる。辺りに赤い煙が立ち込めた。

「かはつ」

立ち上がる。肋骨が肉を裂く感触があつたが、どうやら左半身の痛覚が軽く麻痺しているらしく、思ったほどの痛みはなかつた。代わりに、喉の奥の奥からこみ上げてきた血が噴き出る。

「ちつ。悪あがきを」

悪あがきなんかじやねえぞ。

俺は右脚の裾の中に隠した、一本のナイフを取り出す。左手で取り出し、動かない右手で持つ。

それ自体は、何の変哲もない、ただのナイフだ。違う点は、柄にテープリングされた、小型のプラスチック爆弾。

そして同時に、もう一本発煙弾を取り出し、口にくわえてピンを引き抜き、投げる。発煙弾はこれが最後だ。

(後は、近づくだけだ。もしくは、近づかせるか)

俺はホルスターから拳銃を取り出し、無造作に撃ちまくった。片手撃ちだが、相変わらず痛みはない。

「ふん。愚か者めが。そこか

ぎゅん！

風の音。方向は……右。狙い通りだ。これで向こうから近づいてきてくれた。

しかも、今度はさつきみたいな小細工はなしだ。なぜなら未だに煙が立ち込める中、視覚による攪乱は効果が薄いからな。

読める。読めるぞ。

「終わりだ」

お前がな。

俺は声の方向に、右手を自分の左手で支えながら、ナイフを突き立てた。

ほぼ同時に、脇腹に衝撃を受けるが、偽者の肩をつかんで何とか踏みどまる。

「ん？」

偽物がここに来て初めて、驚きの声を上げた。

「おい、何のつもりだ」

俺はそれに答えず、自分の右腕とともに、ナイフを偽者の体内に潜り込ませる。どうりとした、粘っこいそれを割つて押し進む。（お前ともあろうやつが、油断しそぎたな）

声が全く出ないため、口にする代わりに思つ。

「まさか……自爆する気か！？」

（くく。まあな）

まずい。目の前が震んできた。

朦朧とした意識の中で、左腕を引き抜き、そのままポケットに突っ込む。

固い感触。スイッチに指をかける。

自爆、爆死か。『松永』の名にふさわしい死に方だ。そう考えると、ある意味、悪くはない死に方、なのかな。

「無理だ。貴様は絶対に、自分の命を、自ら断つことはない。絶対にだ」

(読み違えたな、偽者。もう、終わりだ)

偽者が俺の腕に手をかけるより先に、俺はスイッチを押した。そして今度こそ、俺は意識を手放した。

## 無機の右腕

……ぬぐい。

……やわらかい。

心地よいまどろみに、フワフワと流されて行くよつな。

……？誰か……いる？

……声？

「……ら。秋空」

「……とね。

「秋空。ぐしう。うう。」

……泣いてるのか。あいつらしくもない。

……でも、何で泣いてるんだ？やめろよ。お前が泣いてたら、何故か俺まで悲しくなつてくる。

……ん？

……おいちよつと待て。何だこれ。

意識がだんだんと覚醒してくる。

何で？

俺は、死んだはずだ。

まさか、生きてる……のか？俺。

まさか。まさかまさか。

そんなわけないだろう。あの大量出血は、決死の自爆は、紛れもない現実だ。夢じやない、はず。

試しに指先に力をこめてみると……動く。左手限定だけど、右手は動かないけど、確かに今動いた。

「つ！秋空！？」

「……マジかよ」

目を開き、言葉を発する。

マジかよ。俺、生きてるじゃねえか。

視線だけ動かして周りを見る。白を基調とした、清潔感ある部屋。

「」は……武蔵病院の病室のようだ。

「よ、よかつた……わ、わたし……ホントに……」

「」、琴音？「

琴音は俺の方を見たまま、田代涙を溜めて、溢れさせていた。  
「うつ……うわーーーん！」

「ちよ、琴音」

ガチ泣きじやねえか。

慌てて起き上がるうとするが、

「いだつ！」

痛い！眩暈がするほどの激痛に襲われて、俺はゆっくりとベッドに戻った。

「いたた……」

「ぐすっ。バカじやないの？急に起き上がるから！」

何か、前にこんなことあつたな。俺と琴音が逆だけビ。

「本当に……バカよ、あんた」

田を真っ赤にしたまま、琴音は弱々しく眉を八の字にしている。

心配、かけたんだな。

全く状況は見えないのに、今の琴音を見て、それだけはわかった。  
「死にそうになつたら逃げるつて言つてたじやない。何で……」

「……すまない」

卑怯だとは思いつつも、そういうわけにはいられなかつた。

「……するい」

ああ、俺もやつ思ひ。

「そんなこと言ひへりになら、向でこんな無茶したのよ。頭おかしいんじゃないの？」

「え、そ、そこまで言ひへ……」

「わかつてのんの？あんたあの口心臓止まつたのよ？右腕だつて  
そんなになつて……」

「待ってくれ。今俺の右腕どうなってるんだ？」

気になつてはいたのだ。シーツに隠れていて見えない右腕が、全く動かないこと。いやそれ以前に、右腕の感覚が、ベットに触れている感触がないこと。正確には、肘から上のみ感覚がない。

「なあ、琴音。ちょっとシーツをどけてくれないか？」

琴音はさつと顔を背ける。

「おい。ちょっと待て。何だその反応は」

「…………ごめん。私には……」

「お前も大概ずるいじゃねえか。ていうか何なんだ。俺の右腕どうなつてるんだ」

琴音は何も言わない。何も言わずに田元を拭う。

「おいしい！？何？何となく予想出来てるけど、まさか、まさかなのか？」

「…………N S A の最新技術らしいわよ」

「嘘付けえええ！んなわけあるか！てか、仮にそعدとしても、何の解決にもなつてねえよ！」

「おいおい。マジで？」

半信半疑のまま、俺は左手でシーツを剥ぎ取つた。ズキズキと身体の節々が痛んだが、そんなことには構つていられない。

「ばさり。

音を立ててシーツを払う。

「…………これはこれは、また……あつはつは」

乾いた笑いしか出でこない。

肘から上は、なかつた。代わりに付けようとでも言つたげに、肘の先には一本の義手が置かれている。

「はは……どうせならサイコガソにしてよかつたのに……」

「…………無理しないで」

琴音の気遣いが、胸に痛い。

「いや生きてたからな？腕の一本くらい、全然気にしてないんだが何でこの義手、こんな機械っぽい外見してるんだ？」

俺はその、先者の方の腕みたいな不気味な義手から目を逸らして、琴音の方を見た。

琴音はまたも、目に涙を溜めていた。

「え！？ 何で？ 俺なんか不味いこと言った？」

「ごめんね……秋空……私……」

「ちょ、ちょっと落ち着けお前。今田のお前なんか変だぞ」いつになく涙もろい琴音に、どうしていいのわからず、混乱する。ハンカチでも渡してやればいいのだろうか？「いや、身体動かないからな……」

「ごめんね……秋空がいなかつたら、私達……」

「……謝るのは明らかにこっちだる。俺は、仲間を見捨てようとしたんだ」

「でも結局は来て、命まで張つてくれた」

「行つたのは、お前らが死んだら俺が孤立するから。それだけだ」「命を張つたのは？」

俺は、その問いに答えることが出来なかつた。

「葉月さんから、全部聞いたの。あの日の前日、秋空が葉月さんと話してたこと」

「……え」

身体が芯から熱くなつていぐ。

「どこまで聞いたんだ？」

「だから全部よ」

顔、赤くなつてない？

「……いや、あれはその……勢いとつか……」

身体が軋むのを無視して身体を起こし、あたふたと左手を振りながら思い返す。

「そうだ。俺……」

「くくく」

壁にもたれかかつて、痛みにうめく。

撃たれた脇腹は完全に急所を逸れていたようで、俺は少女が消えた後も意識を保っていた。

のせいで力も入らない

- ただいま -

1

卷之三

「こ、これはケ……ケホッ」

少しがすれた声で、『これはケチャップ』と詮おりと云ひ、逆流してきた血が気管に引っかかった。

だろ？。

「ああ、あれ！」

「一畫懶教」

「つ！それは駄目だ！」

血分でも驚くほどに強く言ひてしまい、痛みに思わず片膝を一ぐ

姉さんは携帯を取り出すと、119番を押し……

——それは駄目だ

欽定四庫全書

「止めてくれ！」

ハイジャックは、明日だ。

銃創の治療がどんなものなのかは知らないが、一日やそこりでどうこうなるものなのか？完全に傷が塞がるまでは、入院しなきゃいけないだろ？

それでは、間に合わない。

「……貫通銃創ね。これなら私でも……」

「ねえ……さん？」

「私の知ってる、医療科の子に頼んで来てもらひうわ。それまでは、私が出来るだけのことをする。それでいい？」

「ああ……わかった」

よかつた……

あれ？ 何だろ……急に……眠く……

「医療キット取つてくるから」

ああ…… そうだな……

「はっ！」

自室のベッドの上で、俺は目覚めた。

「おはよう。気分はどう？？」

「……誰？」

ベッドの脇に置かれた椅子にて、見覚えのある少女がいた。が、誰だか思い出せない。

「あなた、運がいいのね。命に別状はなかつたし、問題ないわ。とりあえず治療は終わつたけど、当分は安静にしておく」と。傷は縫合しておいたけど、塞がつたわけじゃないから

起き上がつて時計を見ようとするが、からだが動かない。

「なあ、今、何時だ？ あれからどれくらい経つたんだ？」

「私が葉月に呼ばれてから、六時間経つてるわ。今は午前一時二十分よ」

「そつか……ありがとう。助かった」

ほつと胸を撫で下ろす。飛行機発つにはまだ時間がある。

「今は麻醉がかかってるけど、後一時間くらいで動けるようになるわ。何する気か知らないけど、無理はしないようにしなさい」

姉さんから何か聞いたのか、それとも俺の雰囲気から察したのか、

彼女は俺が動くのがわかっているようだ。

「止めないのか」

「もうこれくらいは慣れっこ。武偵にはよくいるのよ。身体に穴空いても、無理して動こうとする人が。あなたも、何か事情があるんでしょ？」

「……ああ」

『事情』か。

何なんだろ。俺の事情つて。

俺は……

「じゃあ、私はもう行くから」

「待ってくれ。俺は松永秋空。探偵科一年だ。お前は？」

椅子から立ち上がりつた彼女を、言葉で引き止める。

「島村・M・瑞樹。医療科一年。一応、あなたと同じクラスなんだ

けど

「え？ あ、悪い……」

なるほど。道理で見覚えがあつたわけだ。

「はあ……後は葉月に任せると。それじゃ

「え？ あ、ちょ……」

島村はそのまま、さつと出て行ってしまった。

礼を、言いそびれた……後、医療費とかどうすればいいんだ。

「秋空」

入れ替わるようにして、姉さんが入ってきて、椅子に座る。

「姉さん……」

「……話してくれる？ 何があったのか

「……ああ」

それから、姉さんには全てを話した。

バスジャックの日、何者からか琴音に連絡があつたこと、「シシリカネ」を要求されたこと、敵は大量にいて、人間ではなかつたこと、琴音と喧嘩したこと、そして今日、少女に襲われたこと。姉さんは俺が話すのを、ずっと静かに聞いていた。

「信じてもらえるかはわからないが、これが全てだ」「信じるよ」

「え?」「

「こんなに、あつさり?」

「だつて、秋空の言つことだもん。私は信じる」

「……ありがとう」

「それで、秋空は今日、飛行機に行くつもりなの?」

「ああ」

「それは、どうして?」

「姉さんは俺を止めるよつなことは言わず、質問を重ねてきた。

「……わからない」

「それは、俺の正直な答えだった。

「わからない?」

「行くさ。飛行機には。状況を考えれば当然だ。あの二人が死んだら、俺が孤立するからな」

「それは、本当に秋空の本心なの?」

「……それが、わからないんだ」

「わからぬえ。

俺は、何のために……何のために、やつらの元に行くのか。

「自分が助かりたいだけなのか。それとも、琴音を守りたいのか」  
自分が助かりたいだけだと、そう思つていた。もしかしたら、そういう思い込もうとしていたのかもしれない。

でも、もし、仮に、琴音があのゾンビ達に囲まれて殺されそうになつていたとして、俺は……それを見捨てて逃げられるのか?  
多分、無理だ。

けど、それで死ぬのはごめんだ。

俺は、一体何のために闘うんだ？自分のため？それとも……  
「死にたくない。でも琴音が死ぬのも、同じくらい耐えられない。  
どっちが本当の俺なのか……」

「わからない。皆田、答えは見当たらない。

何が正しくて、何が間違っているのか。

思考は同じところでぐるぐる回り続ける。永遠の堂々巡りに、徐々に首は絞められていく。

「バカだねー。秋空は。頭が固いよ

「今更だな

片や偏差値五十強のバカ、方や『ホームズの再来』とまで呼ばれる天才。姉弟とは思えない、歴然の差だ。

「それはね。きっと両方、秋空の本心なんだよ」

「両方？」

「そう。秋空は死にたくないって、琴音ちゃんも死なせたくないんだよ」

「それは……それが出来ればいいだろ？けど……」「……」

でもその通り、かもしだれない。

しかしそれは、あくまで理想論だ。

「ね、簡単でしょ？じゃあ、何で秋空は、こんな簡単なことに気づけなかつたんだと思う？」

「いや、まだそれが俺の本心と決まつたわけじゃ……」

「それはね……」

姉さんは俺を無視して、ビシッと人差し指を立てた。

「秋空が多分、無意識の中に『一択』を作つてたからじゃないかな

？」

「一択？」

「そう。自分が生きて帰るか、琴音ちゃんを死なせないか。秋空は、その両方を同時に達成することは出来ないって、心のどこかで見限つてたんじゃないかな？」

「そのせいで、『一択』が生まれたって？でも、両方助かるのは、

実際かなり難しいだろ」

「そうやって、すぐに自分の可能性を見限るから、辛くなるんだよ。姉さんの言葉は、正直賛同しかねる部分が多い。でも何故か、それは俺に重くのしかかつてくれるよ。そんな重圧がある。

「両方やつちやえばいいんだよ。私は、秋空なら出来ると思ひよ」「何を根拠に……」「武偵は、根拠のない推理を糧にする生き物よ。時には勘も重要なの」

「勘かよ」

そういうえば、琴音が俺をチームに入れたいと思ったのも、勘だったな。

つぐづぐ、女の勘はあてにならない。

「秋空はさ、琴音ちゃんのこと、好きなの？」

「はー?」

思わぬ問いに、俺は起き上がろうとして、無理だった。

「そ、それはない!絶対ない!」

「ホントに?」

「ああ。あいつのことは、女友達にしては珍しく話が合ひやつへりいにしか思つてない」

「じゃあ何で、秋空はそんなんに、琴音ちゃんのことを見つけていたの?」

「……わかんねーよ」

「わかんねえ。何もかにも。

全てに答えを出すには、後数時間という時間はあまりにも短い。

「……そうなのかもしれないな」

「へ?」

だから俺は、とりあえず保留することにした。

「琴音のこと。気にはなるかなって」

「わからないけど。

でも、俺がここまで誰かのことを考えるのは、姉さん以外には琴

音が初めてだ。

だから、『気になる』で、とつあえず保留だ。  
嫌いじゃないしな。

「多分勘違いなんだろ? けど、とつあえずやつこいつ」としておへ

「だつたら、やるこひとは一つよね」

「……そうだな。そうだよな」

何もわからないままだけど。

琴音が気になるから、この気持ちを確かめたいから、あいつと生きて帰る。

それでいい。今は、それで。

「うん。だつたらもう、私からは何も言わないよ」

「ああ。……ありがと」

「あ、琴音ちゃんもいいけど、久遠ちゃんのことを忘れちゃダメだよ?」

「わかつてるよ」

まだ、色んな疑問は保留してあるけど。

それらを確かめるために、ひとまず、俺にはやるべきことがある。

「姉さんはここで待つてくれ」

「え? 何で? 私も着いていくよ」

「駄目だ。姉さんは巻き込めない。姉さんに誓おう。俺は琴音と久遠を連れて、必ずここに帰つてくる。だから、姉さんは待つてくれないか?」

「……もう、急に調子づくりんだから」

姉さんは顔を赤らめて、目をそらした。

「わかつた。でも、危なくなつたら連絡して? これも約束」

「ああ」

もう、大分麻酔は解けている。

俺は、差し出された姉さんの小指に、そつと自分のそれを絡ませた。

何でとんでもないことを言つてんだ俺はっ！！

『氣にはなるかも』だと？「わあああ！氣持ち悪ッ！思い出したら寒気がしてきた。ていうか姉さん、何で話すんだよ！

「だからな琴音お前が姉さんから何を聞いたのかは知らんがそれは手術で体力を著しく喪失した俺が冷静な判断能力を失った状態の妄言であり決して俺の平常の考えとは一概には言えないんだ」

早口で言つて、登り坂を全力で走り抜けたよつてせえぜえと息をつく。

「？ 何慌ててんの？」

琴音は不思議そうな表情で俺を見ていた。

あれ？ この様子だと……俺があんなこと言つたのは、聞いてないのか？

「い、いや、すすまない少し取り乱してしまった」

何だ。焦つて損した。

でもよかつた。話してないみたいだ。流石に姉さんでも、それくらいの分別はつくみたいだな。ははは。

「そ、それでね？……告白の、返事なんだけど」

顔、いや身体中を真っ赤に染めながら、琴音はもじもじと、意味不明な発言をした。

誰だ？ 分別がつくなんて言つたの。

「ちょ、ちょっと待て。何？俺の知らないこと」ひでじひで話が飛躍してるの？」

「そ、その、ね？ 私、その話を聞いたとき、嫌じゃなかつたの」

「聞けよ」

『その話』って何？ 一体何を話したんだ？

俺が言つたのは『氣になるかも』までだろ？ それがどうして告白になるんだ。

「でも……私と秋空は、チームメイトだし、わ、私自身、あんまり

恋愛には興味ないっていつか……」

一人で暴走しだした琴音を、俺はちょっと遠い田で傍観する。

今は何を言つても聞かないだろ。とりあえず、聞こい。

「そ、それにな？前も言つたけど、私達、まだお互いあんまり知らないでしょ？だ、だから……その……お、お友達から、どうでじょうか？」

……あ、頭が痛くなってきた。

「あのな琴音……」

「そ、そのつ、『ごめん。秋空は、私にとって、そういう対象では全然ないと』いうか……」

知つてるよ。

「琴音。お前は一つ誤解している。まず、俺はお前に告白した覚えはない」

「へ？」

田をぱちくりさせて、琴音は赤い田で俺を見ている。

……その下には、うつすらと隈が見えた。

「それともう一つ。これは、お前を見捨てようとした俺に言つ資格はないのかもしない。でも、それでも言わせてもらひ。俺とお前は、もうとっくに友達だ」

「え……」

「少なくとも、俺はそう思つてる。だから言わせてくれ。本当に、すまなかつた」

頭を下げる。

謝つてすむ問題ではない。それはわかってる。

結果的に、俺は琴音と久遠を救つたが、それは物理的な、身体的な話の上でだ。

心の傷は、琴音の中に深く残つた。

俺は、琴音のチームメイトだ。琴音が俺を信じ、俺はそれを裏切つた。

俺が琴音の意見に反対し、事実上チームを離れたとき。

琴音は……どんな気持ちだったのか。

「……いいわよ。私、あんたに裏切られたとは思っていないし」

「でも……」

「秋空は腕を失つてまで、私達を守ってくれた。むしり、謝るのはしつけよ。本当にごめん」

琴音は俺の脇になつた腕に触れて、涙を落とした。

「琴音……」

顔を上げて、琴音を見る。髪に隠れて、表情は読み取れなかつた。「わかつてたのよ……無謀だつて。勝てないつて。でも、あそこで引き下がるのは、私のプライドが許さなかつた。けど、私のつまらない意地のせいで……つべ、秋空が……」

「つまらなくなんかねえよ」

「つまらないものか。

「勝てないつて、無謀だつてわかつて、それでも遠山達を助けたいつて思つたんだろ？それは、普通じゃ出来ない、勇気ある選択だと愚つ」

「……勇氣と無謀は違つわ

「ああ。そうだな。でもこいつやって帰つてこれたんだ。これは……勇氣でいいんじゃないかな」「う……」

俺は、琴音の頭に左手を回した。

「琴音……ありがと」

「う、うああああ」

それからじしまじまへ、琴音は俺の腕の中で泣きじゅくつた。

**無機の右腕（後書き）**

何で秋空生きてんの？…と、書いてる私ですり泣きましたww

ジャックと出会つてから、七日が経つた。

その間私は、ジャックの代わりに家事をしたり、本を読んだり、ジャックと話をしたり、色々なことをして過ごした。

ジャックはジャックで、主に家の前の田畠を耕して一日を過ごしている。ジャックの家は森の中にあり、誰も来ないため勝手にそこ

の土地を使つているらしい。

たまに、この家に何人かの男達が襲つて来ることがあった。彼らは私のことをしきりに『魔女』と言つていたが、おかしい。私、魔法は使えないんだけどな。

で、そんな人達にどうやつて帰つてもらうのかといつと……ジャックが全て追い払つてくれるのだ。ジャックは強い。若い何人もの男達が、太い剣を持つて襲いかかるのを、老人が細い刀で、涼しい顔で捌いている光景は、何だかシユールだ。

「お帰りなさい。お疲れじや」

今日も『始末』を終えて帰つてきたジャックに、笑顔で告げる。

「ただいま

「夕餉にするかの?」

「ああ。腹が減つて、もう力が出ぬわ。……じゃが、その前に……」

「あひゅつー?にや、にやに……」

いきなり両方の頬っぺたを摘まれ、横に伸ばされた。

「そのしゃべり方は止めよと言つたはずじゃが?」

「いひやい。いひやいのら!」

「ほーれ。何を言つとるのかさつぱりじやぞ?」

「ふあーにやーひえー!」

「くつくつく」

ジャックは意地悪だ。いつもこいつやって、私が困つてゐるのを見て、悪そうに笑う。

いいじゃないか。」の口調だつて、自分はしてゐるへんに、なぜ私はダメと言うのか。

やつぱり、ジャックは意地悪。

「さて、そろそろ飯にするか」

飽きたのか、ジャックは私の頬から手を離した。

「ジャックへ？」

恨めしそうな目でジャックを見ても、びく吹く風という顔だ。

「はいはい。悪かった。そうだ、今田煙で採れたキュウリをやろう。

「キュウリ」ときでは、私は釣られぬ

全く、「冗談にしてももう少し言ひようがあるだらう」……

「」には、私とジャック以外に、『ラ・ピュセル』と名乗る人が、たびたび訪れる。

綺麗な女人で、ジャックの友達らしい。畑仕事を手伝つたり、私の遊び相手になつてくれたりする。たまにジャックと木で出来た剣で闘つこともあつた。

「ラ・ピュセルは、なにゆえいつもここに来るのじゃ？」

ある日、近くの川で一緒に洗濯をしているラ・ピュセルに、私は聞いた。

ちなみにジャックは山のどこかで狩りをしている。リアル桃太郎状態だ。あれ？ 芝刈りだつたつけ？

「どうしてと言われてもな。友達の家に行くのに、特に理由はいらないと思うが」

「うーむ。そうじやな」

「興味なさそうだな……そういうお前は、ジャックの何なんだ」

私は、その答えに詰つた。

「……私、ジャックの何なんだ？」

「牢獄に囚われていたところを、ある男に救われて、その後保護されたらしいな。お前も魔女容疑か？」

「魔女？私は魔女ではないが？」

「そんなことはわかつてゐる」

「ゴシゴシと板の上の布を擦る。

「『お前も』といふ」とは、お主は魔女なのか？」

「そうだ。元は仕立て上げられただけなのに、それが本当に魔女になつていては、ただの笑い話だがな」

「?? 仕立て上げられた？」

「私の母は聖女と呼ばれていたが、そのときに聞いた天路のせいでの魔女に仕立て上げられた。本当は魔女ではないのにな」

「ふぐやつなかでいじじょうなのだな」

「そういうことだ」

「ゴシゴシ。ゴシゴシ。

「もしかして……たまに家を襲いに来る者どもが、私をしきりに魔女だと叫うのは……」

「ああ。やはり、そういうことか」

「よし。洗濯物終わり。

「ところで、今の会話、やつらに聞かれてないだらうか  
やつらへ誰のことじや？」

「周りを見てみる」

ラ・ピュセルの言ひように、周りを見てみる。そこには、フードを被つた人達がたくさんいた。

「……私の分の洗濯物を頼む。彼らを、片付けてくる」「うむ。頼んだぞ」

「偉そうだな……まあいいか」

洗濯が終わる頃には、辺り一面が氷土と化していた。

「ジャック。それは？」

「ん？ これか」

ジャックは振り椅子に座つて、真つ黒くて、米粒ほどの大きさの、

何かの欠片のようなものを眺めていた。

「神様になれる、金属」

「え？」

神様？ 金属？ わけがわからず』に問い合わせ返す。

「……冗談じや。 ただの鉱石じやよ」

「ふーん。 そんなもの、どうするんじや？」

「ある者に、渡さねばならんらしい。 今はわしが預かっているだけじゃ」

「ただの鉱石を？」

「何だ？ これが気になるのか？」

ジャックの言う通り、私はこれに惹かれるものを感じていた。

「変わり者だな。 いや今更か。 悪いが、これはやれんぞ」

「わかつてある。 預かっておると言つたな？ どんなやつなのじや？」

「くく。 もし会つたら交渉するつもり、か」

ジャックは私の考え方などお見通しのようで、でもその人について話してくれた。

「何というか、そいつは生真面目なやつでな。 脳病者のくせに、自分と向き合つことの出来るやつじや」

「自分と……向き合つ？」

「そう。 自分が何をすべきか、したいのか、自分がしてしまったこと、そういう『自分』向き合える。 答えがどれだけ遠くても、絶対に考えることを諦めない。 でもそのくせ、戦場に立つと不器用で、脳病。 そんなやつじや」

「……よくわからぬ。 『弱いやつ』と、結論してもよいのか？」

「いや、あいつはわしより段違いに強い。 ただ、非常に脳病じや」

「？？ 全く、人物像が見えてこない。 真面目で、脳病で、不器用で、強い？」

「つて、ジャック。 私を混乱させて楽しんでおるのではないか？」

「ん、んー？ 最近耳が遠くてのー。 よく聞こえんわい」

「ジャックー？」

ジャックとの、リ・ペゴセルとの日常が、口々送つのひみつに流れていぐ。

これは、夢だ。そして、妾の記憶。

……走馬灯だったり、どれだけよかつたか。

見たくもない。ここから先は、絶望しかない。

でも、どうせつても、視界からそれが消えることはない。

妾はこいつ、解放されるのじや？

## 装備科の本領

「でも、何で俺生きてるんだ?」

「ふいに、ずっとと思っていた疑問を口にする。

琴音はまだ目を真っ赤に泣き腫らしているが、とりあえず泣き止んだようで、今は俺から離れていた。

「え? どういうこと?」

「いや、そのままの意味なんだが……あの傷で、右腕だけですむのは、明らかに変だろ」「

琴音は言いすらそうに田をそらすと、「

「……助けられたのよ。あいつに」

「助けられた? 誰に?」

聞き返しながら、俺はそれが誰なのか、大方予想出来ていた。

「あの、偽者よ」

「やつぱりな……何があつたんだ?」

「気づいてたの?」

「俺の自爆が右腕一本ですんだのは、多分あいつが爆発の衝撃を、自分の身体で抑え込んだからだ。だろ?」

琴音は頷いた。

「なら、その後も、あいつが何らかの方法で俺を救つていってもおかしくはない」

「あいつは、あんたにある薬を飲ませたわ。何か、『死を延長する薬』とか言つてたけど、私にはさっぱりだった

「他には?」

「『確かに届けた』。そう、伝えてくれつて言われた

「……意味不明だな」

もう、意味不明なことが多すぎて、あんまり気にならなくなってきた。

「それと、あいつが使つてた刀、あんたにあげるつて

「い、いらねえ……完全に嫌味じやねえか」

俺に片手で剣を振るえと？

「まあそれで、あの偽者に飲まされた薬のおかげで、助かつたわけだな？」

「それもそうだけど、少しは私のことも気にかけてほしいかな」  
琴音ではない、誰かの女の人の声がして、そちらを見ると、

「島村……」

扉を背に、島村が立っていた。

「呆れたわよ。まさかそんな無茶するなんて。今回は助かつたけど、  
次は絶対にないわ。断言する」

「俺、そんなに酷かつたのか？」

「当たり前よ。全身打撲に肋骨骨折、それに胸部大血管複数損壊。  
ギネス級に成功率低い手術だつたわよ。成功したけど」

「そうだつたのか……それは、すまなかつた」

右腕ですんだのは、多分本当に幸運なことなんだろう。  
「全く……仮にもクラスメイトの身体に一回もメス入れさせられた、  
私の身にもなりなさいよね」

「え？ 俺の手術、島村が？」

「そうよ。まあそんなことはどうでもいいんだけど……あなた、そ  
の義手はもう付けた？」

俺にとつてはどうでもよくないんだが……

「付けてないって顔ね。それ、すごいわよ」

俺は不気味な義手に目を落とした。

「……この、先 者の腕がか？」

「私もそれは思つたけど、製作者の前では言わないであげなさい  
「え？」

顔を上げると、いつの間に部屋に入ってきたのか、一人の女の子  
がいた。見覚えがある。装備科の平賀だ。爆薬の補充で、いつも世  
話になつている。

「さすがに……先 者の腕は、ショックなのだ……」

「ひ、平賀？ 何で？」

「何でって、その義手を作ったのが、あややだからだー。ここのここののは当たり前なのだ！」

「そ、そうなのか」

装備科のやつは義手も作れるのか……いやいや。そういうじやなくていつの間に？

とても気になつたが先に礼を言つておぐ。

「ありがとな」

「礼を言つのは、それを実際につけてからにするのだー。まう、まずはこのチョーカーを付けて……」

「チョーカー？ おお、ホントだ」

チョーカーは義手の隣に置かれていた。

「ん？ 何だこれ？ 何かついてるぞ？」

何か、黒い線が何本かついている。内一本は、先に鉤状のものが取り付けてあるようだ。

「それを耳に引っかけて、こつちは義手に接続するのだ！」

「え？ ど、どれがどれ？」

「仕方ないなー。あややに任せせるのだ！」

仕方ないと言いつつも、俺に怪しげな器具を取り付けていく平賀は、どこか楽しそうだ。

「よし。これで後は、スイッチオン」

「？ 何も起きないぞ？」

「ぬつふつふ。そう思うなら、ちょっと右手を動かしてみるのだー。」

「ああ、これ筋電義手なのか。そりゃまたハイテクな……！？」

平賀の言つ通り、義手を動かしてみたが……おいおい。確かにこれはヤバい。装備科の本領を見たぞ。

「え、何？ どうしたの？」

そして琴音は、この義手のすゞさがわからぬいらしく。まあ、実際に動かしてゐるわけじやないから当たり前か。

「琴音。」Jの義手は筋電義手って言つてな。俺の腕の切断面から電気信号を読み取つて、動けるんだ」

「？ 動いてるじゃない」

「いや、これは異常だぞ。何せこれ、普通の腕とほとんど操作性変わらないんだからな」

「え、ええっ！？」

俺は鈍い鋼色に光る指を、握つたり開いたりしてみせた。「肘も、手首もちゃんと曲がるし、指だつて自由に動く。Jいつもやつて……」

俺は枕をつかんで、

「物もつかめる。Jこれはすごいぞ」

ただし、自分の腕のように動かせるのに、感覚は全くないため、その辺のギャップが気持ち悪い。だが、慣れれば平氣だろう。

恐らく、俺の脳波を直接読み取つていいんだね。次世代型義手、と言つても過言ではない。

「義手について出つ張りで、パソコンとUSB接続出来るよつとしてるのだ。それで最大握力などの設定が出来るのだ」

「マジか。すげえな」

「バッテリー式だから、充電もそこですることになるのだ。バッテリーが切れたら太陽光発電になるから、使い過ぎには注意するのだ！後、精密機械だから、雨天での使用は控え、定期的にあややにメンテを頼むのだ！」

「了解」

しかし、まさか平賀がこんなにJにやつとはな……

「お代は葉月さん頂いたから、もうこりゃないのだ。ではでは、あややは次の仕事があるからJの辺で」

「え？ ちょ、今さりげと……」

「サラダバー！」

ええー？ い、行つちまつた……急に出て来て急にどつか行つたな

「一応、詳しい取説を平賀から預かってるわ」

「おお、サンキュー」

島村から、一枚の紙切れを渡された。四つ折りされていて、開くと中には、平賀の手書きで色々書き込まれている。読みにくい。「まあ、私から言つ」とはもつないわ。後何日か安静にしてれば退院出来るでしょう。」「ああ、ありがとうな。一回も助けてもらひて」「はいはい。じゃあね。また教室で会いましょう」いつも通り素っ気ない態度で、島村は病室から出て行つた。

「わ、私も、もう行くわ」

琴音もそれに習おうとしたのか、椅子から立ち上がつた。「え? 何でさ。もうけりょうといろよ。それとも何か用事か?」

「う、うん」

「そつか……」

寂しいが、それなら仕方ない。退院も近いみたいだし、少しくらいの暇は我慢しよう。

「あ、そうだ」

思い出したように、琴音は口で立ち止つた。

「どうした?」

「ノーライフキングは今、私の家にいるわ。実は彼女自身は、特にこれといった犯罪はしていないし。それで……あんたと話したいんだつてさ」

「…………わかつた」

若干気を重くしながら、俺はため息をついた。思ひ浮かべるのは、一人の少女の姿。

そうだった。まだこの事件は、何も解決していないじゃないか……

## 装備科の本領（後書き）

某一方通行さんと差別化したかつたけど、チョーカー以外思いつきませんでした・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2915y/>

---

緋弾のアリア お人よしな梶雄

2012年1月14日20時46分発行